岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 198

井手天原遺跡
総社遺跡

一般国道429号道路改築に伴う発掘調査Ⅲ

2006

岡山県教育委員会

序

本報告書は、一般国道429号道路改築に伴って平成13年度から平成16年度にかけて実施した、総社市井手地内の井手天原遺跡と同総社・金井戸地内の総社遺跡の発掘調査の記録です。

一般国道429号は倉敷市から総社市を通り、県北の津山市、美作市を経由して、兵庫県に至る主要幹線道路の一つです。また、山陽自動車道倉敷インターチェンジや岡山空港を結ぶ上で重要な役割を担っています。特に総社・倉敷区間では、交通渋滞の解消や歩行者の安全確保のためにも早期の改良が望まれています。

岡山県教育委員会では、総社市内および旧山手村内の工事区に所在する遺跡の保存について担当部局と協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難な遺跡については平成４年度以降にやむをえず事前の発掘調査を実施し、記録保存の措置を取ってきました。

そして、すでに調査の終了している一般国道180号以南の総社市および旧山手村内の７か所の遺跡と１か所の散布地につきましては、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115・156として、それぞれ平成９・13年度に刊行しています。本書は、一般国道429号道路改築に伴う発掘調査報告書として３冊目の刊行となります。

本報告にかかる井手天原遺跡は、総社平野の中心部に位置し、主に古墳時代前期から中世にかけての集落跡を検出しています。狭い調査範囲でしたが、古墳時代前期では４軒、同後期で２軒の竪穴住居を検出しました。特に、前期の住居は、いずれも残存状況がよく、検出面から床面まで１ｍ近く残る例もあり、住居構造を解明する上でも貴重な成果であります。平安時代末から鎌倉時代の遺構では、多数の柱穴や建物群の一角から土師器・鉄器の副葬をもつ２基の屋敷墓と見られる墓の検出が注目されます。また、総社遺跡では古代の水田層や弥生時代中期以降の多数の溝群を検出しています。

これらの調査成果を掲載した本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、吉備地域の歴史解明や文化財保護の一助として、活用される事ができれば、幸いに存じます。

発掘調査の実施と報告書の作成にあたりましては、岡山県倉敷地方振興局、総社市教育委員会等の関係者各位、並びに、地元の方々から多大な御理解と御協力を賜りました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

平成18月２月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　松　本　和　男

例　言

1　本書は、一般国道429号道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県倉敷地方振興局（現備中県民局）建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが、平成14年１月から平成16年９月までの間に発掘調査を実施した井手天原遺跡・総社遺跡の調査報告書である。

2　井手天原遺跡は総社市井手1250-3ほか、総社遺跡は同市総社1766-1ほかに所在する。

3　遺跡の名称変更を行った。調査時名称の金井戸遺跡を井手天原遺跡と総社遺跡に変更している。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156における名称変更と総社市教育委員会による周辺部発掘調査の成果等による遺跡名称をふまえている。

4　発掘調査は、平成14年１～３月に条件整備の整った総社遺跡５・12区を光永真一・松村さを里が、平成14年４～12月に総社遺跡７区ほかを内藤善史・徳田正紀・渡邊恵里子・福井優が、平成16年４～９月に井手天原遺跡と総社遺跡３区を山磨康平・二宮治夫・亀山行雄・重根弘和が担当し、実施した。面積は井手天原遺跡1,580㎡、総社遺跡6,860㎡である。

5　報告書の作成は、平成16年10月から平成17年３月まで岡山県古代吉備文化財センターにおいて山磨が担当した。

6　一般国道429号道路改築に伴う発掘調査報告書の第３冊目に当たる。

7　本書の編集は山磨が担当し、執筆は山磨・内藤・二宮・光永・亀山・重根が分担した。

8　井手天原遺跡８区の土壙墓出土の人骨については、岡山大学大学院医歯学総合研究科助教授大塚愛二氏に鑑定を依頼した。

9　遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を受けた。

10　本書に関連する出土遺物・図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標Ⅴ係（日本測地系）の座標北である。

2　本書に掲載の遺構および遺物実測図の縮尺は明記してあるが、基本的には次のように統一している。

遺構

竪穴住居（1/60）　掘立柱建物（1/60）　土壙・土壙墓（1/30・1/40）　溝（1/30・1/40）

遺物

土器（1/4）　土製品（1/3）　石器・石製品（1/2・1/3・1/6）　金属製品（1/2）

玉類（1/1）

3　遺構配置図のなかに示す遺構名は、次のように略称を用いた。

竪穴住居：**住**　　掘立柱建物：**建**　　土壙：**土**　　柱穴列：**柱**

4　本書に掲載した遺物番号については、金属器、石器・石製品、土製品に分けて通し番号をつけ、土器以外については、次の略号を付している。

金属製品：**M**　　石器・石製品：**S**　　土製品：**C**

5　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、口径が全体の1/6以下のものである。

6　本書記載の遺構図中の被熱範囲等に付したトーンなどは、基本的に次のとおりに統一している。

被熱・焼土面　　焼土塊　　炭

（熱影響が弱い）　（熱影響が強い）

7　遺構の堆積土層・土器の色調は『新版標準土色帖』によるが、マンセル表色系の値は省略した。

8　本書に掲載した第2・5・73・74図は、国土地理院発行の1/25,000地形図の「総社東部」・「倉敷」を複製し、加筆したものである。

9　本書に用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。土器編年については、岡山県教育委員会が平成7年に発行した「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98に基づいている。

本 文 目 次

序

例言

凡例

目次

第１章　経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1

第２節　発掘調査の体制 …… 3

第３節　地理的・歴史的環境 …… 5

第２章　井手天原遺跡 …… 9

第１節　調査の概要 …… 9

第２節　古墳時代の遺構・遺物 …… 11

１　竪穴住居 …… 11

２　土壙 …… 20

３　遺構に伴わない遺物 …… 21

第３節　古代の遺構・遺物 …… 22

１　掘立柱建物 …… 22

２　遺構に伴わない遺物 …… 25

第４節　中世以降の遺構・遺物 …… 26

１　掘立柱建物 …… 26

２　柱穴 …… 28

３　土壙 …… 29

４　土壙墓 …… 33

５　溝 …… 35

６　水田 …… 35

７　遺構に伴わない遺物 …… 36

第３章　総社遺跡 …… 37

第１節　調査の概要 …… 37

第２節　総社調査区の遺構・遺物 …… 40

１　柱穴列 …… 40

２　土壙 …… 40

３　溝 …… 42

４　遺構に伴わない遺物 …… 48

第３節　金井戸調査区の遺構・遺物 …… 49

１　掘立柱建物・柱穴列 …… 49

２　土壙 …… 49

３　溝 …… 50
４　水田・条里 …… 53
５　遺構に伴わない遺物 …… 54
第４章　まとめ …… 55
第１節　発掘調査の成果 …… 55
第２節　高梁川東分流の流路について …… 56
遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称新旧対照表
井手天原遺跡観察表 …… 61
総社遺跡観察表 …… 67
遺構名称新旧対照表 …… 70
図版
報告書抄録

図目次

井手天原遺跡

第１図　遺跡位置図（1/1,250,000） …… 1
第２図　路線図（1/25,000） …… 2
第３図　調査区配置図（1/3,000） …… 4
第４図　基本層序図（1/50） …… 4
第５図　周辺遺跡分布図（1/40,000） …… 7
第６図　調査区配置図（1/3,000） …… 9
第７図　遺構全体図（1/300） …… 10
第８図　古墳時代の遺構配置図（1/800） …… 11
第９図　竪穴住居１（1/60） …… 11
第10図　竪穴住居１断面（1/60）
・出土遺物（1/4・1/2） …… 12
第11図　竪穴住居２（1/60・1/30） …… 13
第12図　竪穴住居２出土遺物①（1/4） …… 14
第13図　竪穴住居２出土遺物②（1/2・1/1） …… 15
第14図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/4）
…… 16
第15図　竪穴住居４（1/60・1/30）
・出土遺物（1/4） …… 17
第16図　竪穴住居５（1/60・1/30）
・出土遺物（1/4・1/3） …… 18
第17図　竪穴住居６（1/60・1/30） …… 19
第18図　竪穴住居６出土遺物（1/4） …… 20
第19図　土壙１（1/60） …… 20
第20図　土壙１出土遺物（1/4・1/3） …… 21
第21図　土壙２（1/30） …… 21
第22図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2） …… 21
第23図　古代の遺構配置図（1/800） …… 22
第24図　掘立柱建物１（1/60） …… 22
第25図　掘立柱建物２（1/60） …… 23
第26図　掘立柱建物２出土遺物（1/4） …… 23
第27図　掘立柱建物３・４（1/60） …… 24
第28図　掘立柱建物５（1/60）・出土遺物（1/4）
…… 24
第29図　その他の出土遺物（1/4） …… 25
第30図　中世以降の遺構配置図（1/800） …… 26
第31図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/4）
…… 26
第32図　掘立柱建物７（1/60） …… 27
第33図　柱穴出土遺物①（1/4） …… 27
第34図　柱穴出土遺物②（1/3・1/2） …… 28
第35図　柱穴断面（1/30） …… 28
第36図　土壙３（1/30） …… 29
第37図　土壙４（1/30） …… 29
第38図　土壙４出土遺物（1/4・1/2） …… 30
第39図　土壙５～８（1/40・1/30）
・出土遺物（1/4・1/2） …… 31

第40図　土壙９・10（1/30）
・出土遺物（1/4・1/2）…… 32
第41図　土壙11・12（1/30）…… 33
第42図　土壙墓１（1/30）・出土遺物（1/4）‥ 33
第43図　土壙墓２（1/30）・出土遺物(1/4・1/3)
…… 34
第44図　溝１（1/30）…… 35
第45図　水田１断面（1/60）
・出土遺物（1/4・1/2）…… 35
第46図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 36

総 社 遺 跡

第47図　基本層序図（1/80）…… 37
第48図　全体図①（1/500）…… 38
第49図　全体図②（1/500）…… 39
第50図　柱穴列１・２（1/60）…… 40
第51図　土壙１（1/40）…… 40
第52図　土壙２～６（1/40）
・出土遺物（1/4・1/2）…… 41
第53図　土壙７・８（1/40）…… 42
第54図　溝５～13・15～17・19配置図（1/100）‥ 42
第55図　溝１～６断面（1/80・1/30）
・出土遺物（1/4）…… 43
第56図　溝７～15断面（1/30）・出土遺物（1/4） 44
第57図　溝16～19断面（1/30）
・出土遺物（1/4・1/2）…… 45
第58図　溝20～29・34断面（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 46
第59図　溝30・31・33・35～38断面（1/30）
・出土遺物（1/2・1/4）…… 47
第60図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 48
第61図　掘立柱建物１・柱穴列３（1/60）…… 49
第62図　土壙９・10（1/40）・出土遺物（1/4）
…… 50
第63図　溝39・40断面（1/40）・出土遺物（1/4） 50
第64図　溝41（1/40）…… 50
第65図　溝42断面（1/60）…… 51
第66図　溝43～45断面（1/30）…… 51
第67図　溝46～48断面（1/60）・出土遺物（1/4） 51
第68図　溝49・50断面（1/30）・出土遺物（1/4） 52
第69図　溝51・52断面（1/30）・出土遺物（1/4） 52
第70図　溝53・54断面（1/60）・出土遺物（1/2） 53
第71図　水田１断面（1/60）・出土遺物（1/4）‥ 53
第72図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）…… 54
第73図　高梁川東分流図①（1/30,000）…… 56
第74図　〃　②（1/30,000）…… 57

図 版 目 次

図版１　１　遠景（北方久米池古墳墳頂から）
２　遠景（東方長良山から）
３　８区　全景（南から）
図版２　１　竪穴住居１（北西から）
２　竪穴住居２（北西から）
３　竪穴住居３（北東から）
図版３　１　竪穴住居１柱穴断面（南東から）
２　竪穴住居２内土壙（南東から）
３　竪穴住居２内出土遺物（南東から）
４　竪穴住居２調査中（北から）
５　竪穴住居３検出状況（北東から）
６　竪穴住居３遺物出土状況（北から）
７　竪穴住居３壁面出土遺物（北西から）
８　竪穴住居３土層断面（東から）
図版４　１　竪穴住居４（北東から）
２　８区　北端下がり状況（南から）
図版５　１　１区　全景（北から）
２　竪穴住居５（北東から）
３　竪穴住居５内カマド（東から）
図版６　１　竪穴住居６埋土状況（東から）
２　竪穴住居６（南西から）
３　竪穴住居６内カマド（南西から）
図版７　１　８区　古代・中世全景（北から）
２　掘立柱建物１（北から）

3　掘立柱建物５（東から）
図版８　1　掘立柱建物６（東から）
2　掘立柱建物３・４（北から）
3　土壙４（東から）
図版９　1　土壙10土層断面（東から）
2　土壙10（北から）
3　土壙９遺物出土状況（北東から）
4　土壙９（北東から）
5　土壙11（北東から）
6　土壙８（東から）
7　土壙７（北東から）
8　土壙２（南から）
図版10　1　土壙墓１（南から）
2　土壙墓１遺物出土状況（東から）
3　土壙墓１完掘（南から）
図版11　1　土壙墓２（南西から）
2　土壙墓２遺物出土状況（南から）
3　土壙墓２完掘（北から）
図版12　1　７区北半　上層全景（南から）
2　７区　溝４（南東から）
3　７区北半　完掘状況（南から）
図版13　1　14区北半　溝群（南から）
2　14区　溝22・23・36付近（南から）
3　14区南半　溝群（北から）
図版14　1　10区南半（南から）
2　11区北端　溝群（南から）
3　12区　掘立柱建物１・柱穴列３
・土壙９・10（北から）
図版15　1　３区　全景（北から）
2　３区　溝53・54（北東から）
図版16　井手天原遺跡出土遺物①
図版17　井手天原遺跡出土遺物②
図版18　1　井手天原遺跡出土遺物③
2　総社遺跡出土遺物

表目次

井手天原遺跡観察表

竪穴住居一覧表 …… 61
掘立柱建物一覧表 …… 61
土壙墓一覧表 …… 61
土壙一覧表 …… 61
溝一覧表 …… 61
土器観察表 …… 62
金属器観察表 …… 66
石製品観察表 …… 66
土製品観察表 …… 66

総社遺跡観察表

掘立柱建物一覧表 …… 67
土壙一覧表 …… 67
溝一覧表 …… 67
土器観察表 …… 68
石製品観察表 …… 69
土製品観察表 …… 69

遺構名称新旧対照表 …… 70

第１章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と調査の経過

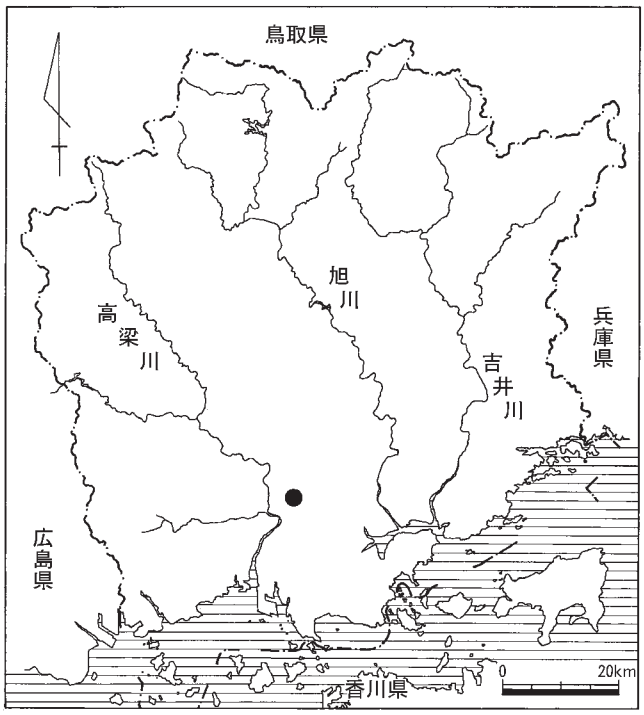
一般国道429号道路改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、倉敷市西坂から総社市井手までの区間を平成３年度から10年度にかけて断続的に実施し、平成８年度に都窪郡山手村（現総社市）内の前山遺跡および鎌戸原遺跡（註１）、平成12年度に総社市内の岡谷大溝散布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須畠田遺跡、井手見延遺跡および井手天原遺跡（註２）の報告書を刊行している。

その後、一般国道180号が総社バイパスとして路線変更されることになり、これに伴って一般国道429号も北へ約600ｍ延長されることになった。工事計画は、既存の道路を両側に拡幅するもので、事業対象面積は14,250㎡に及んだ。この部分には周知の金井戸遺跡が所在し、岡山県教育庁文化課（現文化財課）が平成10年度に送水管埋設工事に伴って実施した立会調査によって、南端に弥生時代の微高地、北半に中世の微高地が確認されていたほか、この付近は所在の確定しない備中国府の推定地にも含まれていた。このため、岡山県倉敷地方振興局（現岡山県備中県民局）は、文化財保護法第57条の３（現第94条）の規定による埋蔵文化財発掘通知を提出して、岡山県教育委員会と協議を行い、平成13年６月28日付けで、工事着手前に拡幅部分について発掘調査を行うことで協議が整った。

調査にあたっては、調査区の幅が７～８ｍと狭いため、調査中の排土置き場等として用地外に借地をする必要が生じた。このため、既存道の東西両側に所在する調査対象地を取り付き道路等によって14区に分け、南端の５調査区を除いた９調査区について、平成14年１月から12月の12か月間の調査工程と月別の借地計画を立て、これに基づいて調査に着手した。

平成13年度は、調査員２名が１月から３月までの３か月間調査を実施し、５区と12区の計1,180㎡において、希薄な遺構の残存状況を検出した。

平成14年度は、調査員３～４名が担当して、４月から12月の９か月間で、４・６・７・10・11・13・14区の計4,800㎡を調査した。調査対象地の北端に近い６・７・13・14区では、その北端で河道を確認し、弥生時代中期から古墳時代の溝群を検出した。一方、中央部の４・10・11区でも北寄りに同様の時期の溝を検出したが、いずれの調査区においても遺構は希薄で、後世の削平



第１図　遺跡位置図（1/1,250,000）

を受けていた。

残る５調査区については、平成16年度に調査員４名が担当して、４月から９月の６か月間で2,460㎡を調査した。２区と３区、９区と10区の境には現状で用水路が所在し、10区の調査結果と地形から旧河道の所在が想定されたため、３区についてはトレンチ調査と一部の拡張に留めた。一方、調査を先行した１・８区の全域と９区の南端では、１ｍ近い造成土の下に、安定した微高地と、その上に営まれた古墳時代初頭から中世の集落を検出した。２区については、９区における微高地の北へ向けての下がり方と造成土の厚さから、工事掘削は旧表土に及ばないと判断して調査対象から外すこととなった。　（光永）

註１　「前山遺跡・鎌戸原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』115　岡山県教育委員会　1997

註２　「岡谷大溝散布地 三須今溝遺跡 三須河原遺跡　三須畠田遺跡 井手見延遺跡 井手天原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156　岡山県教育委員会　2001

調査日誌

（平成13年度）

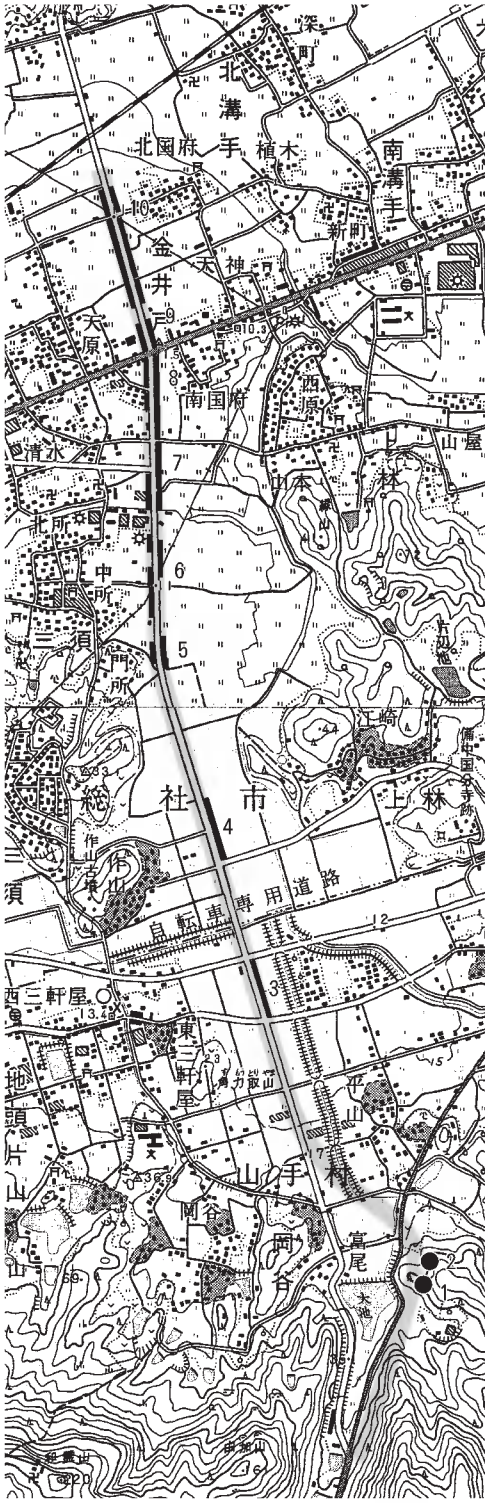
１月８日	５区調査開始
２月13日	12区調査開始
２月20日	５区調査終了
３月14日	５区埋戻し・借地復元終了
３月20日	12区調査終了
３月22日	12区埋戻し・借地復元終了

（平成14年度）

４月８日	４区調査開始
５月７日	６区調査開始
５月27日	６区調査終了
５月29日	４区調査終了・７区調査開始
７月16日	13区調査開始
７月26日	14区調査開始
７月31日	７区調査終了
８月26日	13区調査終了
９月30日	14区調査終了
10月１日	11区調査開始
11月５日	10区調査開始
11月12日	11区調査終了
12月19日	10区調査終了

（平成16年度）

４月８日	９区調査開始
４月23日	９区調査終了
４月９日	１区調査開始
５月11日	８区調査開始
７月６日	３区調査開始
７月22日	３区調査終了
８月11日	１・８区南半部調査終了
９月９日	１・８区北半調査開始
９月30日	１・８区北半調査終了



1　前山遺跡　2　鎌戸原遺跡
3　岡谷大溝散布地　4　三須今溝遺跡
5　三須河原遺跡　6　三須畠田遺跡
7　井手見延遺跡　8　井手天原遺跡（南）
9　**井手天原遺跡（北）**　10　**総社遺跡**

第２図　路線図（1/25,000）

第２節　発掘調査の体制

平成13（2001）年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　國貞　忠克

文化課

課　　長　松井　英治
課長代理（埋蔵文化財係長）　松本　和男
課長代理　藤井　守雄
主　　任　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡　睦夫
次　　長　能登原　巧

〈総務課〉

課　　長　安西　正則
総務係長　田中　秀樹
主　　任　小坂　文男

〈調査第一課〉

課　　長　高畑　知功
課長補佐（第二係長）　島崎　東
文化財保護主幹　光永　真一（調査担当）
主　　事　松村さを里（調査担当）

平成14（2002）年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦　一男

文化課

課　　長　西山　猛
課長代理（埋蔵文化財係長）　松本　和男
課長代理　宮田　正彦
文化財保護主任　尾上　元規
主　　事　浜原　浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡　睦夫
次　　長　藤川　洋二

〈総務課〉

課　　長　安西　正則
課長補佐（総務係長）　田中　秀樹
主　　任　小坂　文男

〈調査第一課〉

課　　長　高畑　知功
課長補佐（第一係長）　平井　泰男
文化財保護主幹　内藤　善史（調査担当）
文化財保護主査　徳田　正紀（調査担当）
文化財保護主任　渡邊恵里子（調査担当）
主　　事　福井　優（調査担当）

平成16（2004）年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　釜瀬　司

文化財課

課　　長　芦田　和正
参　　事　田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）　平井　泰男
主　　任　小林　利晴
主　　事　秋山　良樹

岡山県古代吉備文化財センター

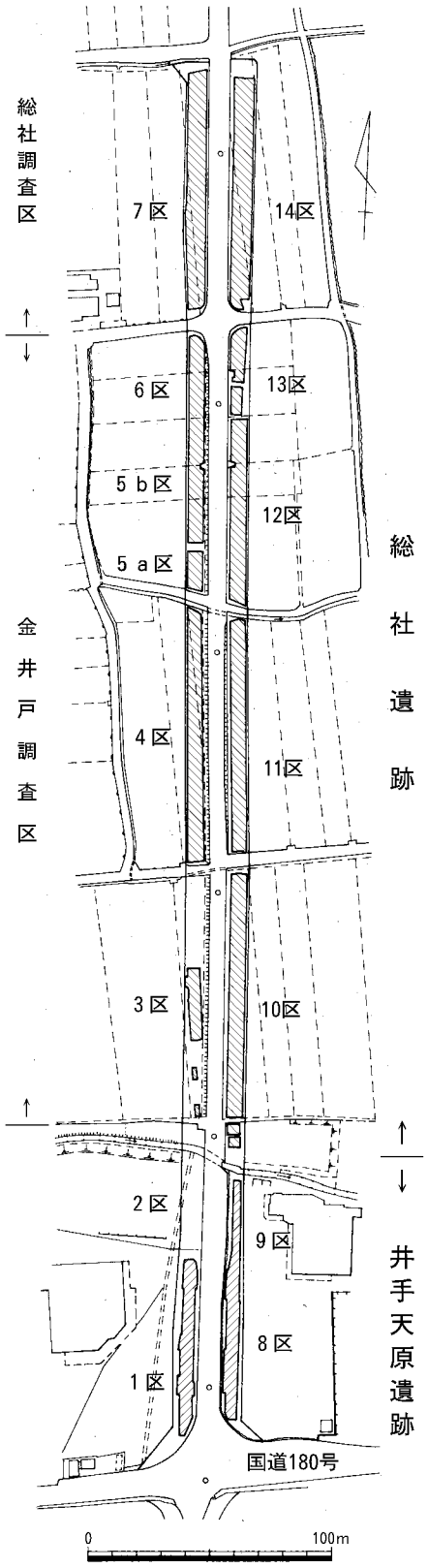
所　　長　正岡　睦夫
次　　長（総務課長）　内田　猛
参　　事　松本　和男
参　　事　伊藤　晃

〈総務課〉

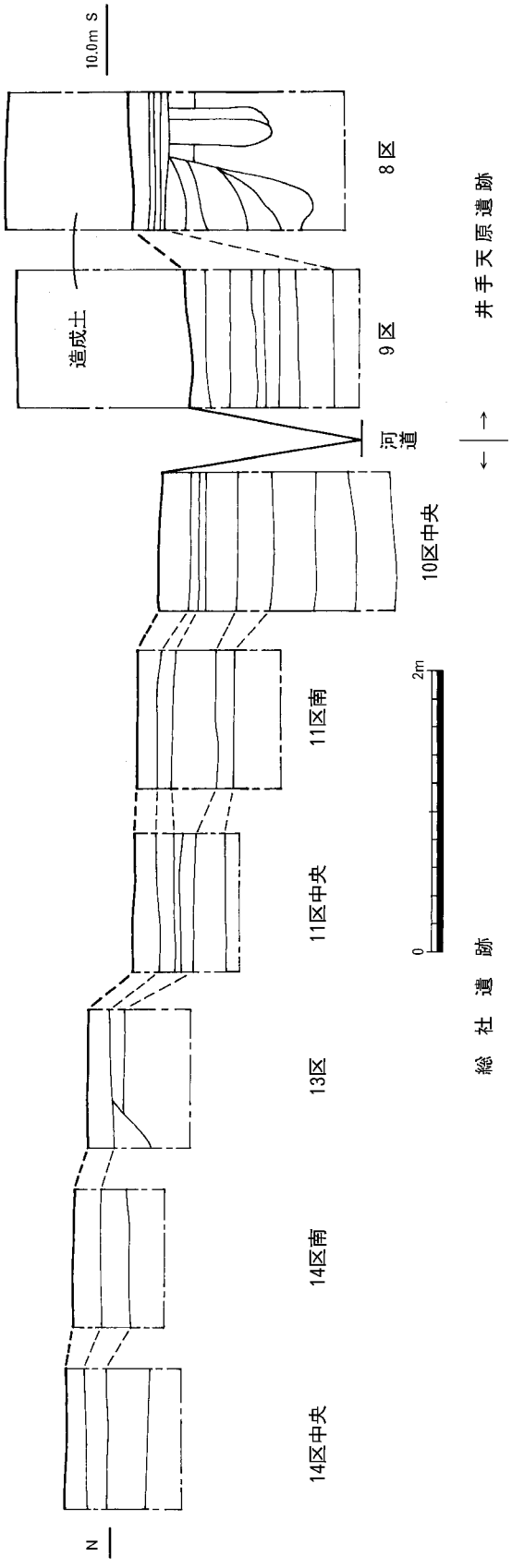
総括副参事（総務班長）　笏本　弘忠
主　　任　小坂　文男
主　　任　小川　紀久

〈調査第三課〉

課　　長　柳瀬　昭彦
総括副参事（第三班長）　山磨　康平（調査・整理担当）
副 参 事　二宮　治夫（調査担当）
主　　査　亀山　行雄（調査担当）
主　　事　重根　弘和（調査担当）



第３図　調査区配置図（1/3,000）



第４図　基本層序図（1/50）

第３節　地理的・歴史的環境

１　地理的環境

岡山県の南西部に位置する総社平野は、総社市東部から山手村・清音村・岡山市の西部にまたがっている。北に面する経山（372m）から鬼城山（403m）にかけての山塊は吉備高原の南縁にあたり、平野に面した山容は比較的けわしい。また、南に連なる福山（302m）から仕手倉山（223m）にかけての山塊は、なだらかな南面に比して北面は急峻な傾斜をもち非対称な山容をみせる。これらの山塊は白亜紀の花崗岩からなるが、軽部山辺りでは古生代の堆積層が見られる。また、福山と仕手倉山の間には南北に走る断層があり、狭長な谷部を形成している。現在国道429号が走るこの谷は、総社と倉敷を結ぶ交通路として古くから利用されており、その沿線には多くの遺跡が点在する。

この国道429号が南北に縦断する総社平野は、古高梁川の東分流によって形成されたものである。この河道は、井尻野辺りで分岐して東流し、古足守川と合しながら板倉付近で南に向きを変え、「吉備の穴海」と呼ばれた内海へ注いでいたものと想定されている。平家物語や太平記に見える板倉川がこれにあたり、現在の前川はその一部と推定される。この河道は次第に流路を変えながら幾重にも分岐し、さながら網の目のような痕跡を大地に刻み込むとともに、その流域には大小の自然堤防を発達させている。縄文時代以来の集落はこうした自然堤防上に立地しており、その傾向は現在の伝統的集落においても踏襲されている。

また、自然堤防の周囲に広がる低位部は、河道跡などを利用して水路が巡らされ、もっぱら水田として利用されてきた。しかし、近年では埋め立てによって工場の進出や宅地化が顕著となってきている。

一方、南北の山裾にはなだらかな低丘陵が広がり、一部では扇状地が発達している。これらの地帯は現在、水田や畑地として利用されているが、かつては居住の場として、あるいは数多くの古墳群に示されるように墳墓の地として利用されてきた。

２　歴史的環境

この地域における人類の足跡は旧石器時代に遡る。総社平野を取りまく丘陵上では旧石器が点々と採集されており、ここに生活の場を求めた人々がいたことを物語っている。平野部の遺跡は、長良山遺跡や真壁遺跡など縄文時代早期から見られるが、本格的な進出が始まるのは後期以降のことであり、井手見延遺跡においても晩期の土器が数点出土している。こうした立地変化の背景には南溝手遺跡の籾痕土器が示唆するような生業の変化があったものと思われる。

弥生時代前期～中期中葉の遺跡は南溝手遺跡のほか山津田遺跡・鎌戸原遺跡などさほど多くはないが、中期後半になると遺跡数は増加し、三須畠田遺跡もこの頃に集落の形成が始まっている。中期後半には平地式の建物が多く見られるようであるが、後期になると大形の竪穴住居が主体となり貯蔵穴が増加する傾向にある。総社平野では三須で銅鐸の出土が伝えられるものの、足守川流域に比べれば青銅器の出土は少なく、他地域との活発な交流を窺わせるような遺物も乏しい。しかし、後期に入ると集落規模が拡大するとともに、丘陵上に前山遺跡や鋳物師谷遺跡・岩屋山遺跡といった集団墓が営

まれるようになり、やがて宮山遺跡のような前方後円形の墳丘墓が出現する。

古墳時代前期には天望山古墳（約55m）や三笠山古墳（約70m）といった前方後円墳が築かれるが足守川流域のように100ｍを超えるような古墳は見られない。しかし、中期にはいると加茂造山古墳（350m）に続いて三須作山古墳（286m）、宿寺山古墳（114m）といった大規模な前方後円墳が造営される。また、周辺の丘陵部では後期にかけて数百基の古墳が築かれるが、その中には竪穴系横口式石室と呼ばれる初期の横穴式石室を導入するものもあり、この地域の特色をなしている。やがて山陽道でこの時期最大の前方後円墳（約100m）であるこうもり塚古墳が築かれるが、続く江崎古墳（45m）を最後に前方後円墳は姿を消す。ところで、この地域では津寺一軒家遺跡の鍛冶炉や随庵古墳（約40m）の副葬品に示されるように早くから鉄器生産が行われているが、後期には鉄鉱石を原料とする製鉄が千引かなくろ谷遺跡などで始まり、窪木薬師遺跡のような鍛冶専業集落も現れる。また、奥ヶ谷窯跡では須恵器の生産がいち早く行われており、末ノ奥窯跡で生産された飛鳥瓦は奈良県平吉遺跡にも運ばれていることから中央政権（蘇我氏）とのかかわりの深い地域であったことが指摘されている。

律令制下において、この地域は窪屋群美簀郷と賀陽郡八田部郷に比定され、その境は三須畠田遺跡と井手見延遺跡の間を東西に走る河道にあるものと想定されている。古代山陽道は、津峴駅に比定される矢部遺跡を経て備中国分寺・国分尼寺の南を西に走るものと推定されているが、「郡殿」の墨書土器などを出土した三須河原遺跡を窪屋郡衙に擬するならば、総社・金井戸周辺に想定されている備中国衙、あるいは栢寺廃寺の辺りに存在するとされる賀夜郡衙へ向けて北上する古道がこの周辺を通過していたかもしれない。平安時代には、福山山塊に福山寺や朝原寺・広谷寺などの山上寺院が建立されている。なかでも藤原成親出家の地として平家物語に表れる朝原寺（安養寺）は、応安２年銘の瓦経が出土したことで知られる。

鎌倉時代には東大寺復興の料所となった備前を拠点とする重源の活動がこの地においても伝えられている。南北朝時代には福山城をめぐる攻防が繰り広げられ、福山寺も兵火にかかって焼失している。やがて備中は細川氏の領国となり、この地域は幸山城に拠る守護代石川氏の支配下におかれた。このころには、守護所のおかれた松山への往来が整備され、総社宮の存在もあいまって八田部村界隈は賑わいを増していったものと推測される。応仁の乱後、細川氏の支配が弱まると、尼子や毛利、織田氏の進攻を招き、庄氏や三村、禰屋、薬師寺、中島、生石氏といった国人を巻き込んだいわゆる備中兵乱が勃発する。しかし、高松城をめぐる攻防が織田氏優位のうちに終わると、これに与した宇喜多氏の支配するところとなる。関ヶ原の合戦後、宇喜多氏に代わって三須・井手には蒔田氏が、岡谷には早水氏（後に池田氏）が入封する。宝暦年間に井手に開かれた蒔田氏の陣屋は火災を被った後浅尾に移されるが、幕末の浅尾騒動に際して灰燼に帰している。

明治に入り、井手村は総社村に合併され、昭和29年には三須村をも併せて総社市となる。また、岡谷村は明治22年に山手村に合併され今に至っている。現在、三須・岡谷地区は吉備路風土記の丘県立自然公園に指定され、休日ともなれば県内外から多くの観光客を迎え入れている。一方、井手地区は市街地整備事業によって宅地化が進み、その景観を一変させた。今回の国道429号の拡幅整備によって、この地域の景観はさらなる変貌を遂げつつある。　（亀山）

集落　古墳群　弥生後期集団墓　寺院跡　旧河道

1．井手天原遺跡	9．長良山遺跡	17．美濃田遺跡	25．造山古墳	33．末の奥窯跡
2．総社遺跡	10．真壁遺跡	18．天満遺跡	26．作山古墳	34．備中国分寺
3．三須畠田遺跡	11．窪木南溝手遺跡	19．高塚遺跡	27．宿寺山古墳	35．備中国分尼寺
4．三須河原遺跡	12．山津田遺跡	20．鋳物師谷遺跡	28．こうもり塚古墳	36．三須廃寺
5．三須今溝遺跡	13．金井戸天神遺跡	21．岩屋遺跡	29．江崎遺跡	37．栢寺廃寺
6．岡谷人溝散布地	14．金井戸新田遺跡	22．宮山遺跡	30．緑山古墳群	38．福山城跡
7．鎌戸原遺跡	15．金井戸鴻崎遺跡	23．天望山古墳	31．窪木薬師遺跡	39．幸山城跡
8．前山遺跡	16．井手村後遺跡	24．三笠山古墳	32．奥ヶ谷窯跡	40．久米池古墳

第５図　周辺遺跡分布図（1/40,000）

なお、この節は、2001年に岡山県教育委員会が発行した『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156「岡谷大溝散布地 三須今溝遺跡 三須河原遺跡　三須畠田遺跡　井手見延遺跡　井手天原遺跡」国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱの第１章第３節「地理的・歴史的環境」を再録したものである。

〈主要参考文献〉

『岡山県通史』岡山県 1930
『岡山県史』１～30岡山県 1981～1991
『総社市史』総社市 1987～1998
『総社市埋蔵文化財調査報告書』１～15総社市教育委員会 1984～1999
『総社市埋蔵文化財調査年報』１～９総社市教育委員会 1991～1999
『岡山県歴史の道調査報告書』１・９岡山県教育委員会 1992・1994
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47・65・100・115岡山県教育委員会 1982・1987・1995・1997

第２章　井手天原遺跡

第１節　調査の概要

井手天原遺跡は、総社市井手字天原に所在する。調査着手時には一般国道180号以北を総称して金井戸遺跡としていた。名称変更については、既刊の調査報告書Ⅱで一般国道180号以南の微高地を井手天原遺跡と呼称し、さらに北に広がる可能性を指摘していた。今回の調査結果から同国道以北の当該調査区も同一遺跡と判明したため、名称を変更し統一した。井手天原遺跡の所在する微高地は、南北150m、東西300mほどを測り、微高地中央を一般国道180号が東西に横断している。今回の調査区は、当微高地の北西隅付近に位置し、同一微高地の東側を金井戸天神遺跡と呼称している。

遺跡周辺の現況は水田として利用されているが、国道隣接部は宅地、店舗等で急速に市街化が進んでおり、今回の調査区は店舗による1.0m程の造成土下に近現代の水田層が確認される状況であった。

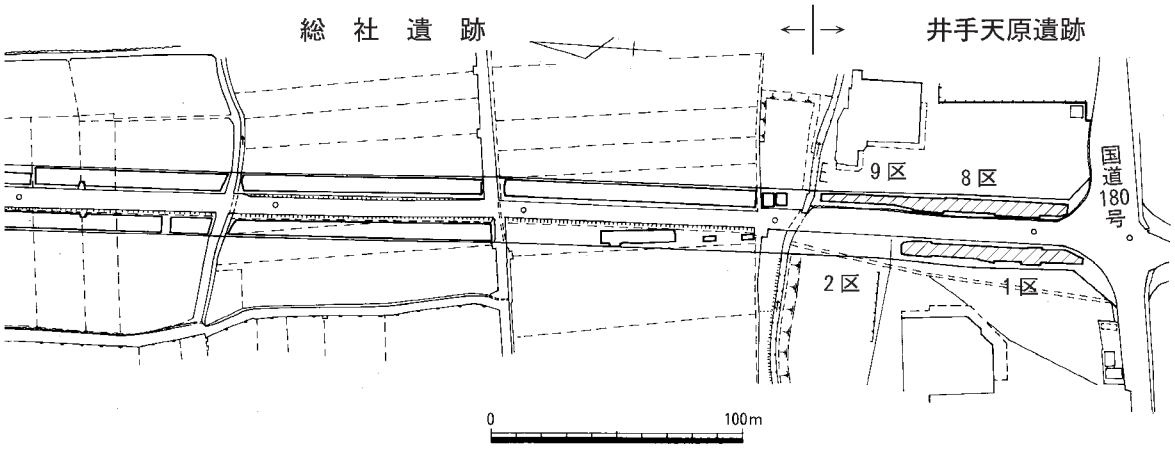
遺構は、厚さ20cmほどの水田層を除去した標高9.6m前後のにぶい黄褐色～黒褐色砂質土を呈する基盤層面で検出した。一般国道180号以南の調査区については、弥生時代後期から中世に至る遺構を検出している。今回の調査区では、弥生時代の遺構は検出できなかったが、古墳時代初頭以降の中世までの多数の遺構を検出している。また、北端の９区では微高地の下がりを確認した。

古墳時代の遺構では、初頭の竪穴住居を４軒、土壙２基、後期ではカマドを持つ竪穴住居２軒を検出した。この時期に集落の大きな発展が行われたことがうかがわれる。

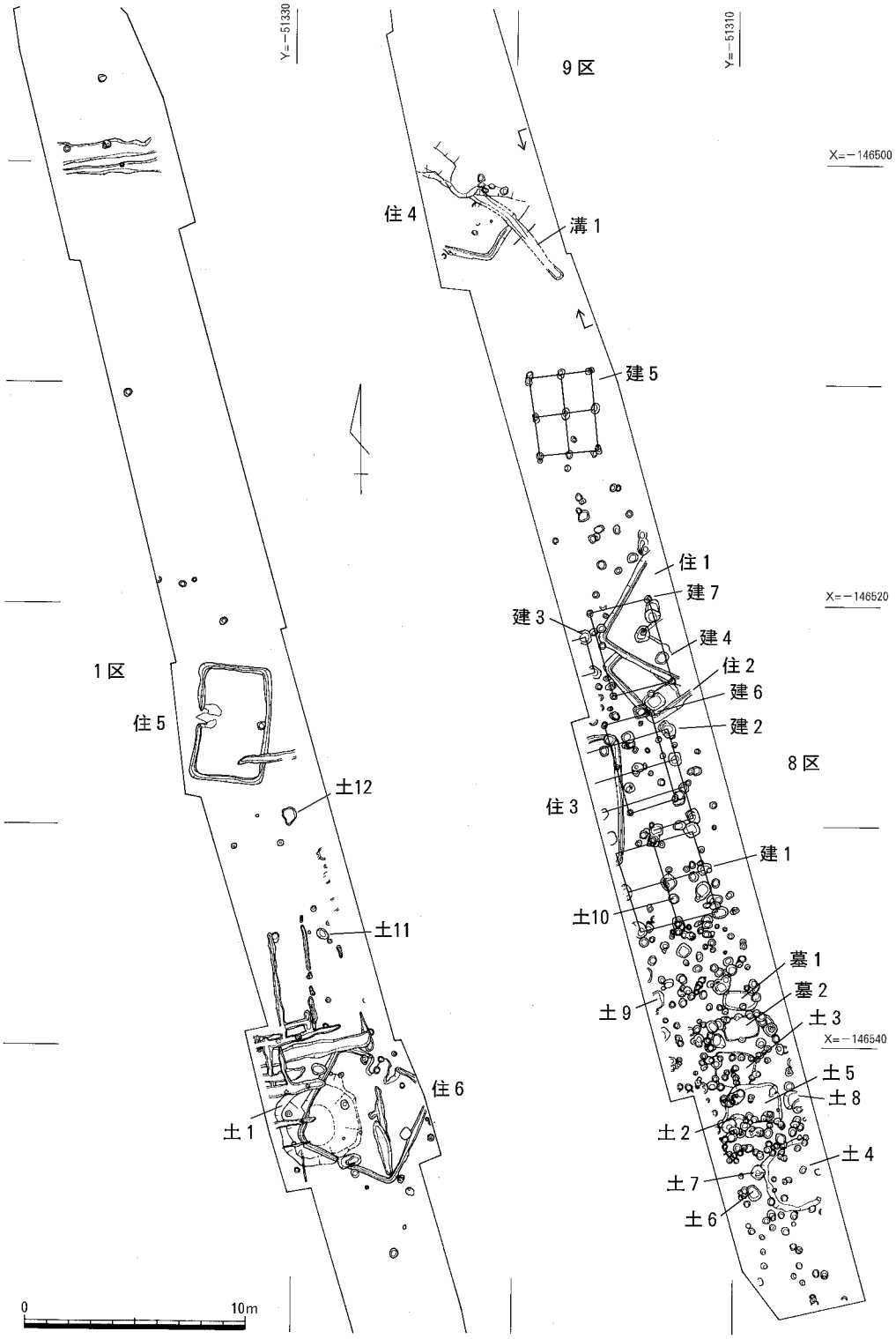
古代の遺構では、掘立柱建物５棟を検出した。うち４棟は柱穴の掘り方が方形をなし、建物の棟方向が揃い企画性のある建物群と考えられる。官衙的な建物である可能性が強い。

中世では、調査区全面に柱穴が確認された。建物としてまとまったもの２棟、土壙６基、溝１条、土壙墓２基を検出している。特に８区に集中しており、その多くが平安時代末から鎌倉時代に属するものである。なお、土壙墓２基は柱穴群の一角に認められることから屋敷墓の可能性が考えられる。

この他、北端の微高地の下がりでは近代から近世の複数の水田層を検出している。　（山磨）



第６図　調査区配置図（1/3,000）



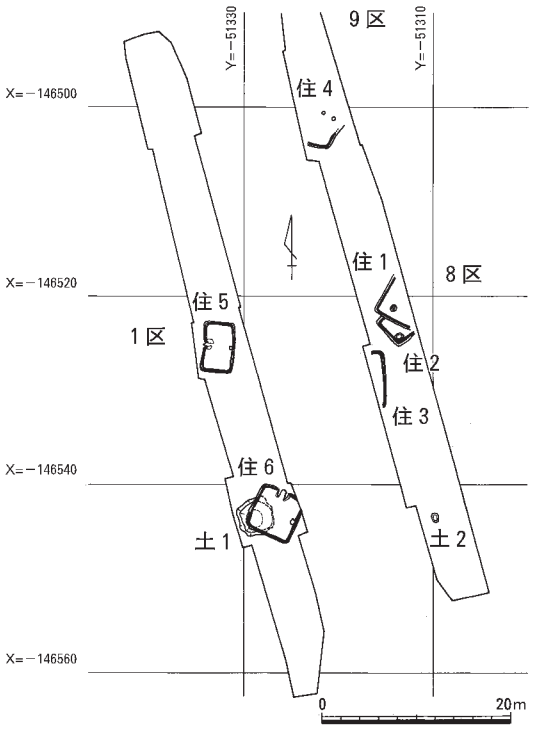
第７図　遺構全体図（1/300）

第２節　古墳時代の遺構・遺物

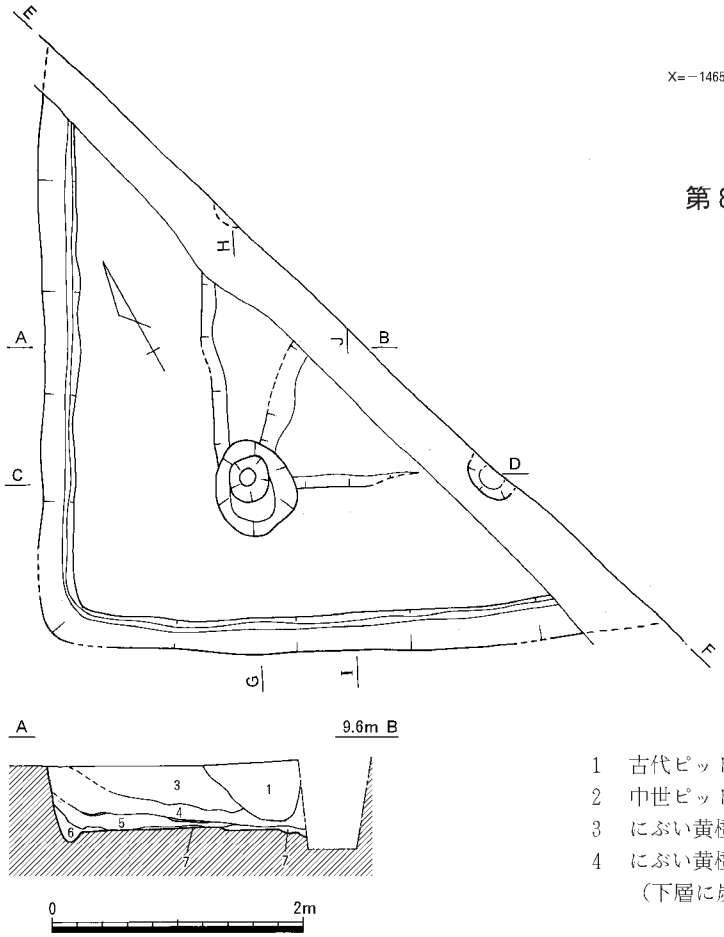
１　竪 穴 住 居

竪穴住居１（第８～10図、図版２・３・16～18）

８区中央の東壁にかかって検出した竪穴住居で、竪穴住居２と重複する。西半の二辺を検出したに過ぎないが、柱穴の位置からして、Ｎ－26°－Ｅに主軸をおく長辺530cm、短辺500cmほどの方形をなすものと思われる。床面の標高は8.84ｍを測り、古代～中世の遺構面からの深さは80cmある。幅15cm、深さ10cmの壁体溝に添って、幅120cm、高さ７cmほどの高床部を設けているが、新段階ではその内側も地山土で埋めて水平な床に仕上げている。３本検出した柱穴は深さ60cmほどあり、柱間は195～215cmを測る。

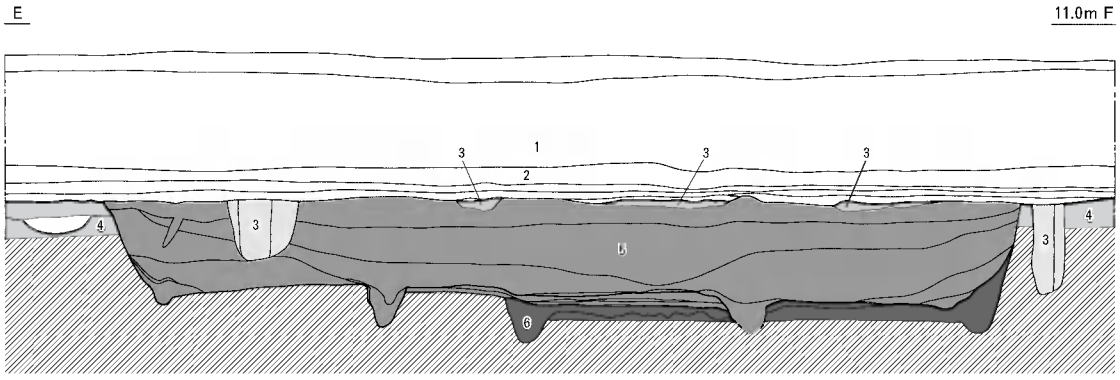


第８図　古墳時代の遺構配置図（1/800）

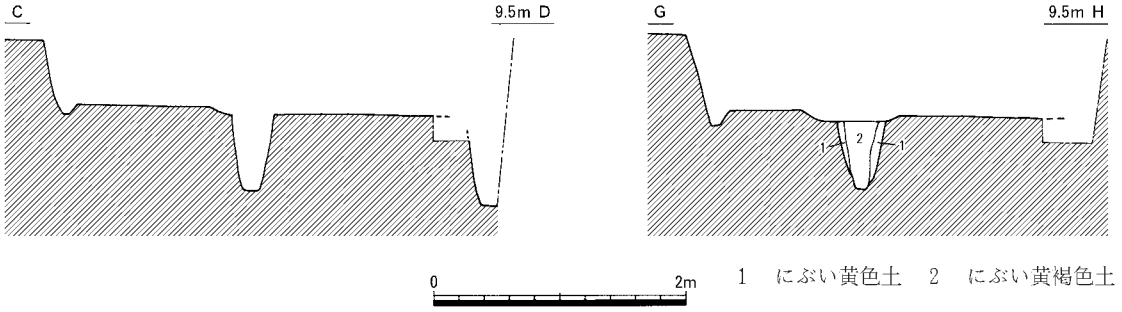


1　古代ピット
2　中世ピット
3　にぶい黄橙色土
4　にぶい黄橙色土
（下層に炭・焼土が堆積）
5　明黄褐色土
（地山ブロック含む）
6　灰黄褐色土
7　明黄褐色土
8　灰黄褐色土

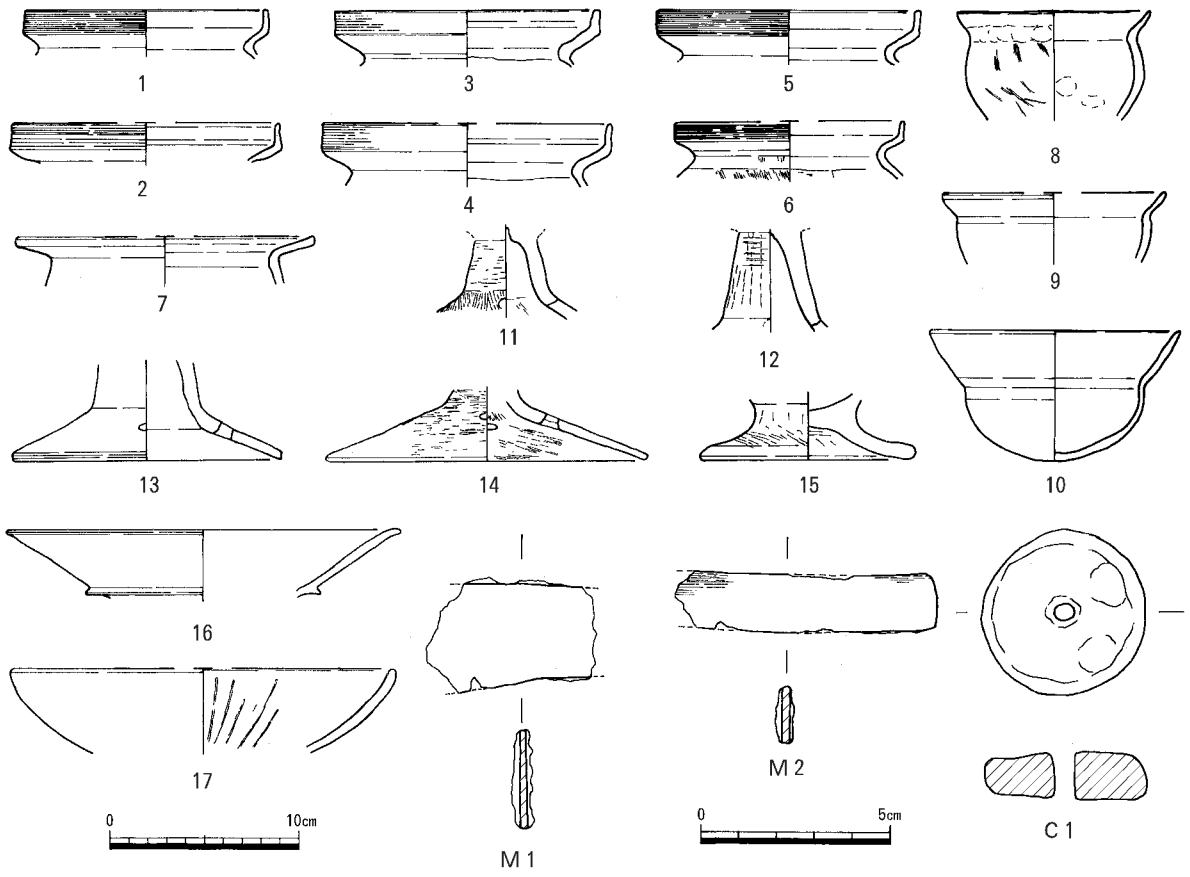
第９図　竪穴住居１（1/60）



1　現代造成土
2　近・現代水田層
3　古代・中世遺構埋土
4　古代・中世基盤層（黒褐色砂質土）
5　竪穴住居１埋土
6　竪穴住居２埋土

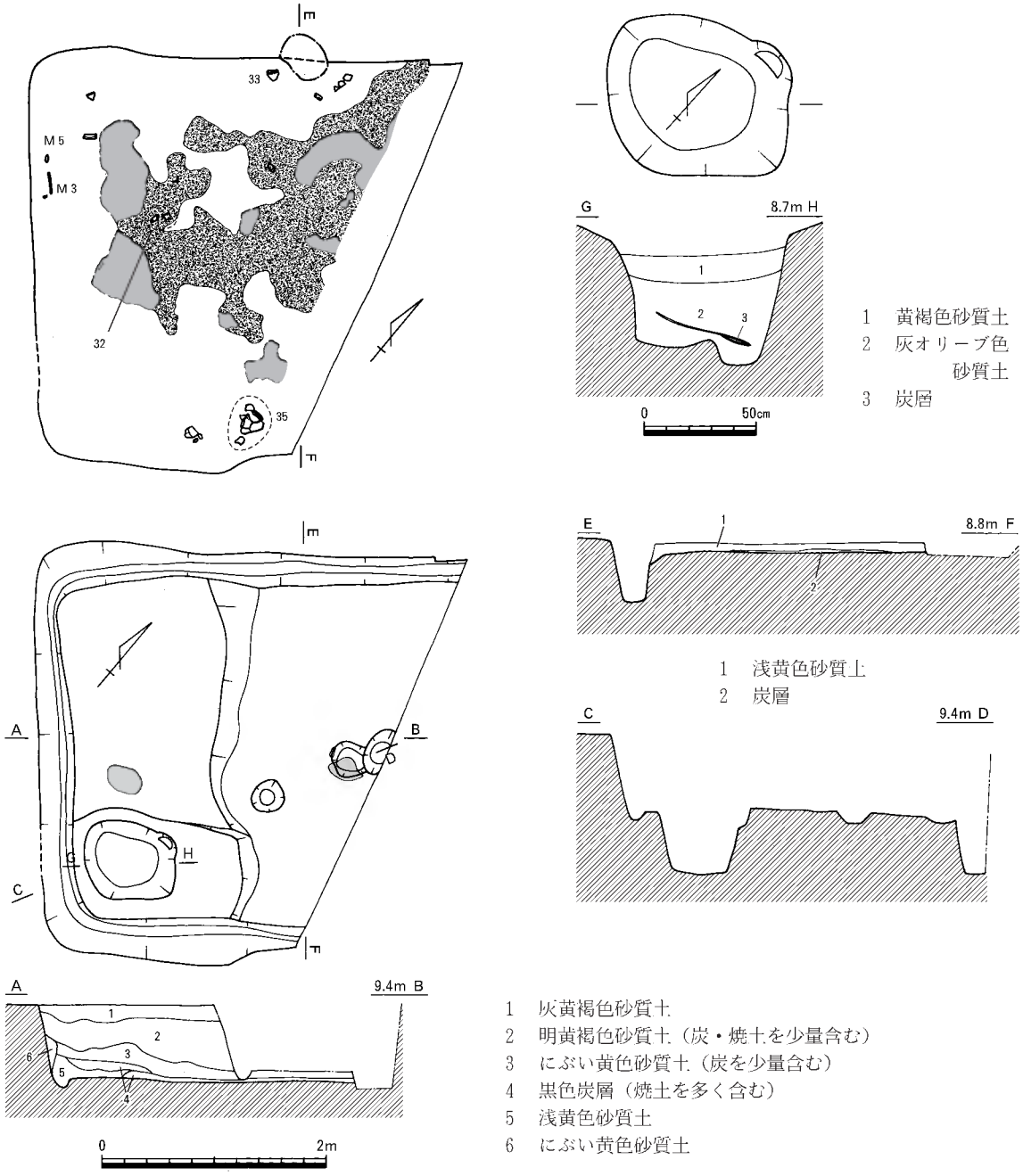


1　にぶい黄色土　2　にぶい黄褐色土



第10図　竪穴住居１断面（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

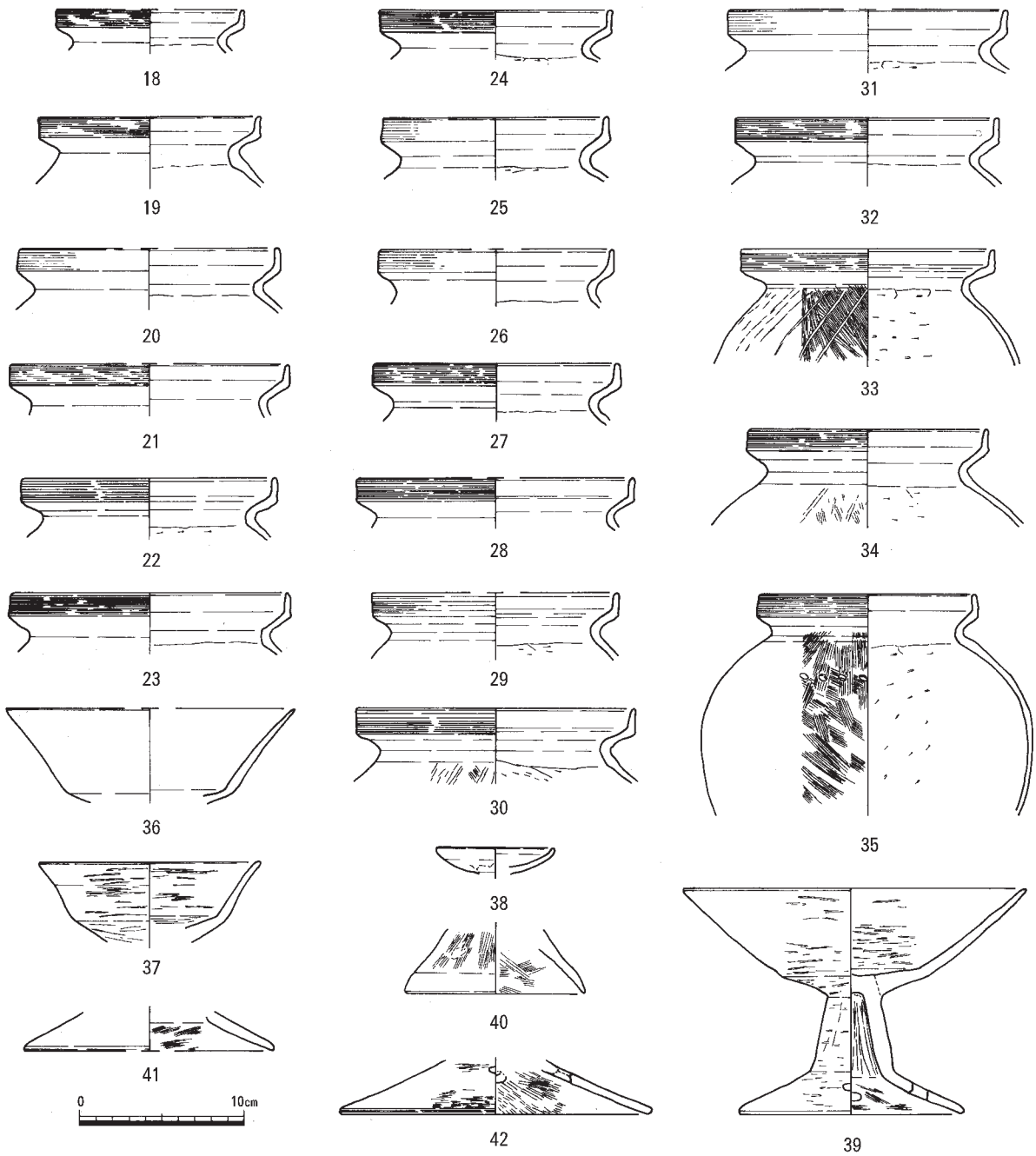
出土遺物は主に上層から出土しているが、その量は少ない。土師器には甕や鉢、高杯、器台がある。１～６は口径12～15㎝を測り、口縁部を上方に短く拡張して櫛描沈線を飾る。口径15.6㎝の７は「く」字形口縁をもつ甕で、体部の内面をヘラケズリする。鉢には、口縁部が折れ曲がる小型の８～10と、皿形の17、脚台をもつ15がある。高杯はいずれも脚部のみであるが、長い筒部をもつ12・13と、短い筒部から大きく開く裾部をもつ14に分けられる。口径20.6㎝を測る16は鼓形の器台と思われるが、壺の口縁部になる可能性もある。このほか、用途不明の鉄器Ｍ１・Ｍ２や、重量29ｇの土製紡錘車Ｃ１も出土している。これらには、古墳時代前期前半の下田所式と亀川上層式が含まれるが、前者を竪穴住居２からの混入と考え、後者の段階に機能したものと判断したい。　（亀山）



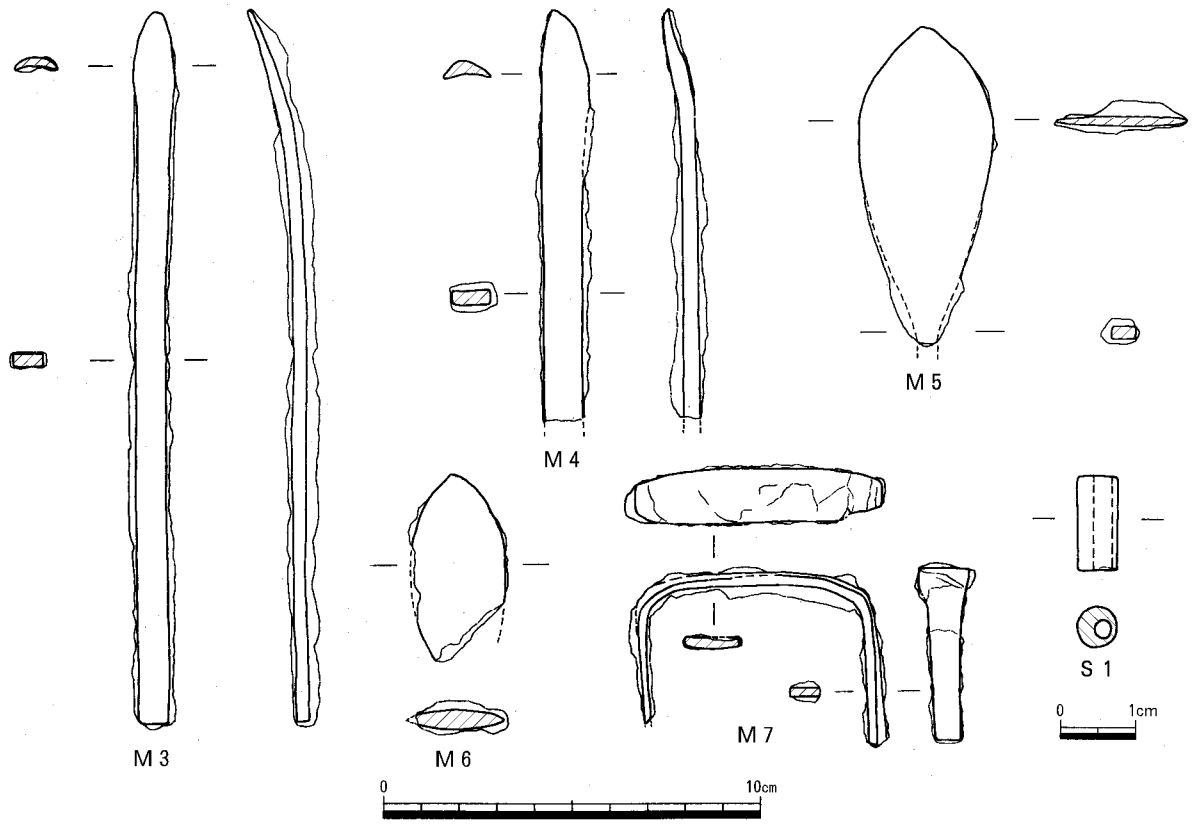
第11図　竪穴住居２（1/60・1/30）

竪穴住居２（第８・11～13図、図版２・３・16・18）

８区のほぼ中央付近で検出した。竪穴住居１掘削時に、北東部分が削平を受ける。残存部分から床面の平面形は長方形であると想定でき、長辺は378cm以上で、短辺は367cmである。検出面から床面までの深さは約70cmである。床面直上で、焼土を多く含む炭層を検出した。大きな炭化材は無く薄い層であることから、住居そのものが火を受けたわけではなく、廃絶時に廃材等の不要品を焼却した痕跡であると考える。床面の南東辺部分はやや高くなるが、明瞭に段がつくわけではない。この南端で長軸80cmを測る不整楕円形の土壙と、そのすぐ北で被熱面を１か所検出した。中央穴と想定するピットでも被熱痕が観察できた。主柱穴は確認できなかった。18～21・27・36・42・Ｍ４・Ｍ６・Ｍ７は



第12図　竪穴住居２出土遺物①（1/4）



第13図　竪穴住居２出土遺物②（1/2・1/1）

１・２層で、22・23・24～26・28～30・37・38・39は３～５層で、32～35・40・41・Ｍ３・Ｍ５は床面で、31は土壙で検出した。39は杯口縁部外面に黒班が観察できる。Ｍ５・Ｍ６はそれぞれ茎部分が欠損するが、現存長で8.4cm、５cmを測る。Ｍ７は鎹状の鉄器で、用途は不明である。中央部両端がやや薄くなる。Ｓ１は炭層掘削時に検出した緑色凝灰岩製管玉である。床面の土器は古墳時代前期前半に属し、埋土中も同様である。（重根）

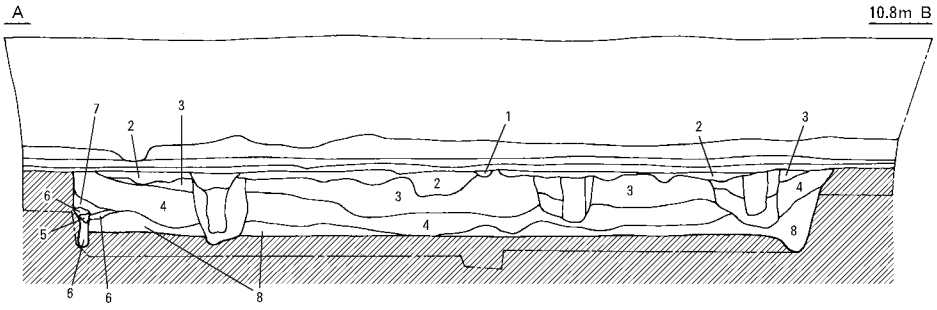
竪穴住居３（第８・14図、図版２・３・16）

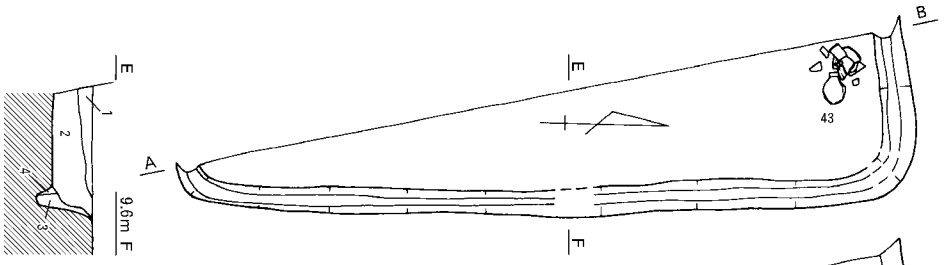
８区中央の東壁にかかって検出した竪穴住居で、竪穴住居２の南西1.6ｍに位置する。東辺と北辺の一部を検出するにとどまったため全形を知り得ないが、南北584cmの方形をなすものと推定される。古代・中世遺構面から深さ52cmを測る床面の標高は9.34ｍで、竪穴住居１よりも50cm高い位置にある。床面には貼り床が施されていないためさほど明瞭ではないが、周囲をめぐる幅15cm、深さ10cmの溝を検出している。

この住居を検出する過程で、竪穴に沿うように帯状に分布する焼土層が確認された。断面を観察すると、焼土層は床面周囲の溝内から壁面に沿って立ち上がり、内方へ広がるように堆積していた。土層中に含まれる焼土は塊状で披熱の痕跡とは考えにくく、壁面に密着するように遺存していた土器片の出土状況からしても、壁体の裏込めに用いられていた焼土層がその倒壊によって内方へ崩れるように堆積したものと判断した。

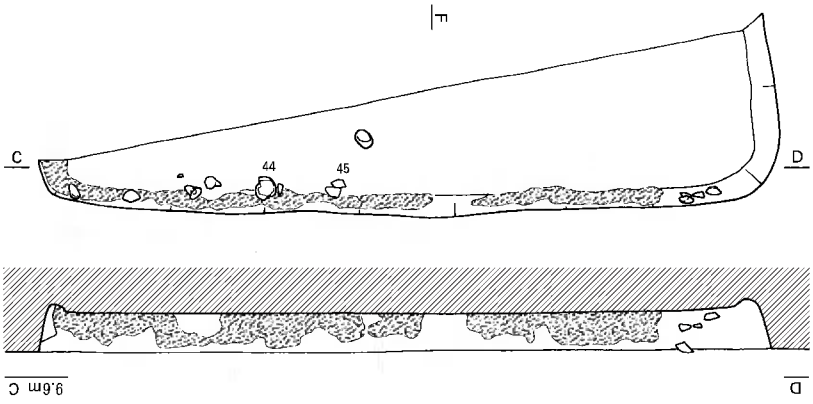
出土遺物は、前述の焼土層から出土した布留式の甕44や高杯45～48、床面から出土した崩れた二重口縁をもつ壺43などがある。これらはその特徴から古墳時代前期末に比定される。（亀山）

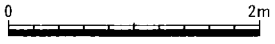
1　灰色砂質土
2　褐灰色砂質土
3　黒褐色砂質土
　（土器多い）
4　にぶい黄色砂質土
5　灰黄褐色砂質土
6　灰黄褐色砂質土
　（炭・焼土多い）
7　黄褐色砂質土
8　にぶい黄色砂質土

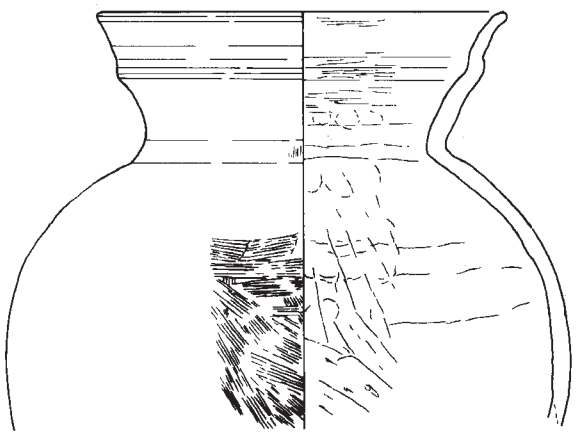


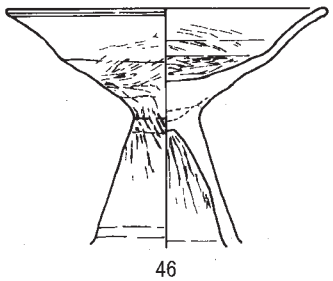


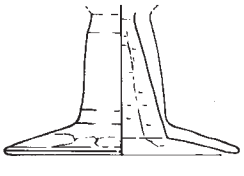
1　黒褐色砂質土
2　にぶい黄色砂質土
3　灰黄褐色砂質土
　（炭・焼土を非常
　に多く含む）
4　灰黄褐色砂質土

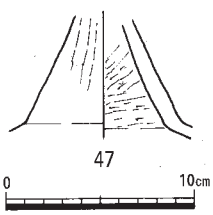




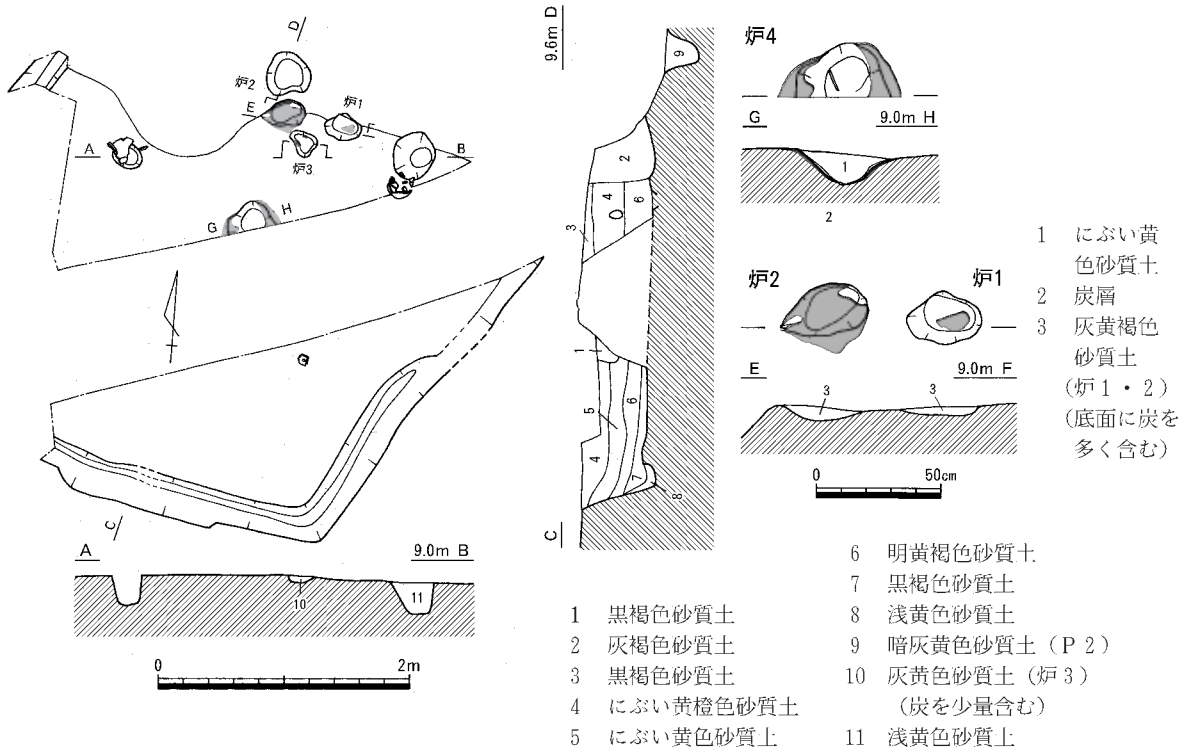








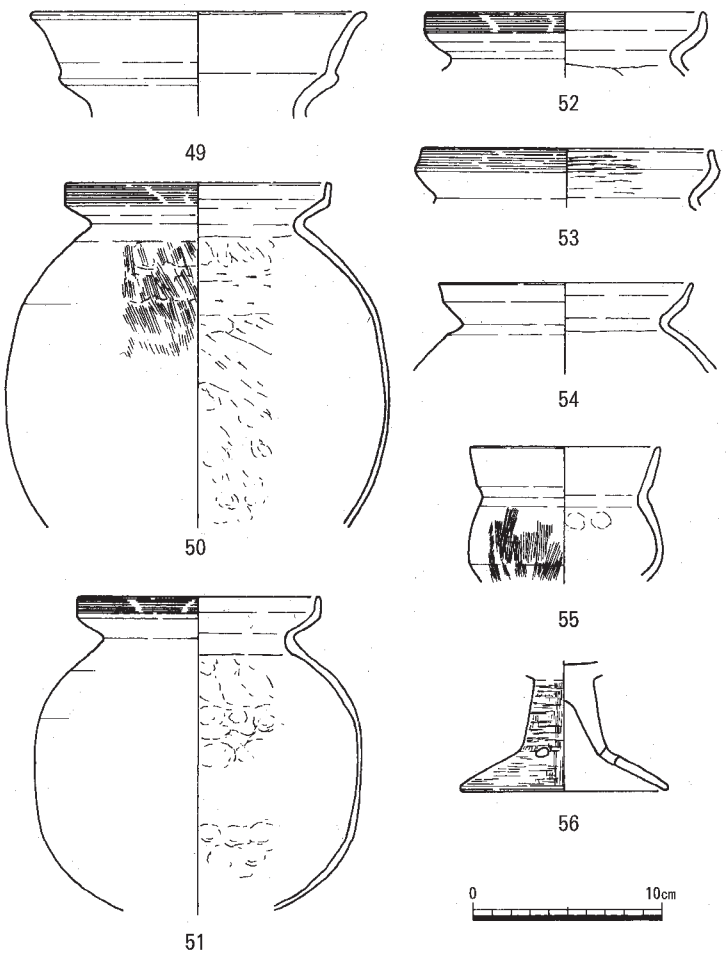
第14図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/4）



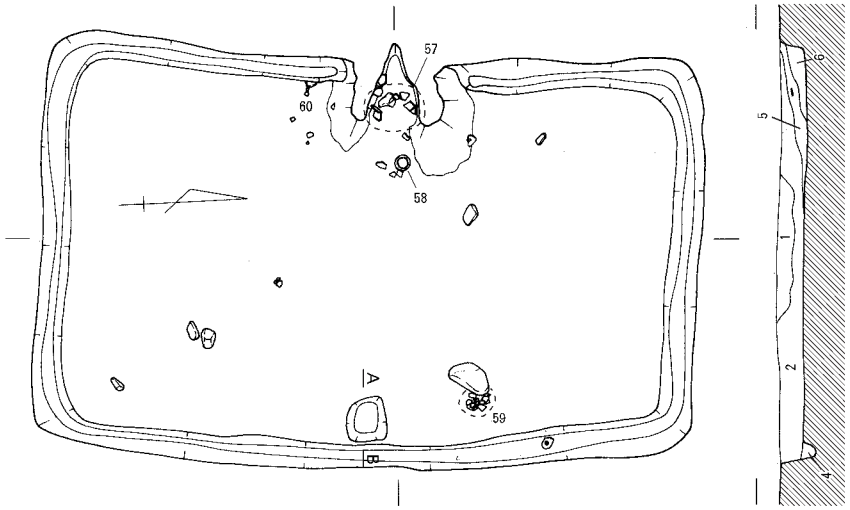
竪穴住居４（第８・15図、図版４・16）

８区北端付近で検出した。西半は調査区外となり、北側も中世以後の掘削を受ける。また、中央部分は水道管が通るため掘り下げて床面を検出することができなかった。そのため全体の様子は把握し難いが、残存部から床面の平面形は方形であったと考える。床面では、被熱痕跡が観察できるピットを４か所で確認した。主柱穴の数は不明である。

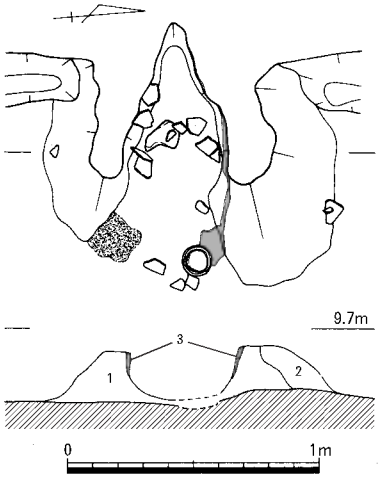
49・50・52・53は３～５層で、**56**は６層で、**54**は７層で、**51・55**は床面で検出した。**50**は、胴部下半部外面の一部を周回するようなひびが観察できた。押し出して成型した痕跡と考える。**52・53**は口縁部内外面の稜が丸い。床面で検出した土器は古墳時代前期前半に属する。埋土中のものにはやや新しい傾向がうかがえる資料が存在する。



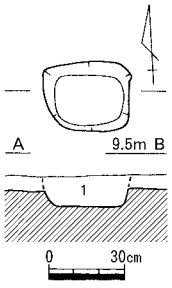
第15図　竪穴住居４（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）



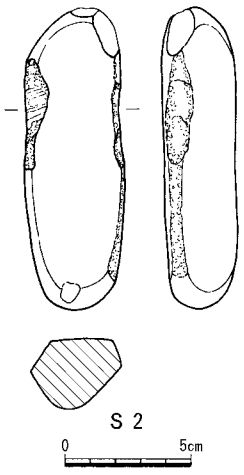
1　黒褐色砂質土
（土器を多く含む）
2　にぶい褐色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　褐灰色砂質土
5　暗灰黄砂質土
（焼土を多く含む）
6　にぶい黄色砂質土
（焼土を少量含む）

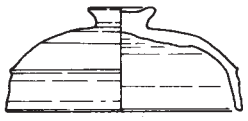


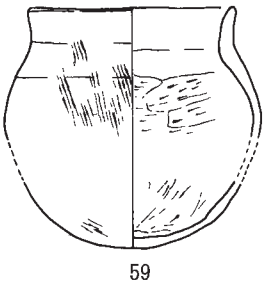
1　にぶい黄橙色粘質土
2　灰黄褐色粘質土
3　橙色粘質土
（被熱のため赤化）

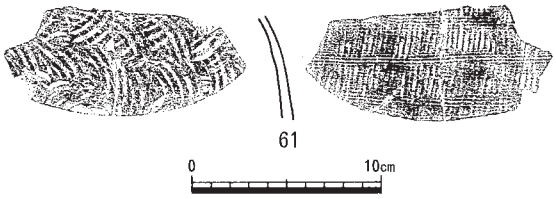


1　灰黄褐色砂質土
（炭含む）







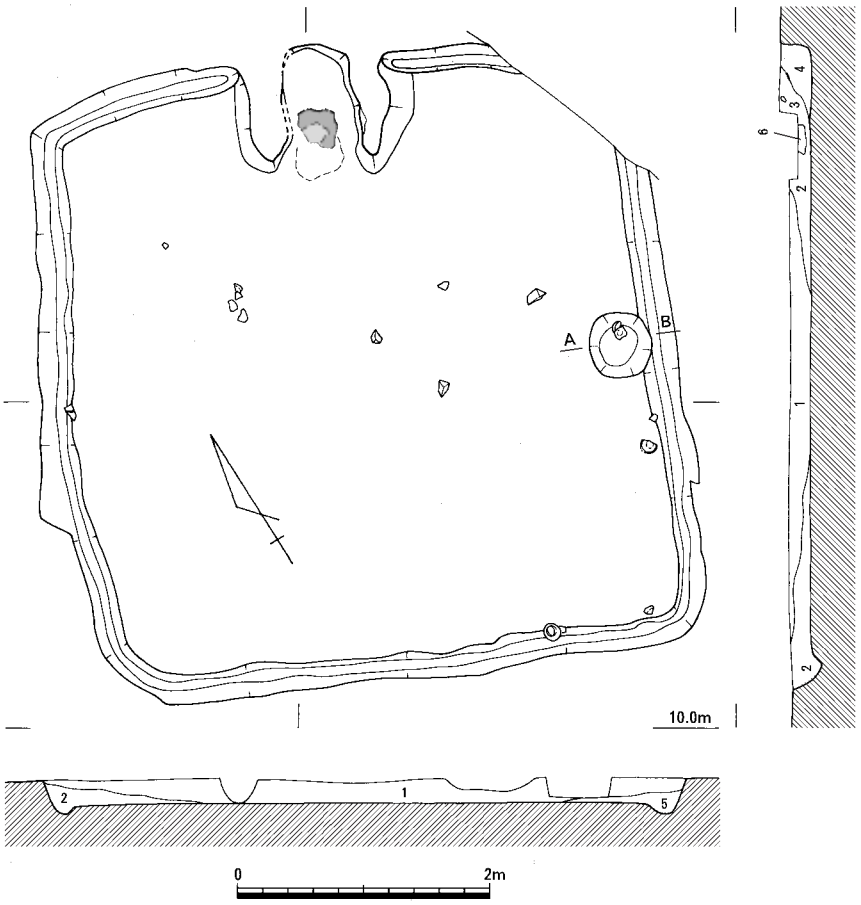


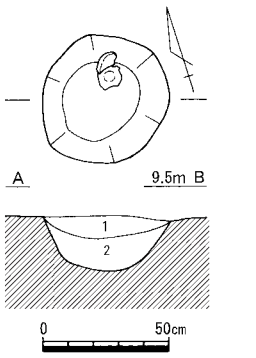
第16図　竪穴住居５（1/60・1/30）
・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居５（第８・16図、図版５・16）

１区ほぼ中央付近、竪穴住居６の北約10mの地点で検出した。床面は長方形を呈し、長辺523cmで、短辺325cmである。床面積は16.99㎡である。西辺ほぼ中央にはカマドを付す。壁内面およびその前方部分の床面は被熱のため赤化していた。その前庭部で須恵器杯身がほぼ完形で、燃焼部で杯蓋が破損した状態で見つかった。カマドとほぼ対面する位置である東辺中央付近で、長軸34cm、短軸26cmの長方形を呈する土壙を検出した。主柱穴等のピットは確認できなかった。

61は１層で、57～60・Ｓ２は床面で検出した。61は内面当て具痕をややなで消す。60は底面が平坦である。58の口縁端部には段が観察できないが、その全体の形態から陶邑TK47型式と類似すると判断した。57も同様と考える。Ｓ２は敲打により抉りを設ける。用途は不明である。　（重根）





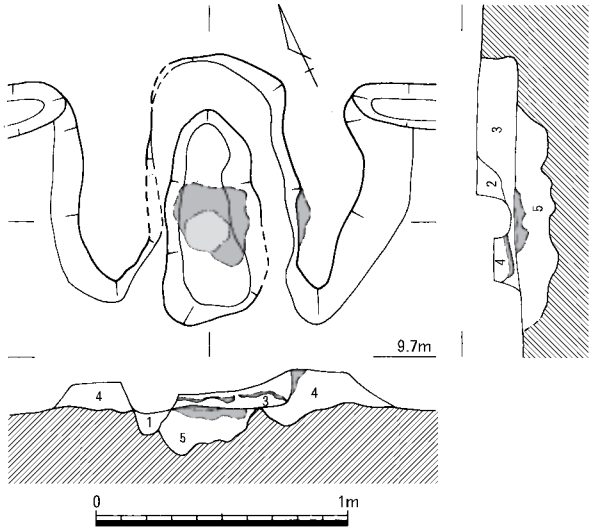
1　にぶい黄褐色砂質土
2　灰黄褐色砂質土

1　にぶい黄褐色砂質土
2　褐色砂質土
3　灰黄褐色砂質土
4　にぶい黄褐色砂質土
5　にぶい黄褐色砂質土
6　明黄褐色砂質土

竪穴住居６

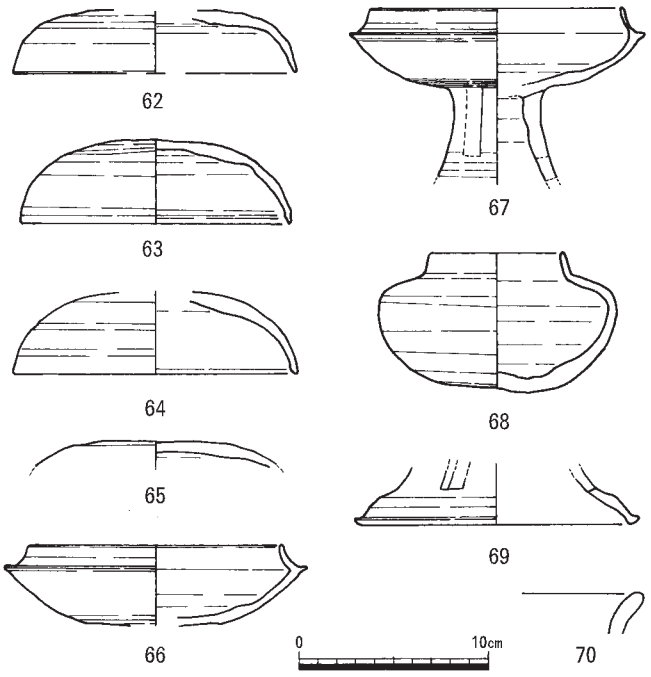
（第８・17・18図、図版６・16）

１区の南側で検出した方形住居で、竪穴住居５の南々東12ｍに位置する。Ｎ－28°－Ｅに主軸をおく長辺513㎝、短辺500㎝の方形を呈し、深さ20㎝にある床の面積は25㎡を測る。その周囲には壁体溝をめぐらすものの、柱穴は確認できなかった。北辺の中央に造り付けられたカマドは、袖部長96㎝、燃焼部幅52㎝を測り、煙道へ続く壁面は垂直に立ち上がる。砂層を基盤とするためか、燃焼部に楕円形の土壙を穿ち粘質土を充填していた。天井部は内部に崩落していたが、その間から種類不明の小さな骨片が出土し



1　灰黄褐色砂質土（柱穴）
2　灰褐色砂質土（焼土粒含む）
3　灰褐色砂質土
4　にぶい橙色粘質土（カマド）
5　にぶい橙色粘質土（下部構造）

第17図　竪穴住居６（1/60・1/30）



第18図　竪穴住居６出土遺物（1/4）

た。また、東辺に接して径55cmの土壙が検出されたが、この住居に伴うものではない。

出土遺物には、床面から出土した１箱ほどの須恵器がある。蓋62～64は、口径14.1～14.8cmを測る。斜め下方にのびる口縁部と、粗くヘラケズリする天井部との境界はわずかに屈折し、口縁端部には内傾する面をもつ。口径13.2cmを測る杯66は、内傾する長い立ち上がりもち、底部はヘラケズリする。67・69は、長い脚部に二段三方の長方形透かしを穿つ有蓋高杯である。

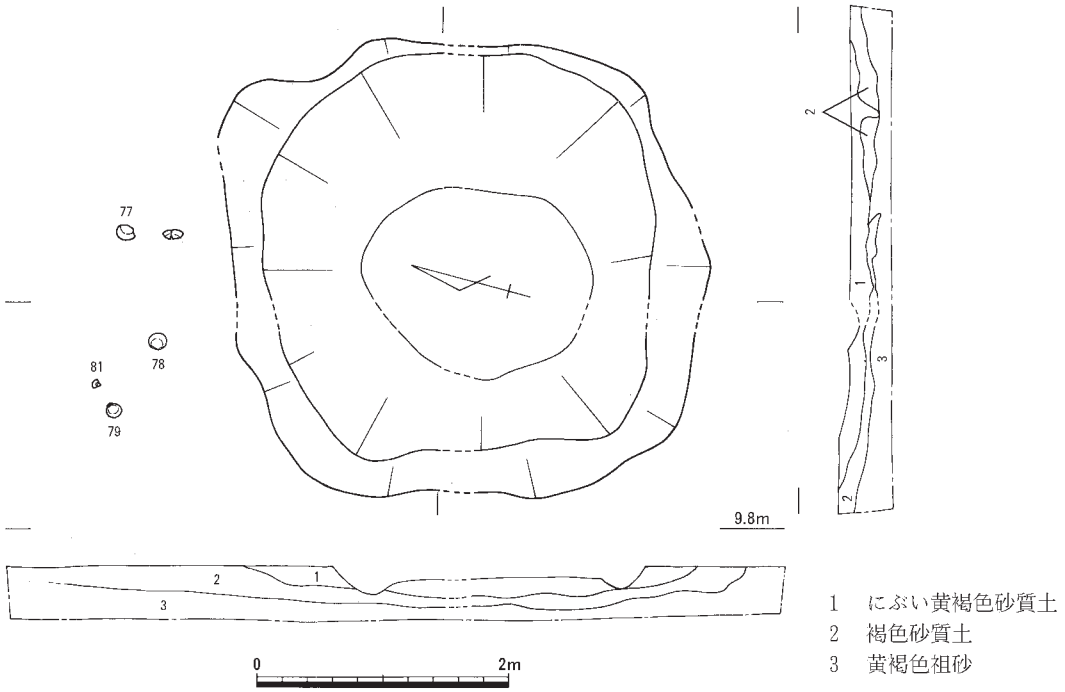
これらは陶色ＴＫ43型式に併行し、６世紀後半に位置づけられる。

（亀山）

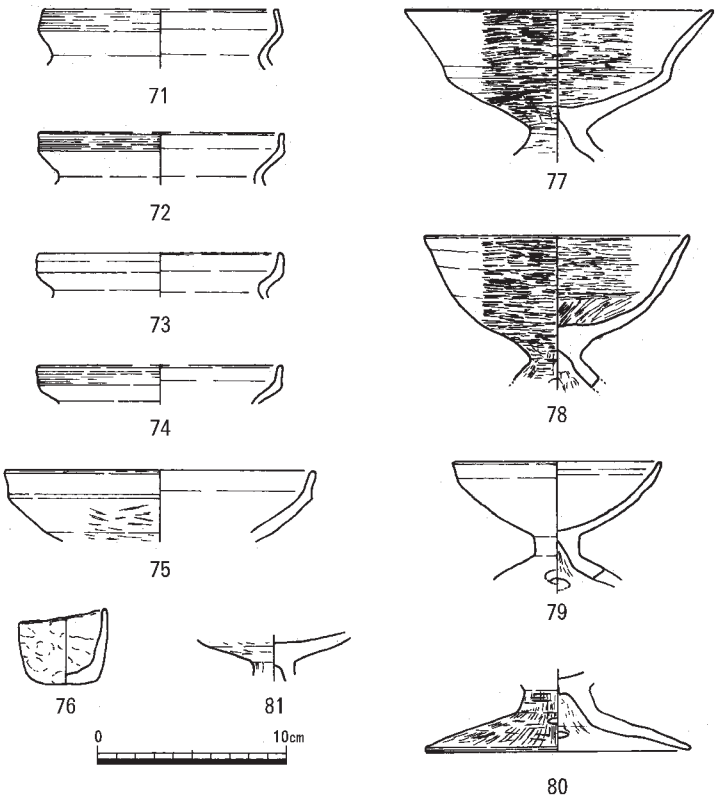
２　土　壙

土壙１（第８・19・20図）

竪穴住居６の西側下層で検出した大きな窪みで、長辺370cm、短辺353cmの不整な方形を呈し、深さは25cmを測る。断面等からは、明瞭な床面や住居を思わせる施設等は確認できなかったが、砂層中に



第19図　土壙１（1/60）

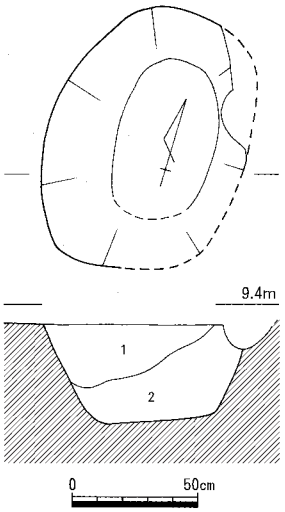


第20図　土壙１出土遺物（1/4・1/3）

掘りこまれていることからすると、住居として掘削する過程で放棄された痕跡とも考えられる。埋土からは古墳時代前期前半の甕71～74や高杯77～81・鉢76・叩き石Ｓ３などが出土している。（亀山）

土壙２（第８・21図）

８区南端に位置し、中世の柱穴により一部掘削を受けている。規模は、長径106cm、短径79cm、深さ39cmを測り、逆台形の断面をなす。土師器の細片や埋土等から古墳時代初頭の時期と考えられる。



1　にぶい黄褐色砂質土
2　にぶい黄褐色砂質土

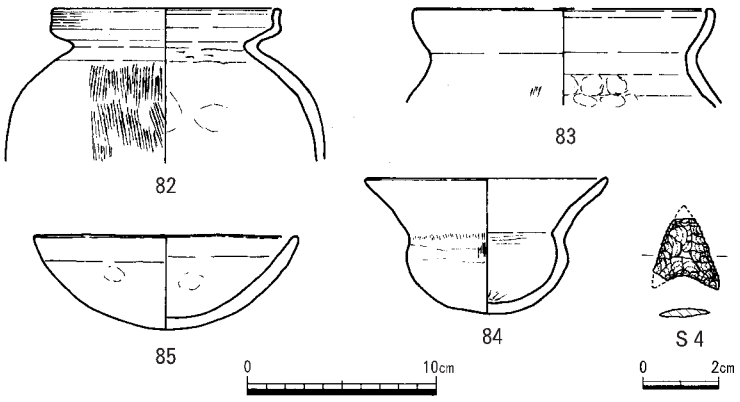
第21図　土壙２（1/30）

３　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物

（第22図、図版18）

82～84は一般国道180号との交差点で確認調査中の出土である。口縁部ヘラガキの甕82、「く」字口縁の甕83、小形丸底壺84、鉢85等が出土している。竪穴住居内の埋土の可能性がある。（註１）Ｓ４の石鏃は弥生時代のもので８区の包含層中からである。（山磨）



第22図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

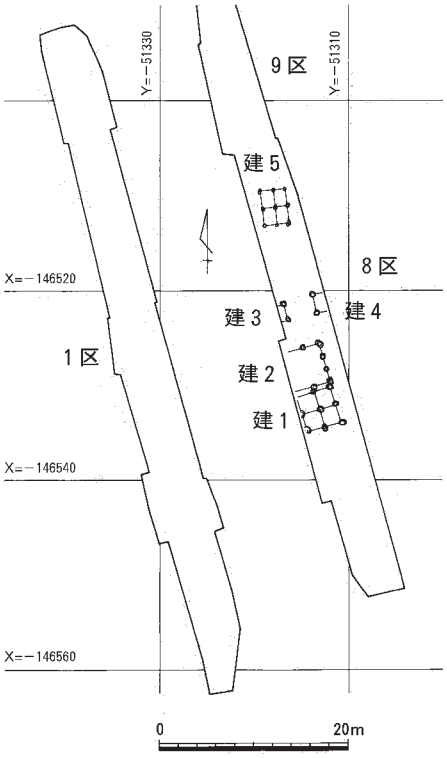
第３節　古代の遺構・遺物

１　掘立柱建物

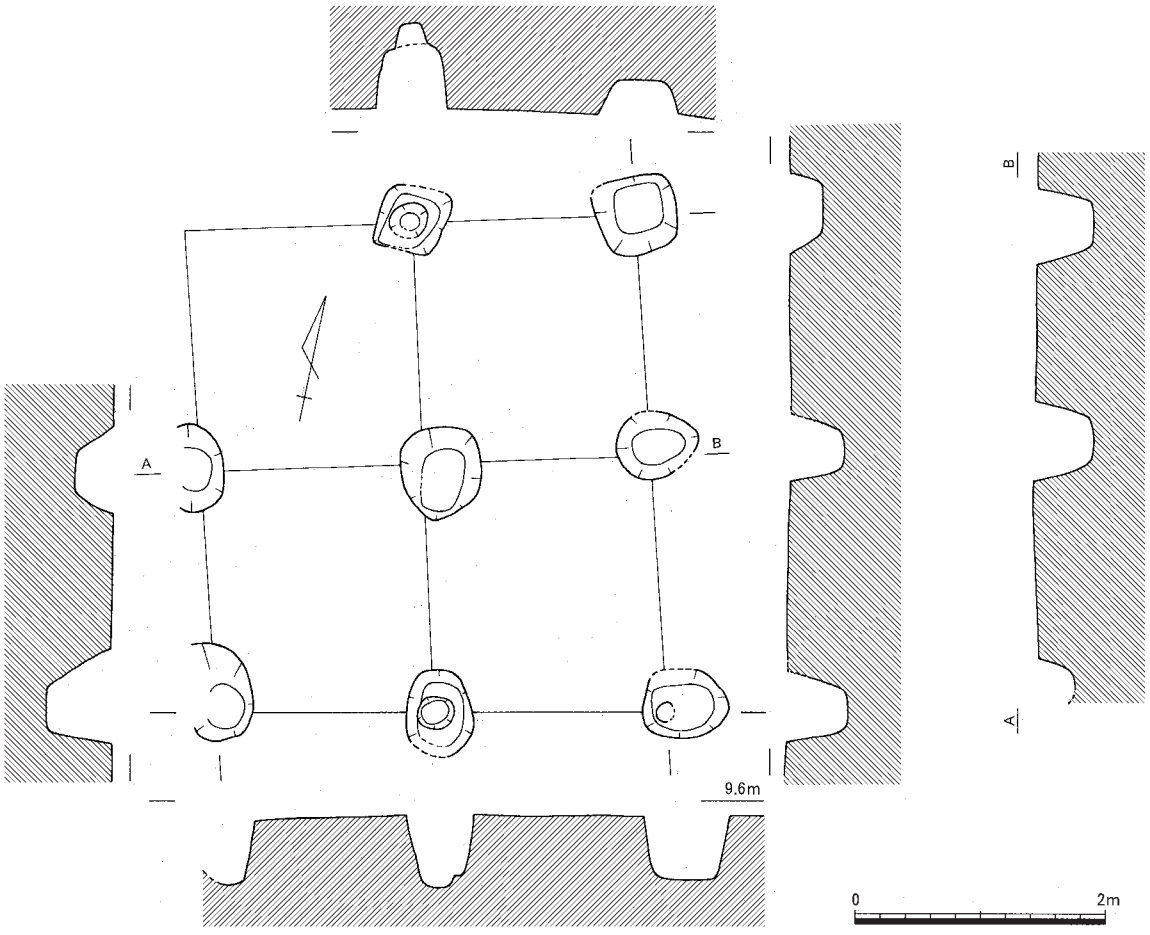
掘立柱建物１（第23・24図）

８区南半に検出した南北２×東西２間以上の総柱の掘立柱建物である。建物の南北軸はＮ－16°－Ｗである。規模は東西365cm、南北397cm、面積14.49㎡である。柱間距離は、東西175～190cm、南北185～207cmを測る。柱穴掘り方は、方形に近い形状をなし一辺70～80cm前後で深さ50～60cmを測る。北西隅の柱穴は未検出である。遺物は柱穴内より須恵器の甕、杯、杯蓋等と土師器の丹塗り椀片、鉄滓等が出土している。

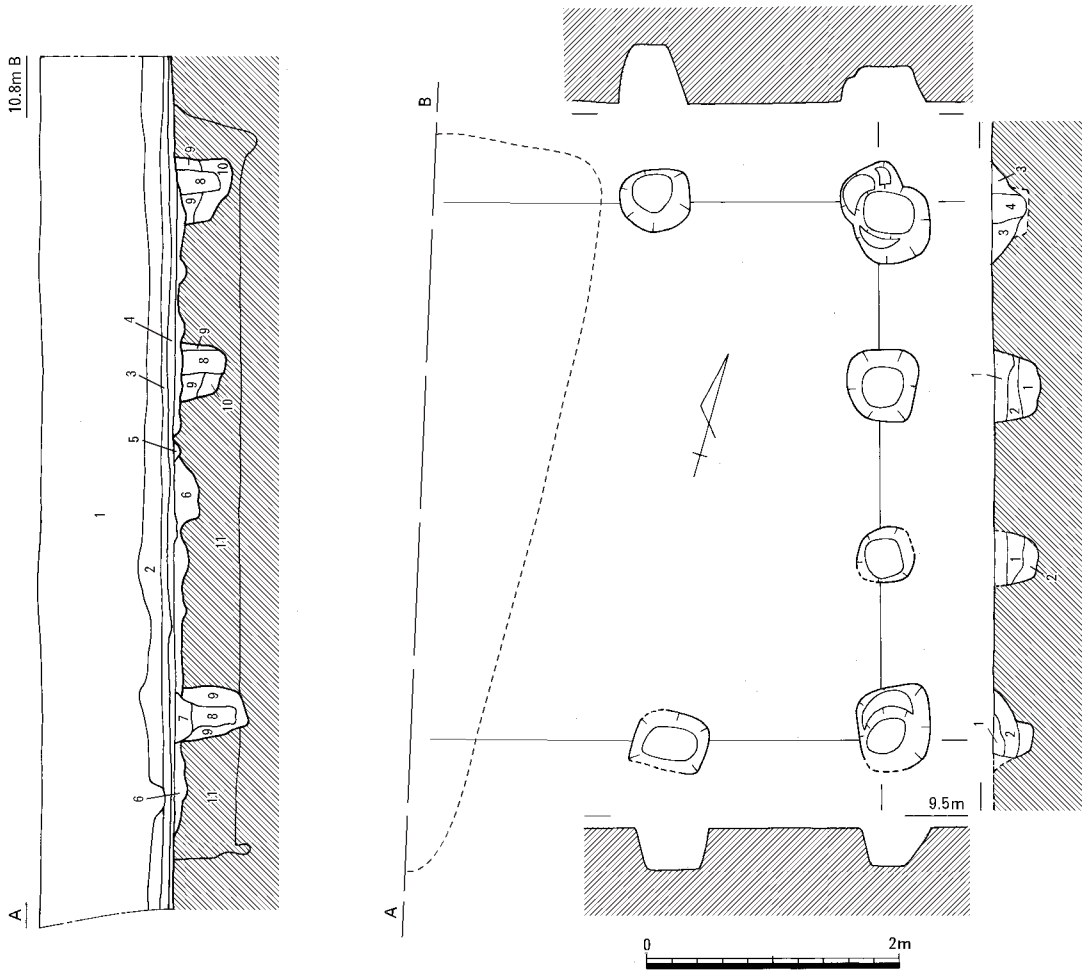
時期は出土遺物や掘り方、建物方位、埋土等から古代の建物と考えられる。



第23図　古代の遺構配置図（1/800）



第24図　掘立柱建物１（1/60）



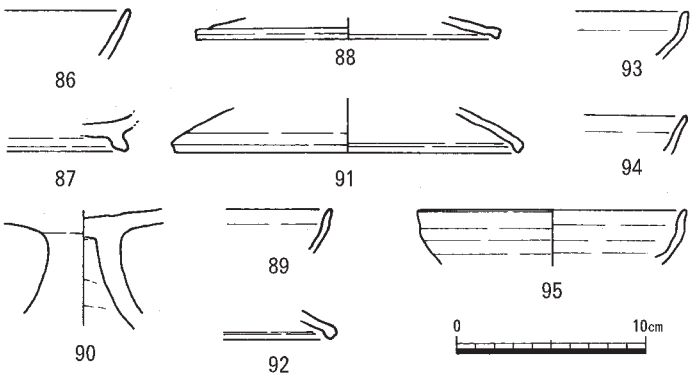
1　黄灰色砂質土（造成土）
2　暗青灰色砂質土（現水田）
3　灰色砂質土
4　褐灰色砂質土
5　灰色砂質土
6　褐灰色砂質土
7　灰色砂質土
8　暗灰黄色砂質土
9　灰黄色砂質土
10　にぶい黄橙色砂質土
11　竪穴住居３埋土
（第７～10層　掘立柱建物２埋土）
1　にぶい黄褐色砂質土
2　灰黄褐色砂質土
3　灰黄色土
4　暗灰黄色土

第25図　掘立柱建物２（1/60）

掘立柱建物２（第23・25・26図）

８区南半に掘立柱建物１の北側柱列と重複して、その北側に検出した南北３×東西２間以上の掘立柱建物である。西端は、竪穴住居３の西壁断面で柱穴を確認した。建物の南北軸方位はN－15°－Wである。規模は南北425cmを測る。柱間距離は、東西165～175cm、南北140～145cmを測る。柱穴掘り方は方形に近い形状をなし、一辺50～60cm前後、深さ30～50cmである。柱穴埋土は、おもに暗灰黄色～灰黄褐色の砂質土である。遺物は柱穴内より土師器、須恵器杯蓋等が出土している。

時期は出土遺物、埋土、建物方位等から古代の建物と考える。

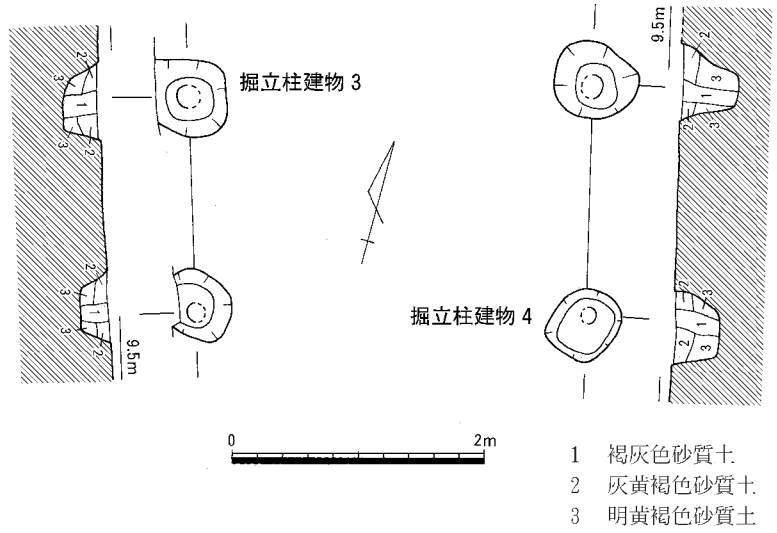


第26図　掘立柱建物２出土遺物（1/4）

掘立柱建物３（第23・27図、図版８）

８区の中央付近に南北２本の柱穴を検出したのみである。当初、東側の掘立柱建物４とで１棟の建物を想定したが柱間等から別建物と判断した。柱間距離は南北170cmを測る。建物の南北軸はN—13°—Wを測る。柱穴掘り方は方形をなし、規模は一辺50～60cm、深さ20～30cmである。褐灰色砂質土の柱痕跡が残る。出土遺物は土師器と須恵器の破片がある。

時期は出土遺物、埋土、方位等から古代の建物と考えられる。



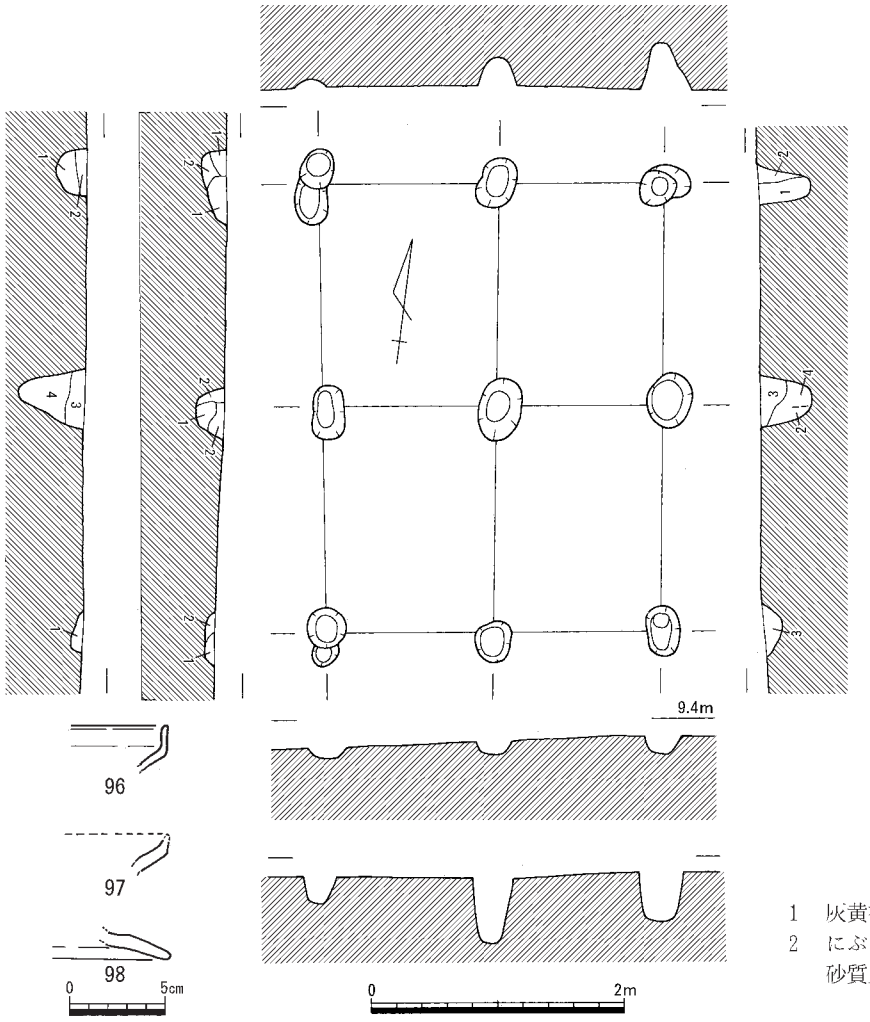
第27図　掘立柱建物３・４（1/60）

掘立柱建物４

（第23・27図、図版８）

８区中央付近の掘立柱建物３の東側に検出した。南北２本の柱穴で東側の調査区外に延びる建物である。当初、掘立柱建物３の一部と捉えていた。柱間距離は南北180cmである。建物の南北軸はN－17°－Wを測る。柱穴掘り方は方形をなし、１辺60cm前後、深さ40cm程である。褐灰色砂質土の柱痕跡が残る。出土遺物は土師器の丹塗り皿、須恵器杯等がある。

時期は出土遺物や埋土、方位等から古代と考えられる。



第28図　掘立柱建物５（1/60）・出土遺物（1/4）

掘立柱建物５（第23・28図、図版７）

８区北半に検出した南北２×東西２間の総柱の掘立柱建物である。建物の規模は南北360cm、東西270cmである。建物の南北軸はN－８°－Wである。柱穴掘り方は、直径30～40cm前後の円形もしくは楕円形を呈し建て替えが認められる。柱穴の深さは、10cm前後と40cmほどの２種類がある。出土遺物は、古墳時代初頭の土師器の甕、高杯等の他に須恵器片がある。

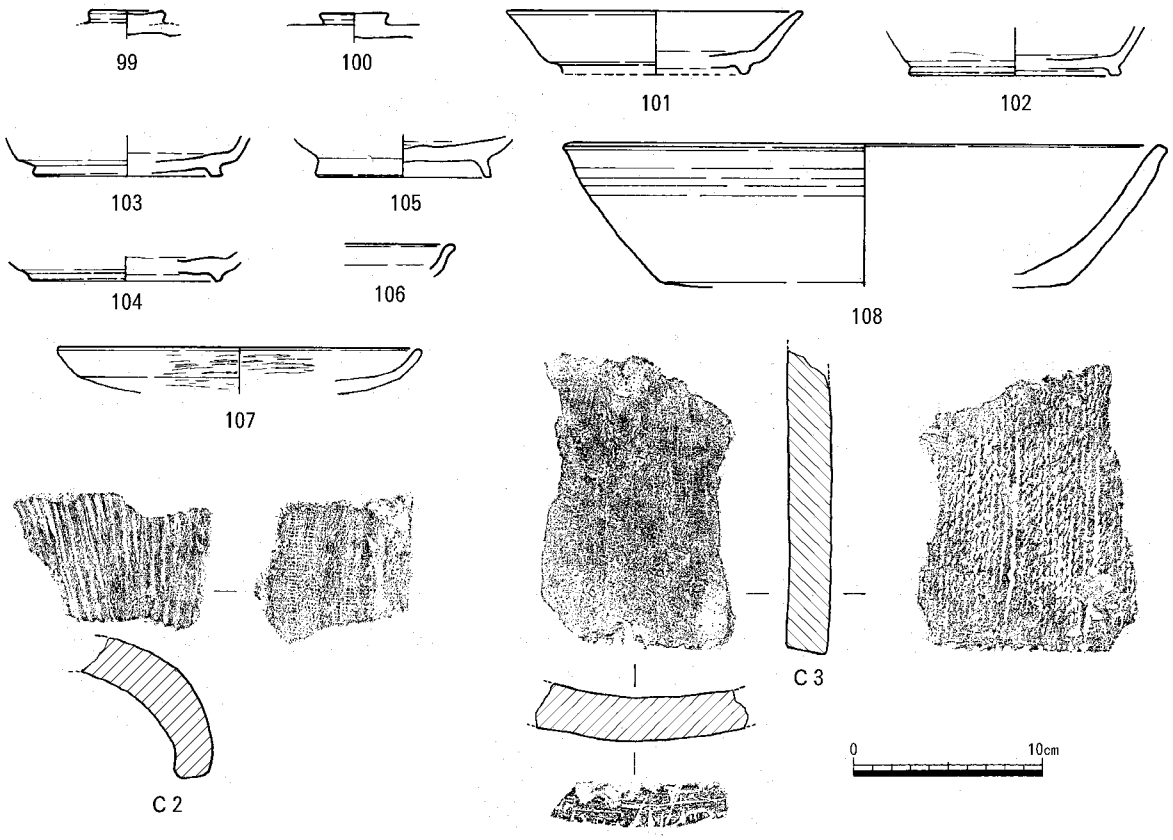
時期は、出土した須恵器が混入の可能性があることや掘立柱建物１～４とは柱穴掘り方、方位が異なり、竪穴住居１～４と同時期の古墳時代初頭の可能性もある。

２　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第29図）

遺構の検出中や時期の異なる遺構から、８・９世紀代を中心とする須恵器、土師器、瓦などが出土しているが、中世の遺物に比較すると少ない。

須恵器では杯、皿、鉢が図化可能であった。**99・100**は杯蓋のつまみで、直径3.5～4.0cmの扁平な形状である。**99**は瓦質に近い。杯身**101～105**のうち**101**は、口径10.0cm、高さ3.4cm、底径15.2cmを測る。底部はいずれもヘラキリ調整である。**108**は鉢で口径30.8cm、底径7.7cm、高さ21.4cmを測る。体部内外面はナデ調整、底部にヘラケズリを施している。**106・107**は土師器の皿である。いずれも内外面に赤色顔料を塗布し、ミガキを施している。**Ｃ２**は丸瓦、**Ｃ３**は平瓦で、いずれも凸面に粗い縄目タタキを、凹面に布目を施す。（山磨）



第29図　その他の出土遺物（1/4）

第４節　中世以降の遺構・遺物

１　掘立柱建物

掘立柱建物６（第30・31図、図版８）

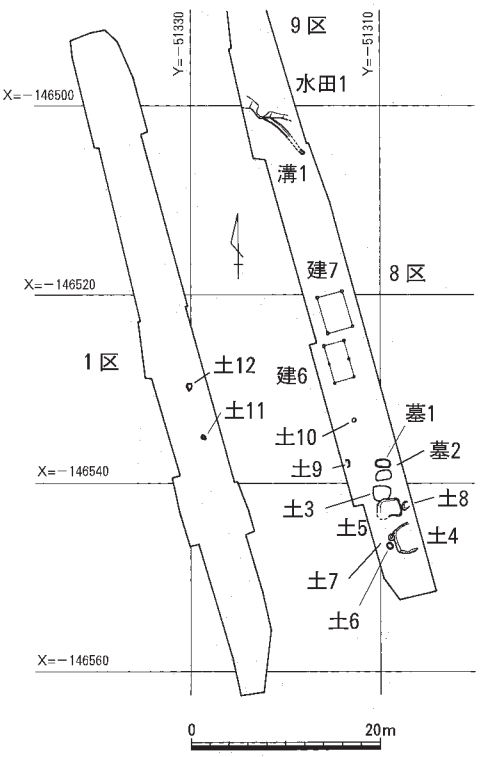
調査区の中程の位置で検出された２×１間の掘立柱建物である。

検出された建物の平面形状は梁間と桁行の比率は１対1.88を測る長方形を呈し、その建物の床面積は8.7㎡を測ることができた。

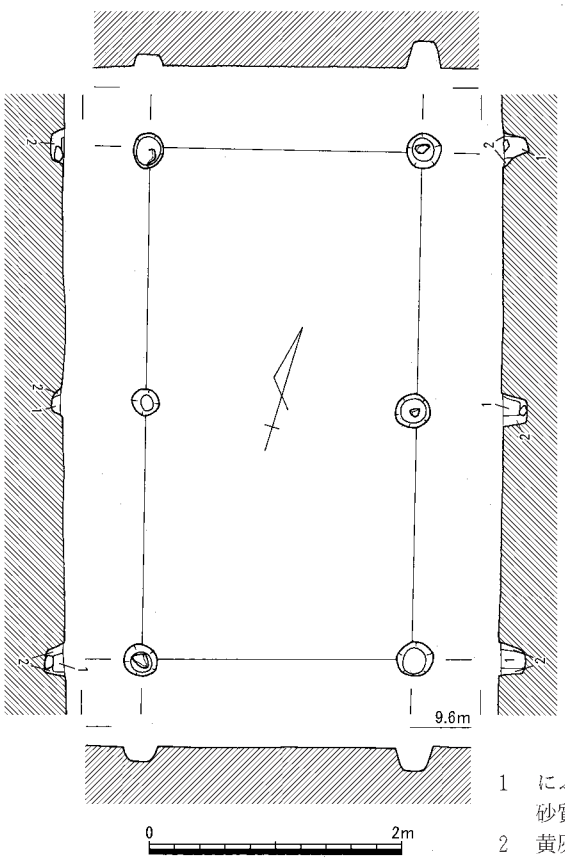
各柱穴の平面形状は検出面で径20～30㎝のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは７～23㎝とまちまちの深さを計測した。

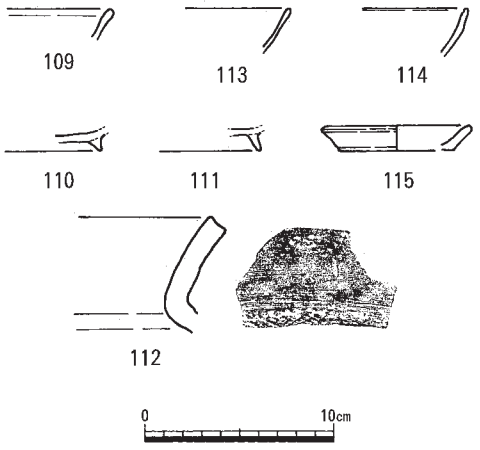
遺物はわずかに確認でき、土師質土器の椀・皿・亀山焼の甕が出土している。

出土遺物から掘立柱建物の時期は、遺物、建物の規模等から中世以降と考えられる。



第30図　中世以降の遺構配置図（1/800）





第31図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/4）

掘立柱建物７（第30・32図）

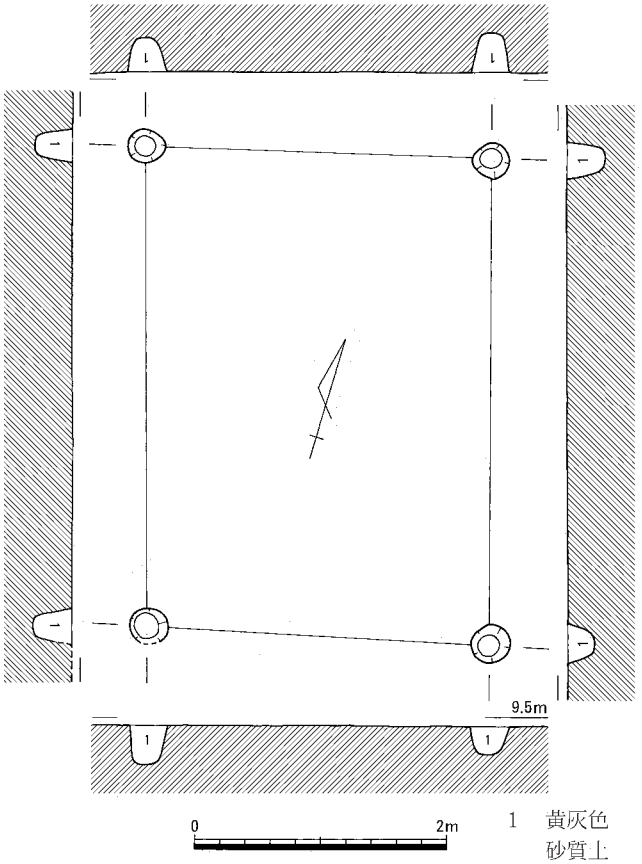
掘立柱建物６の北側において検出した建物である。

検出した掘立柱建物の規模は１間×１間であり、平面形は梁間と桁行の比率が１対1.44を測る長方形を呈し、床面積は10.4㎡を測る。

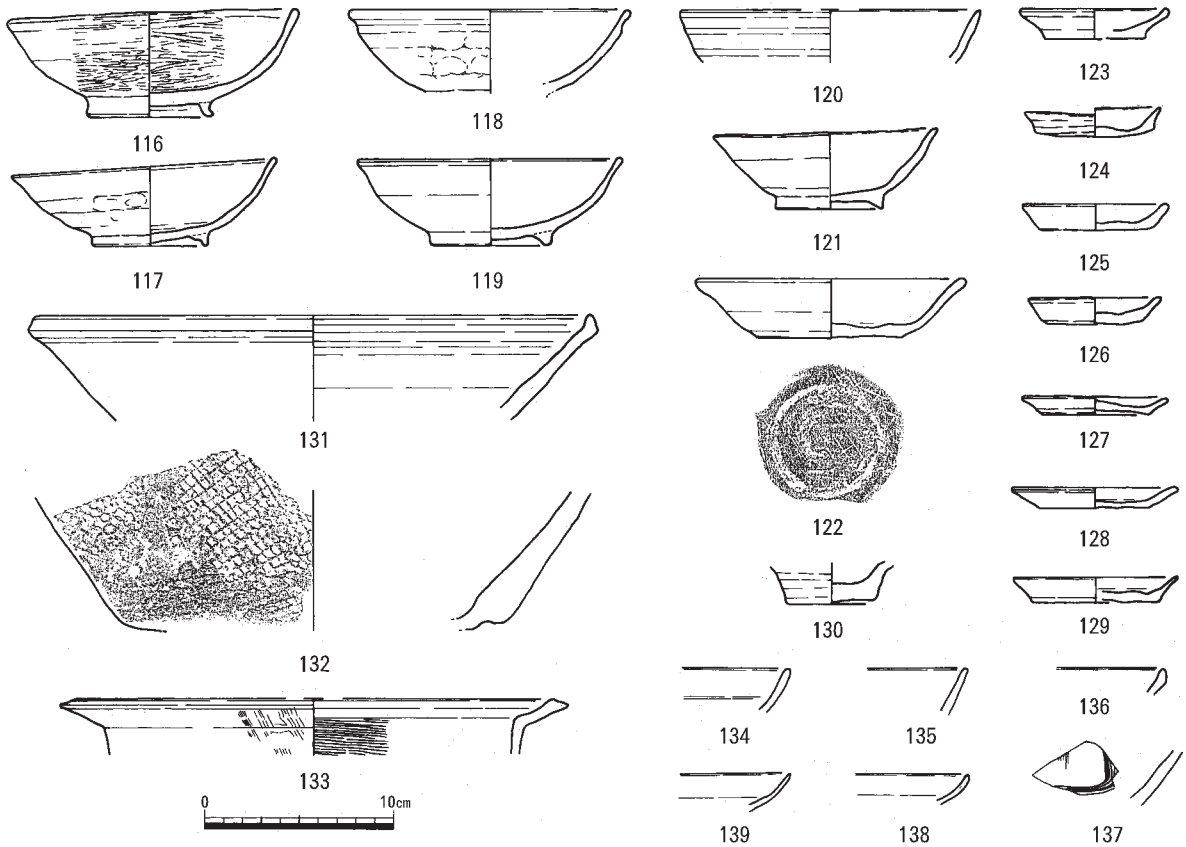
検出された各柱穴の検出面での平面形状は径30cmを測り、ほぼ円形を示し、その深さは、検出面から20～30cmとばらつきがある。

検出された掘立柱建物の柱穴内からの出土遺物は確認されていない。

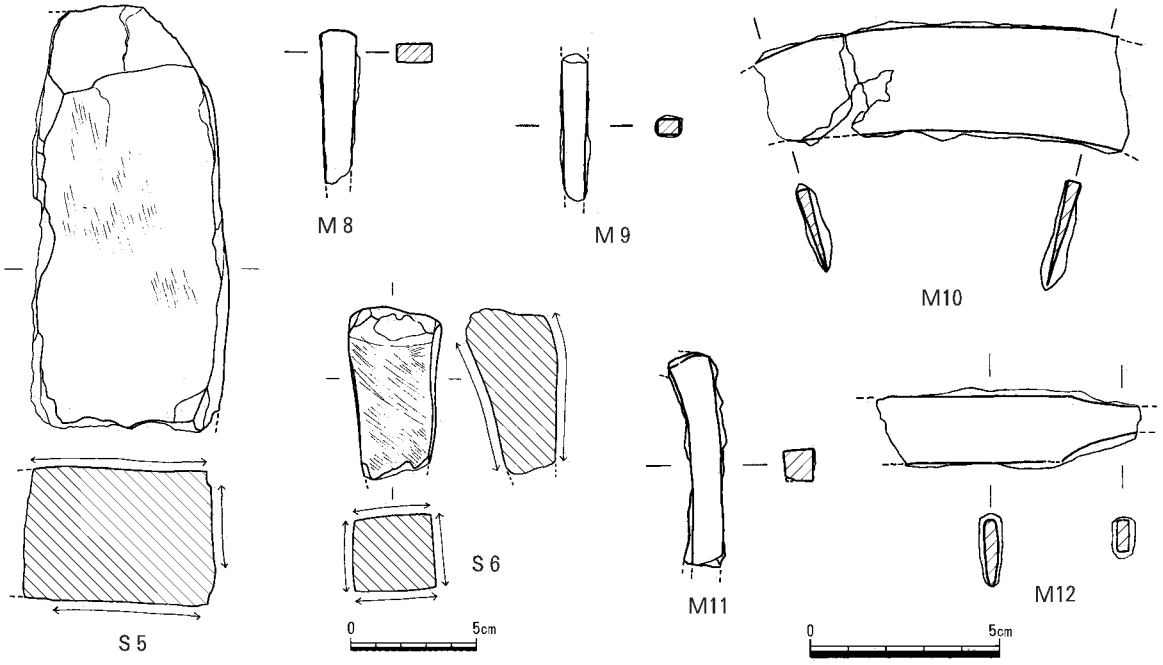
掘立柱建物の時期を断定することは困難であるが、掘立柱建物６と検出面が同遺構面であるため、また建物を構成する柱穴の規模・配列の方向性等から掘立柱建物７の構築時期は中世以降と考えられる。　（二宮）



第32図　掘立柱建物７（1/60）



第33図　柱穴出土遺物①（1/4）



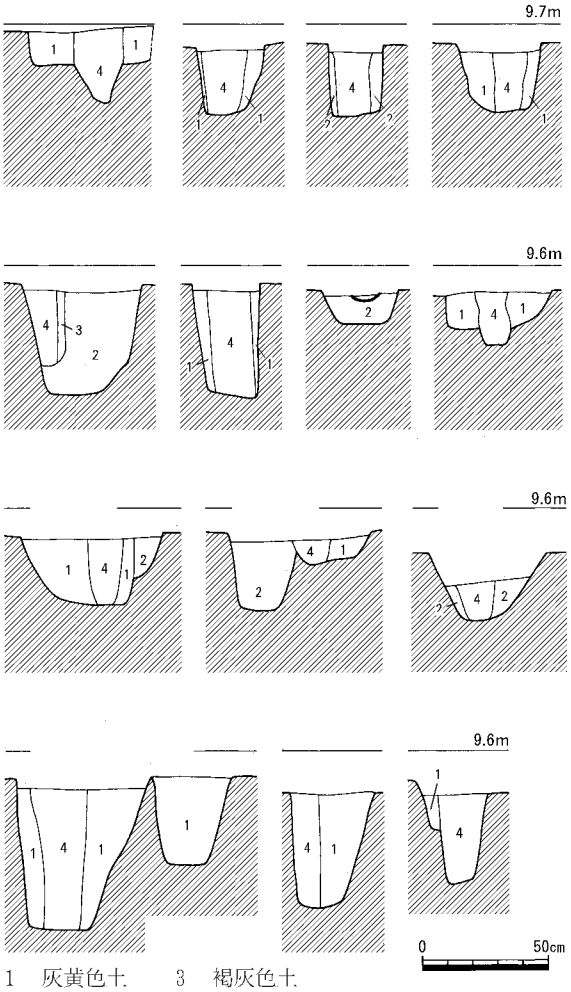
第34図　柱穴出土遺物②（1/3・1/2）

２　柱　穴

柱穴（第33～35図、図版17）

中世の柱穴は、８区の南側を中心に検出した。掘立柱建物６・７以外は狭小な調査区と多数の柱穴と相まってまとまりを把握出来なかった。柱穴規模は直径20～50cm前後で、総じて深く検出面より70cm以上の深さをなす柱穴も認められた。

柱穴内の遺物は、土師器、須恵器、青白磁、鉄器、石器、鉄滓等が出土している。116～119は早島式の土師質椀土器で、116は口径15.1cm、高さ6.35cm、底径6.2cmを測り、内外面にヘラミガキを施している。131は東播系の須恵質土器の鉢で口径30cm、132は亀山焼の甕の底部である。133は土師器の鍋で外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のナデとハケメを施している。134～139は磁器の各器種で、134～136・138・139は白磁の椀、皿で、137は同安窯系の青磁片で内面に櫛描き文を施している。石器では砥石Ｓ５・Ｓ６が、鉄器では釘Ｍ８・Ｍ９・M11、刀子M12、鎌M10が出土している。　（山磨）



第35図　柱穴断面（1/30）

３　土　壙

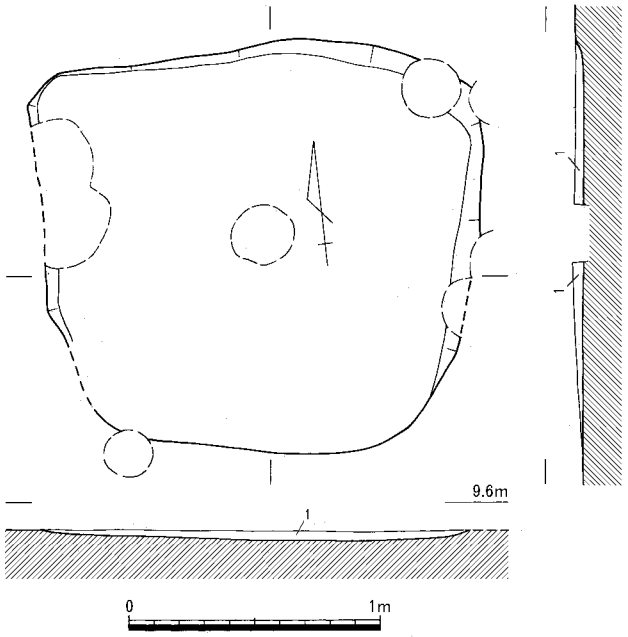
土壙３（第30・36図）

８区の南側で検出した。長辺170㎝、短辺163㎝を測る方形の土壙で、掘立柱建物６の南東13.7ｍに位置する。深さ４㎝の浅い窪み状をなすが、本来は包含層上から掘りこまれたものと思われる。

包含層除去後に確認したため、この土壙に伴う確実な遺物は確認できなかったが、灰褐色をなす埋土の特徴から中世に属するものと思われる。

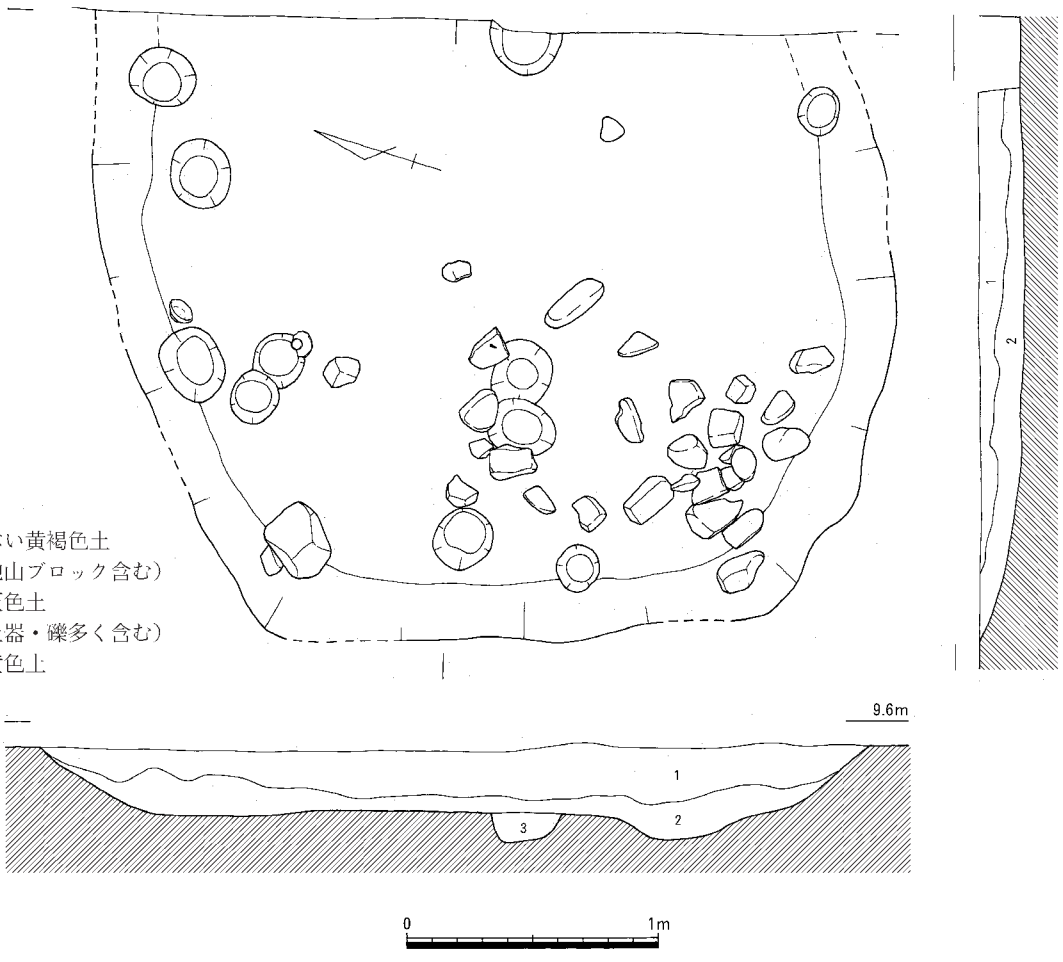
土壙４（第30・37・38図、図版８・17）

土壙３の南東３ｍに位置する大形の土壙で、８区南側の東壁にかかって検出した。南北243㎝以上、東西311㎝の不正な

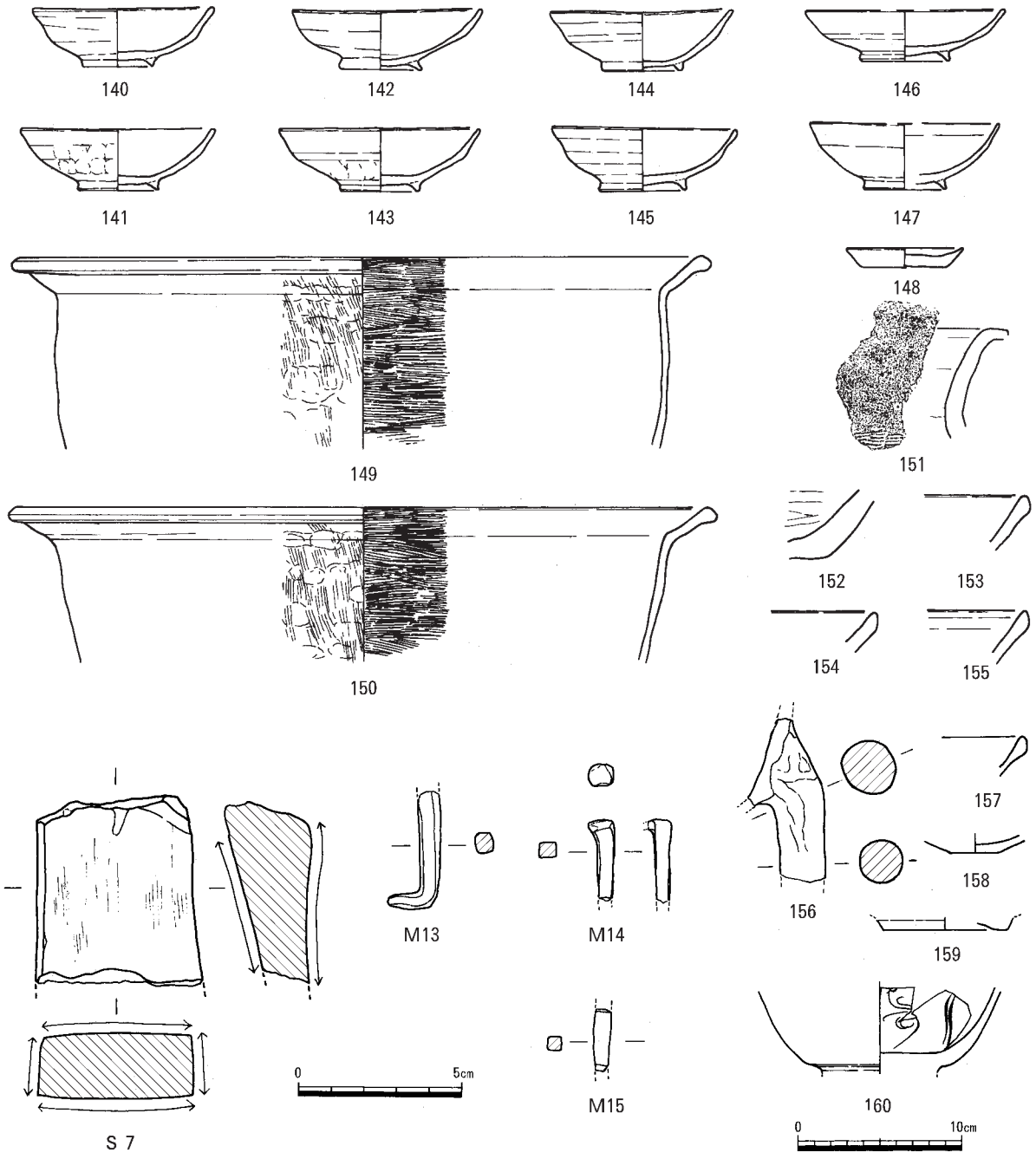


1　にぶい黄褐色砂質土

第36図　土壙３（1/30）



第37図　土壙４（1/30）



第38図　土壙４出土遺物（1/4・1/2）

方形を呈し、深さは現状で24㎝ある。底面には柱穴が複数見られたが、この土壙に伴うものかどうか明らかでない。埋土は上下２層に分かれるが、褐灰色をなす上層から人頭大の礫にまじって４箱ほどの遺物が出土した。140～147は灰色の胎土をもつ土師器椀で、口径10.9～12.0㎝、器高3.6～4.1㎝を測り、底部には小さな高台を貼り付ける。149・150は口縁部を折り曲げた土師器の鍋で、脚部の破片156も見られる。151は常滑焼の甕の口縁部、152～155は東播系擂鉢の一部である。輸入磁器には白磁の碗157・159や皿158、青磁の碗160があるものの、その量はごくわずかである。このほか砥石Ｓ７や鉄釘M13～M15なども出土している。これらの遺物はおおむね13世紀後半～末に比定されることから、この頃に機能を終えたものと思われる。

土壙５（第30・39図）

土壙３の南に接して検出した長辺253㎝、短辺170㎝の不整形を呈す浅い窪みで、土壙３と同様に本来はより高い位置から掘りこまれていたものと思われる。

にぶい黄褐色の埋土から、鎌倉時代の土師器椀161～163や皿164・165、鍋166、管状土錘Ｃ４などが出土しており、その形状から土壙３と似通った性格が想定される。

（亀山）

土壙６（第30・39図）

８区南端に位置する。土壙４のすぐ東で検出した。平面形は長径72cm、短径56cmの楕円形である。

埋土中では吉備系土師器椀167・168・170、土師器171、白磁169を検出した。167・170は内外面ともミガキが観察できない。13世紀後半から14世紀初頭と考える。169は玉縁状口縁である。

土壙７（第30・39図、図版９）

８区南端に位置する。土壙６のすぐ北で検出した。長径61cm、短径54cmで、不整形な円形を呈する。中央に大きな石を置き、その回りを拳大の石で囲む。柱の補強を目的としたものか。

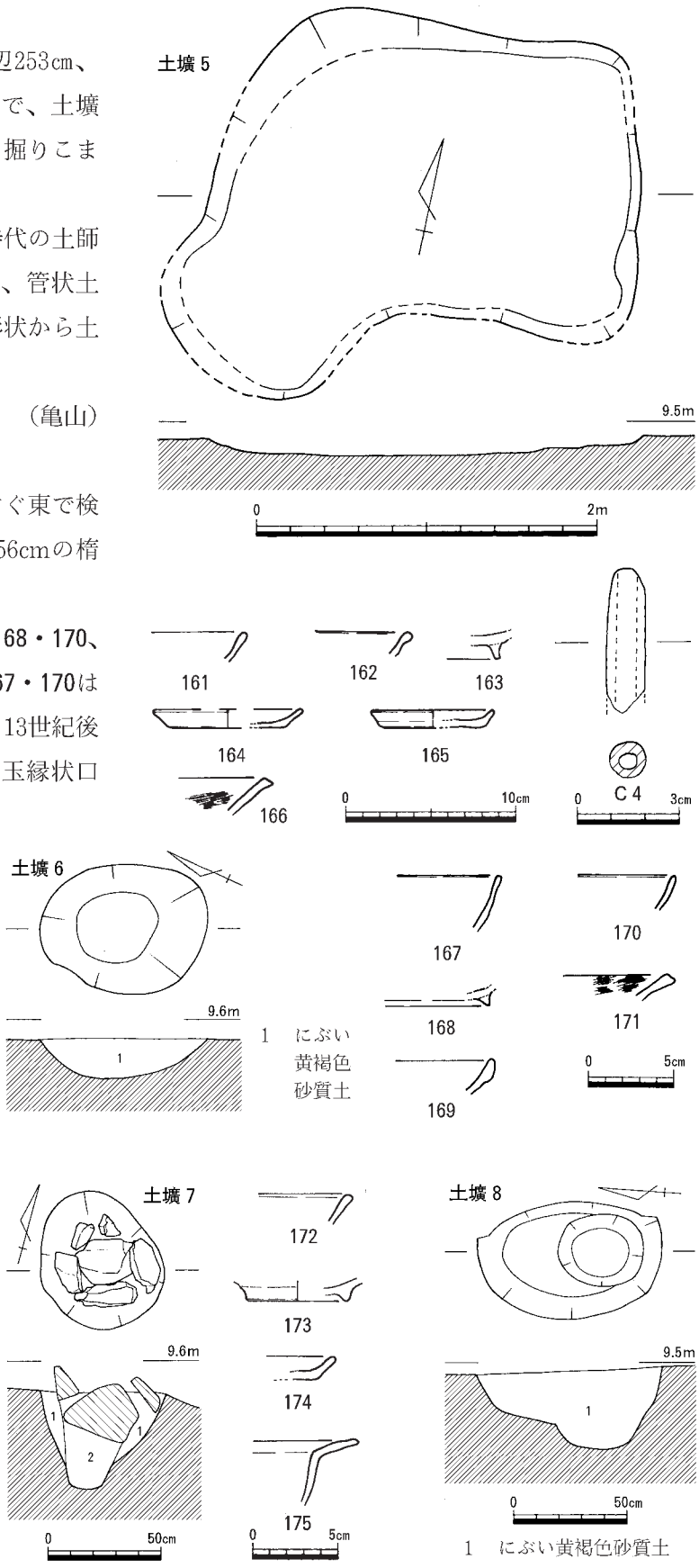
172・173は吉備系土師器椀で13世紀後半から14世紀初頭のものと考える。

土壙８

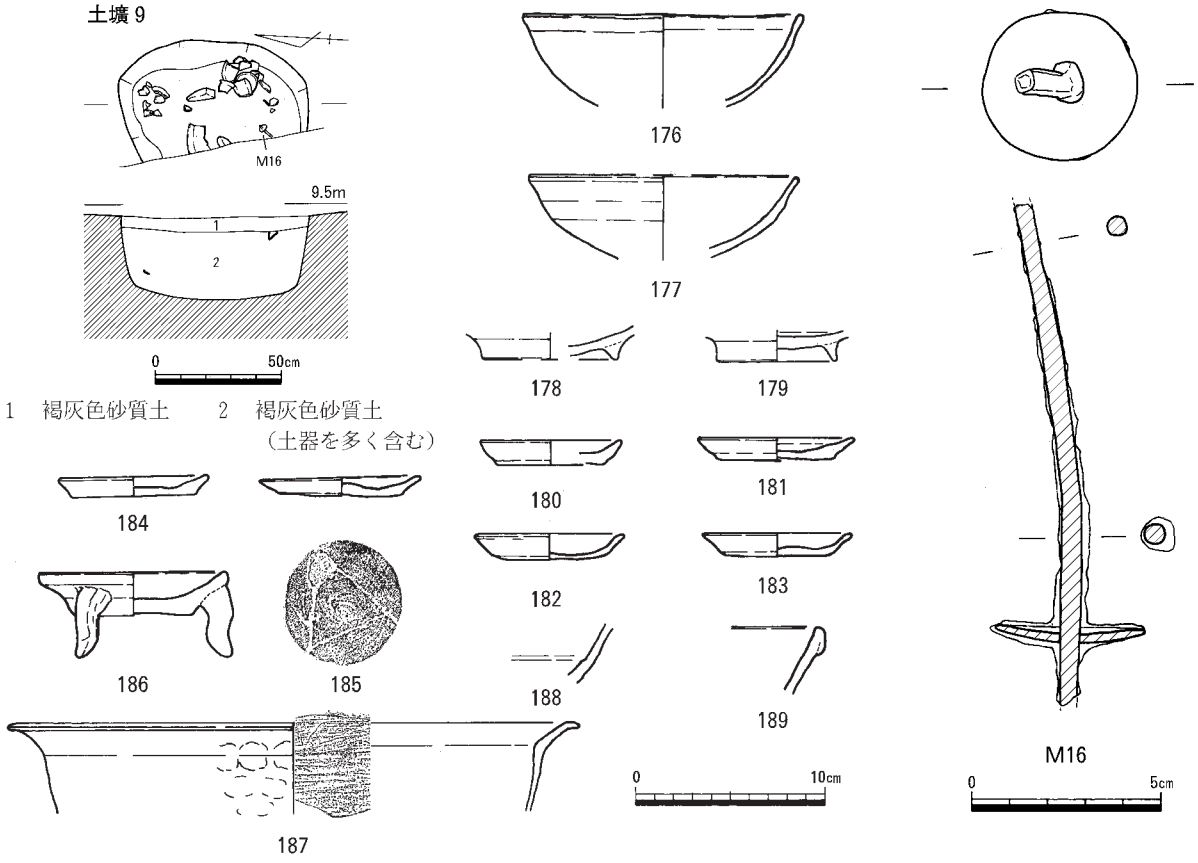
（第30・39図、図版９）

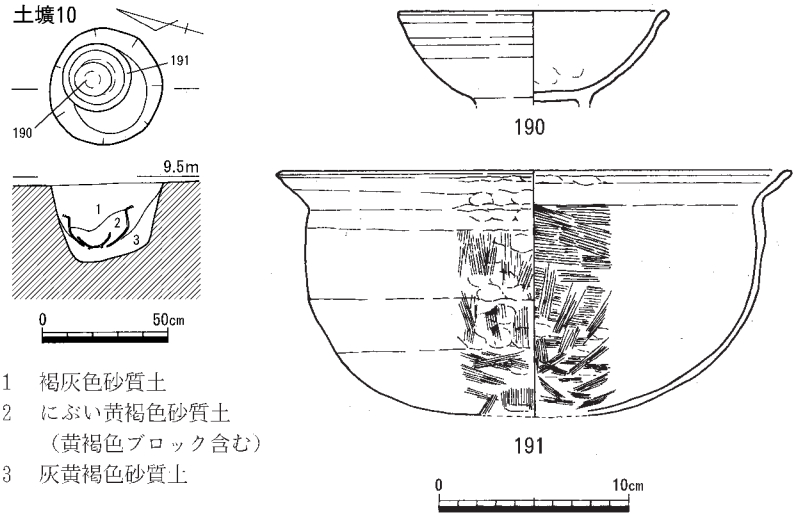
８区南端付近に位置する。土壙５のすぐ東で検出した。平面形は楕円形で、長径80cm、短径51cmである。底面南が一段深くなる。

図化できる遺物は無い。



第39図　土壙５～８（1/40・1/30）・出土遺物（1/4・1/2）





第40図　土壙９・10（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙９（第30・40図、図版９・17・18）

８区南端やや中央寄りに位置する。墓１の西２ｍの地点で検出した。西半は調査区外となるため、全体の様子は不明であるが、おそらく平面形は楕円形であったと考える。残存部の長軸は74cmである。検出面からの深さは32cmである。底面は平坦で、断面形は台形を呈する。

掲載した遺物は全て２層で確認したものである。176～179は吉備系土師器椀である。176・177は風化が著しいが、内外面ともミガキはなかったと推察する。178は内面にススが付着し、179は内面が平滑になっており、使用痕が観察できる。それぞれ小片のため、確定はし難いが13世紀代のものと考える。180～185は土師器皿で、薄手のものが多い。185の底部には明瞭に糸切り痕が残る。186は三足の脚が付く小皿である。187は内外面にススが付着する。189は口縁が玉縁状となる白磁碗である。188も白磁である。M16は鉄製の紡錘車であるが、両端が破損していた。

土壙10（第30・40図、図版９・17）

８区中央やや南寄りに位置する。建物６の南４ｍの地点で検出した。平面形は円形で、直径は約45cmである。埋土中で土師器鍋**191**の中に、吉備系土師器椀**190**が入った状態で見つかった。

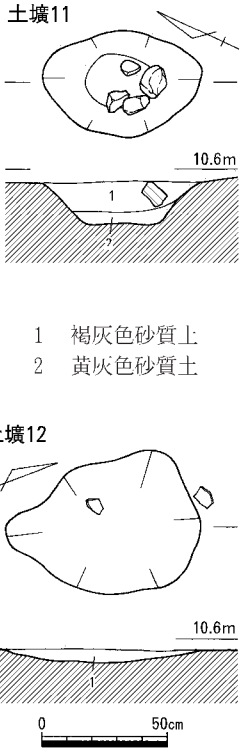
190は内面にミガキが無く、外面上半にヨコナデ痕が明瞭に残る。外面下半はひび割れが目立つ。押し出して成形した痕跡と考える。13世紀前半に属する。**191**は外面にススが付着する。

土壙11（第30・41図）

１区中央やや南で検出した。平面は楕円形を呈し、長径63cm、短径43cmである。根がらみの可能性がある石を検出した。土器等の出土遺物は無い。

土壙12（第30・41図）

１区中央に位置する。土壙11の北６ｍの地点で検出した。平面は不整形で、長径77cm、短径54cmである。深さ６cmで浅い皿状を呈する。検出時に須恵器片２点を検出した。内面には当て具痕が明瞭に残る。（重根）



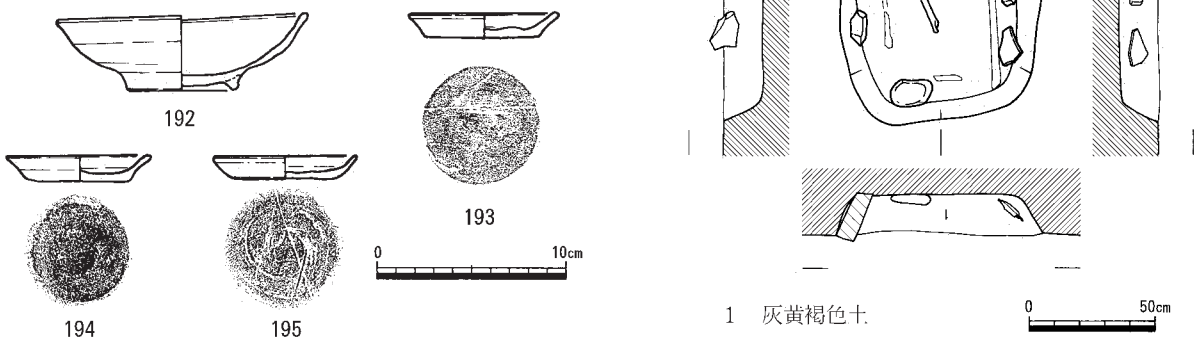
第41図　土壙11・12
（1/30）

４　土壙墓

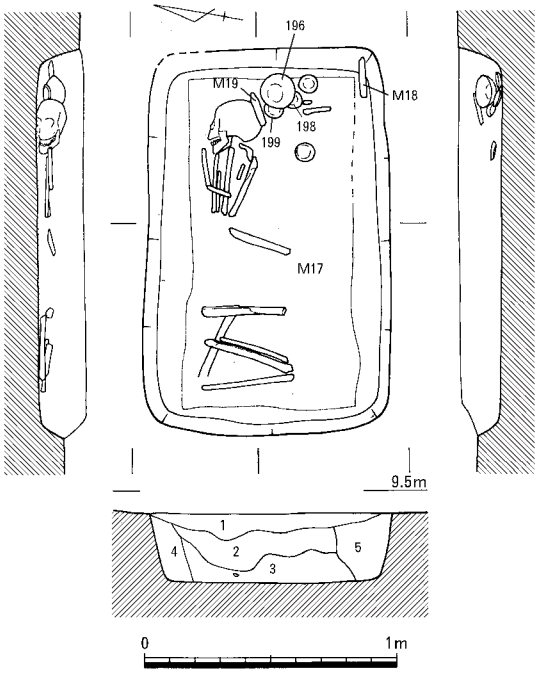
土壙墓１（第30・42図、図版10・17）

土壙９の東2.5ｍで検出したもので、８区の南側に位置する。長辺153cm、短辺80cmの東西に長い隅丸長方形の墓壙内に、長さ107cm、幅50cmの木棺を収めていたようで、深さ16cmの底面には側板痕跡が見られ、墓壙との間隙にはそれを支持するように礫や瓦が配されていた。東に頭位をおく屈葬であったようで、棺内東端には土師器の椀や皿が上向きに置かれていた。

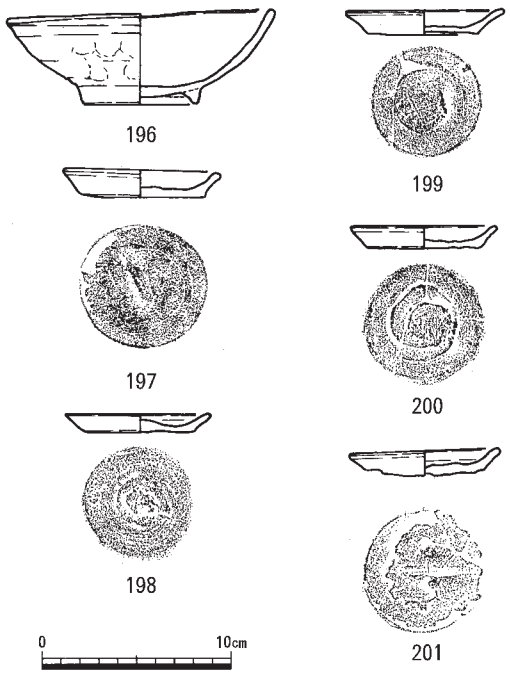
192は、口径13.0cm、器高5.1cmを測る椀で、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。口径7.5～7.6cm、器高1.3～1.4cmの皿**193**～**195**は、底部をヘラキリした後ナデを施す。これらの遺物はおおむね13世紀中頃に位置付けられる。

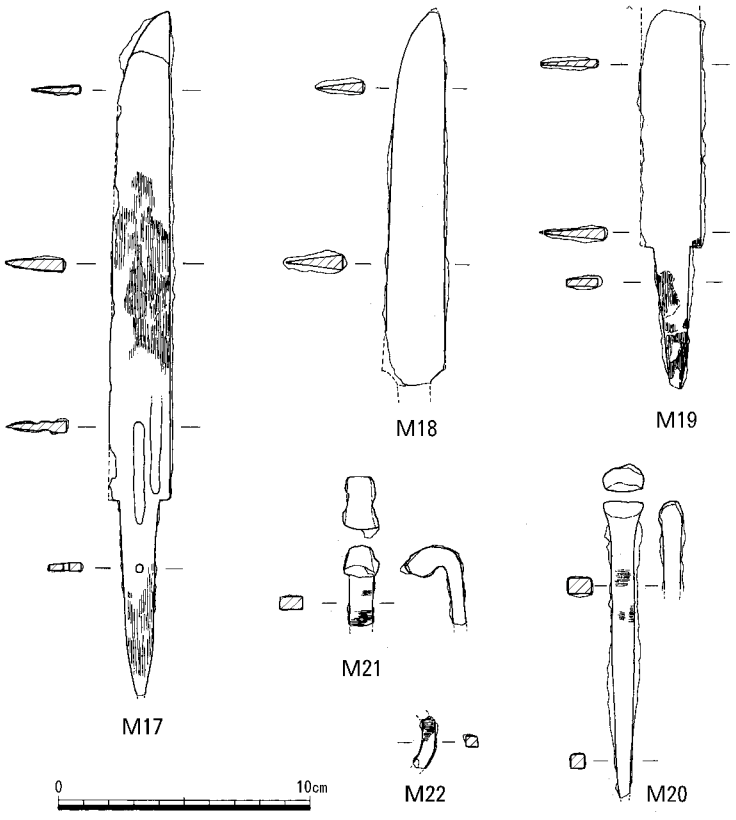


第42図　土壙墓１（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色砂質土
2　明黄褐色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　にぶい黄橙色砂質土
5　にぶい黄橙色砂質土





第43図　土壙墓２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙墓２（第30・43図、図版11・17・18）

土壙墓１の南に接して検出したもので、８区の南側に位置する。墓壙は、長辺155㎝、短辺98㎝の東西に長い方形を呈し、その底面は土壙墓１より12㎝ほど低い位置にある。土層断面や墓壙底面に残る痕跡から、長さ133㎝、幅68㎝の木棺が使用されたものと判断された。人骨は粘土化していたが、東に頭をおく大柄な男性の右側臥屈葬であることが判明した。

遺物は、棺内から土師器椀１・皿５、刀子１、剃刀１、釘３、棺外から刀子１が出土した。196は口径14.2㎝、器高5.1㎝を測る早島式の椀で、197～201はいずれも底部をヘラキリする皿である。M17は腰部から出土した長さ27.3㎝の刀子で、頭上に置かれていたM19は長さ15㎝の剃刀である。

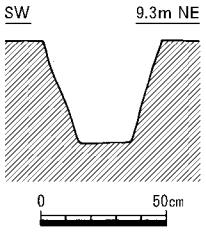
時期は、土壙墓１に先行する13世紀前半と考えられる。（亀山）

５　溝

溝１（第30・44図）

８区北半に検出した南東から北西方向に流走する溝である。途中一部未検出であるが検出長約5.5m、幅47cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈し、灰白色粘質土ブロック混じりの灰褐色砂質土の埋土である。遺物は土師器の細片が出土している。

時期は出土遺物や遺構の切り合い等から中世と考えられる。

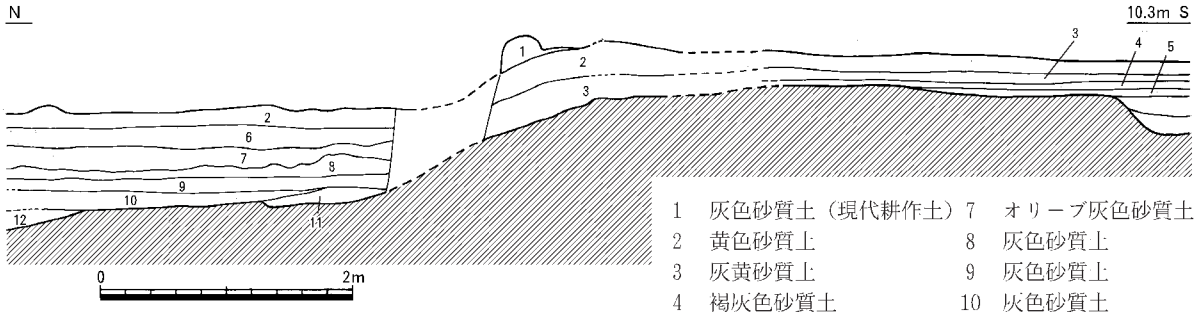


第44図　溝１（1/30）

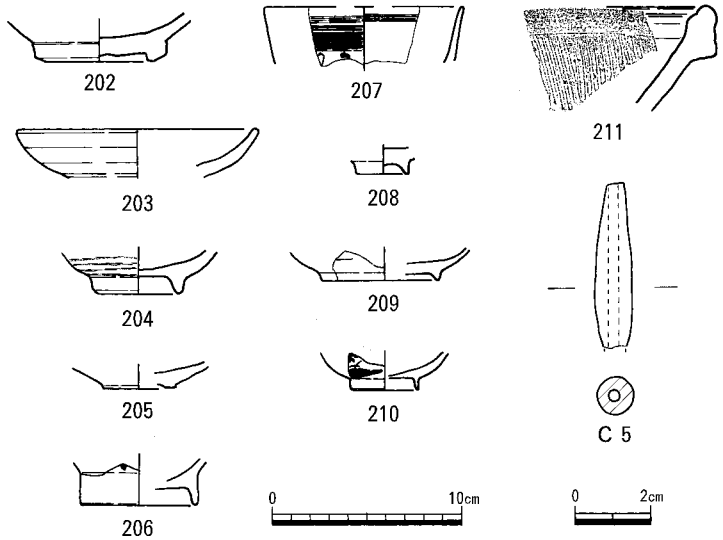
６　水　田

水田１（第30・45図）

９区の微高地北端の下がりに検出した水田層である。微高地上に検出した古墳時代初頭の竪穴住居４と中世の溝１の北半がいずれも水田造成により削平されている。現水田層上面には厚さ90～120cmの造成土が覆い、この造成土下部の現水田面が８・９区境付近で畦畔を境に北側が約30cmほど低くなっていた。この一段低い北側の水田には、現代から近世の水田層が複数認められた。掲載した第45図第２層が造成土下の現代水田耕作土層である。第６・７層はオリーブ灰色砂質土がブロック状の堆積を呈し、水田造成土とみられる。第８層は灰色砂質土で造成土前の水田耕作土層である。第９・10層は灰色砂質土をなし、いずれも下部に鉄分の沈着層が認められた。



遺物は、主に近世以降の陶磁器を中心に出土している。202は中世に属する白磁碗で底部に削り出し高台が付く。203～210は肥前系の陶磁器で、203～205は唐津、206～210は磁器である。211は備前焼きの擂鉢である。土製品にはＣ５の細長い管状をなす土錘がある。長さ4.5cm、直径1.0cm、重量3.99gを測る。いずれも第７～11層の水田層から出土している。

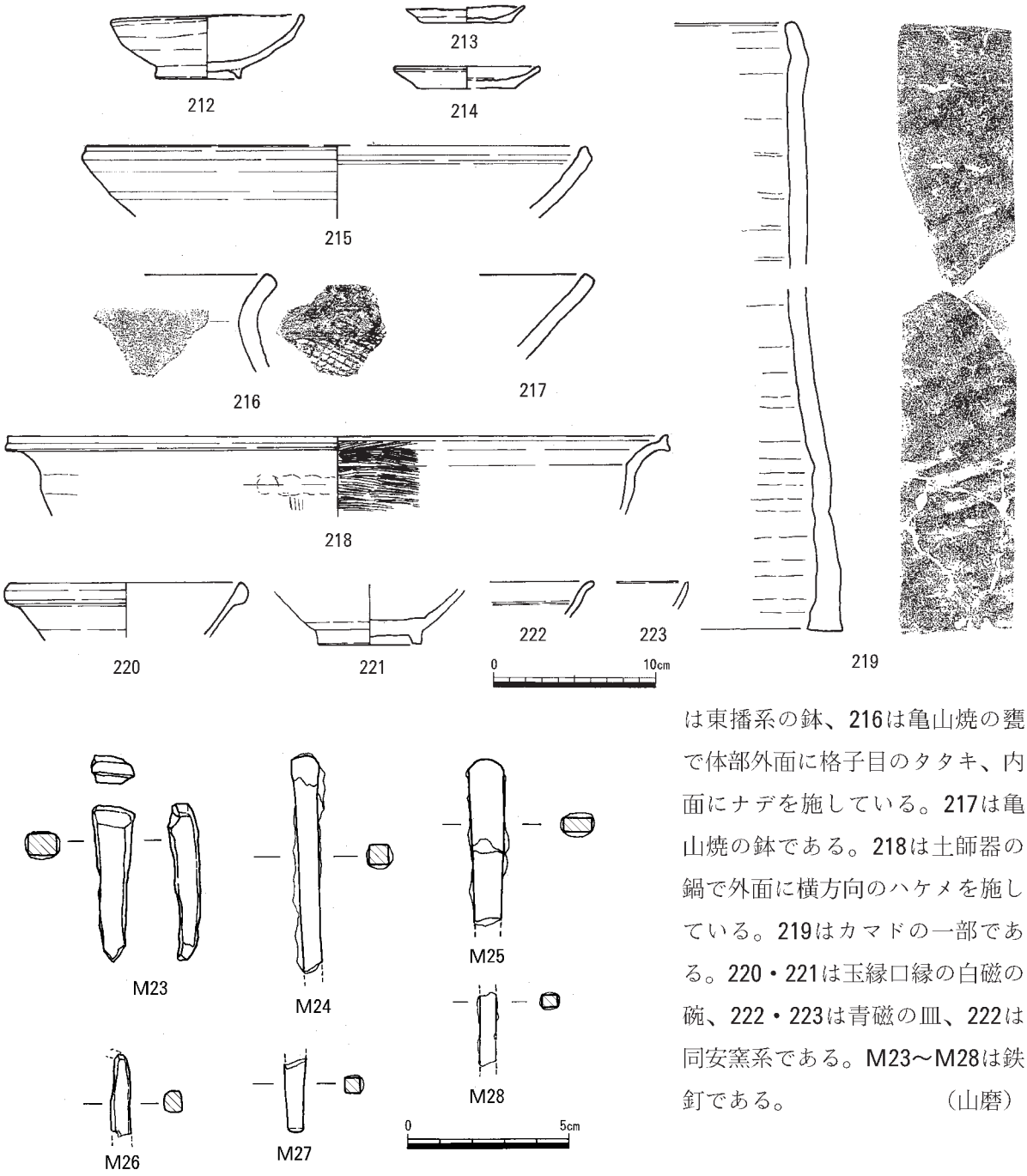


第45図　水田１断面（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

7　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第46図）

遺構の検出や掘り下げ中に土器、陶磁器、土製品、金属製品が出土している。212は高台を持つ土師質の椀（早島式）で、口径11.7cm、底径5.1cm、高さ4.0cmを測り内外面ともに未調整である。213・214は土師器の小皿で、213は口径7.2cm、214は口径8.8cmを測り、底部ヘラキリを施している。215は東播系の鉢、216は亀山焼の甕で体部外面に格子目のタタキ、内面にナデを施している。217は亀山焼の鉢である。218は土師器の鍋で外面に横方向のハケメを施している。219はカマドの一部である。220・221は玉縁口縁の白磁の碗、222・223は青磁の皿、222は同安窯系である。M23～M28は鉄釘である。（山磨）



第46図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

註１　「備中国府推定地」『岡山県埋蔵文化財報告』29 岡山県教育委員会　1999

第３章　総社遺跡

第１節　調査の概要

総社遺跡は総社市大字総社と大字金井戸に所在する。調査着手時は一般国道180号以北を総称して金井戸遺跡としていた。しかし、一般国道180号以南や今回の調査結果から旧河道を挟んで２つの微高地に区分される事が明らかとなった。旧河道より南側は一般国道180号以南を含めて井手天原遺跡に、北側を総社市の最新の詳細分布図による登録遺跡を踏襲して総社遺跡と名称変更を行った。また調査区は、大字を境として北端の７・14区を総社調査区に、それ以南を金井戸調査区と呼称することとした。

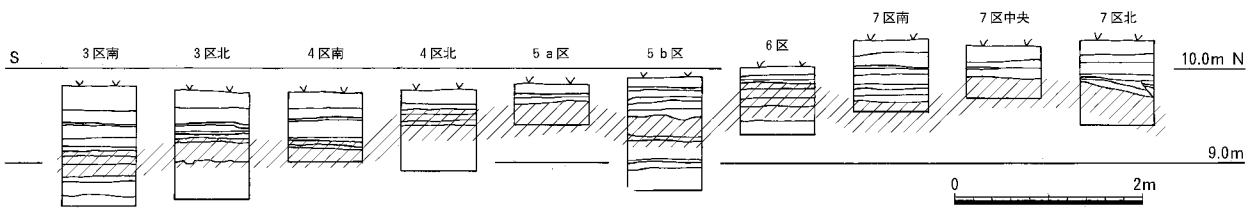
遺跡の現況は大半が水田として利用されており、井手天原遺跡と比較して集落と水田の景観がよく保存されている。総社遺跡の範囲は東西600m、南北500m程が想定されており、今回の調査区は遺跡の中央を南北400mにわたり縦断する調査区となっている。調査区の自然地形は、北半部が微高地部に相当し、南側に向かって緩やかに起伏をなしながら徐々に低下して、井手天原遺跡との境をなす旧河道に至る。

総社遺跡北端部7・14区付近の層序は、近現代耕作土直下に弥生時代から中世の遺構面である褐灰色砂質土が堆積している。基盤層の標高は10m前後を測る。５・12区の中央付近で微高地のたわみが認められマイナス80cm前後の低位部をなす。また５・12区の南端では礫層の基盤をなし、標高9.7m前後を測る。３区の中世以前の水田層確認付近では、島状の上面が9.3m程でそれより南側は旧河道に向かって下降する。調査区南端で8.7mほどである。

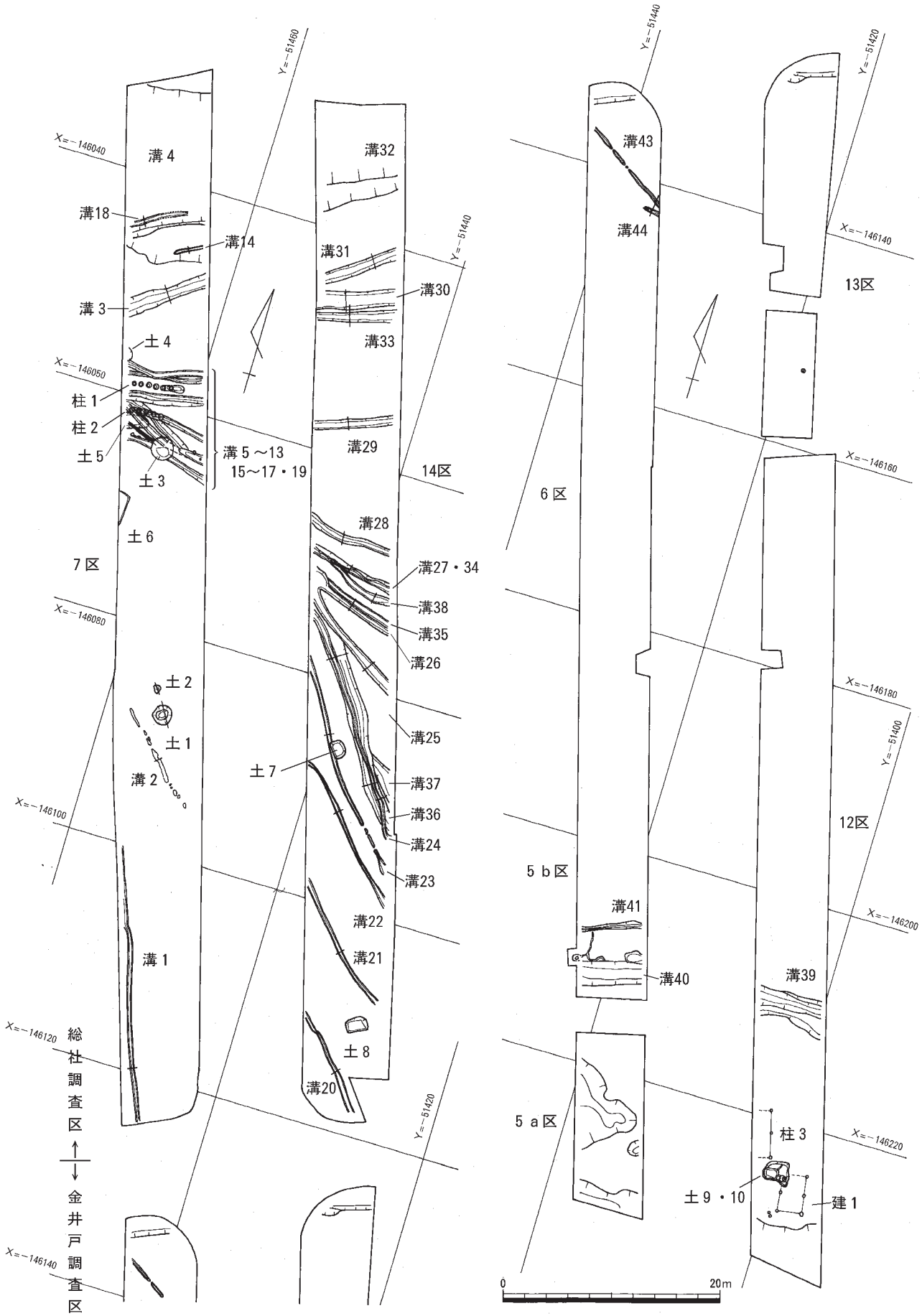
今回の調査区で最も古く位置付けられる遺構は、弥生時代中期後半のものである。調査区北端の７・14区の溝４・32の最下層が相当する。７・14区と交差する一般国道180号バイパスの調査からもこの大溝の続きが検出されおり、幹線水路の性格をなす遺構と考えられる。なお、北半部12区の基盤層付近から縄文時代晩期の土器片が出土しており、この遺跡の形成がこの時期まで遡る可能性がある。

北端部の７・14区では、北西から南東に流走する多数の溝が集中して掘削されていた。これらの溝群は幹線水路と考えられる溝４・32から枝分れした水路と推定され弥生時代後期から古墳時代後期を中心として、中世に下る水路も認められた。

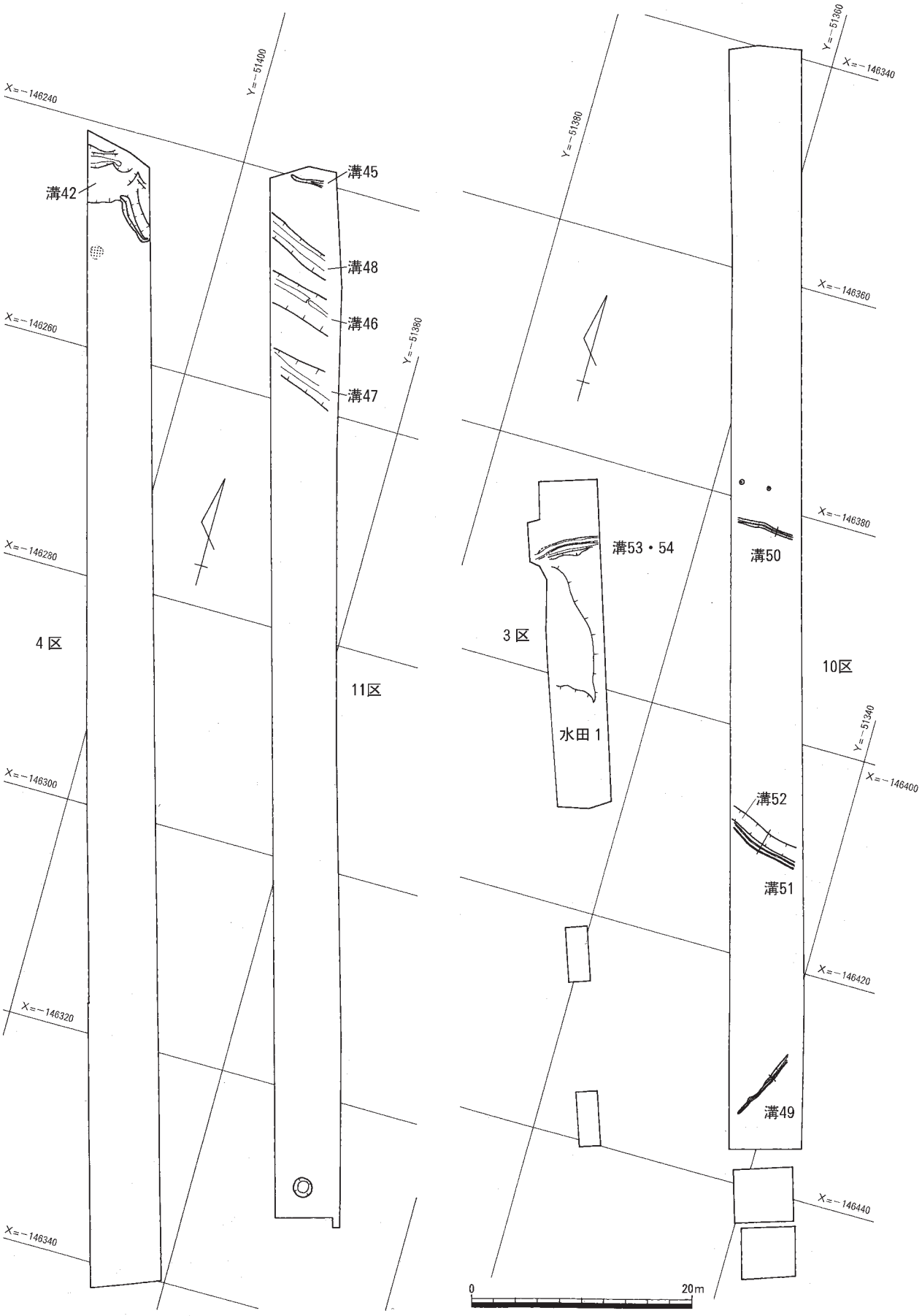
この他、調査区南端の３区では、中世の水田層の下部に不定形な島状の高まりと古代に遡る可能性のある複数の水田層を検出した。　（山磨）



第47図　基本層序図（1/80）



第48図　全体図①（1/500）



第49図　全体図②（1/500）

第２節　総社調査区の遺構・遺物

１　柱穴列

柱穴列１（第48・50図）

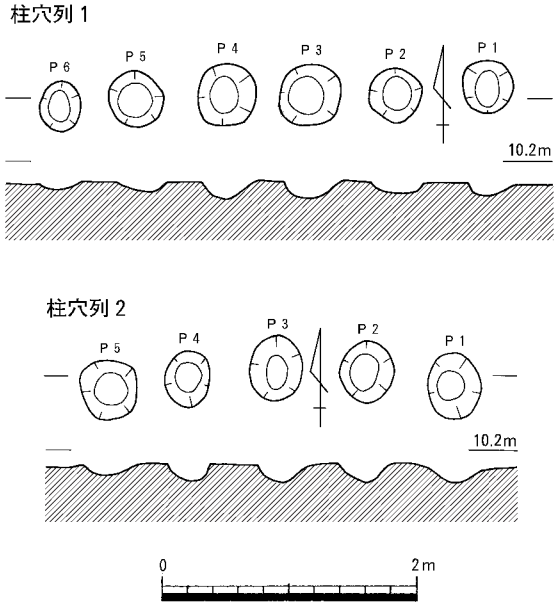
７区の中央部からやや北寄りの溝群中において検出された遺構である。溝９の底部に直径30～50cm・深さ10～20cm程の柱穴６本が20～30cmの間隔で東－西方向に並んでいる。この遺構は柱穴列２に対応している可能性もあるが、溝９の底部遺構とも考えられる。

Ｐ１～４の柱穴から弥生土器の細片が出土しており、弥生時代後期頃と考えられる。

柱穴列２（第48・50図）

７区溝群中、柱穴列１の南２ｍ程で検出された遺構で、溝７の底面に沿って直径30～50cm・深さ10～20cm程の柱穴５本が20cm前後の間隔で東－西方向に並んでいる。この５本の柱穴は、柱穴列１の柱穴に対応して並立しているものか、溝７の底部遺構か判然としない。

Ｐ１～３の柱穴埋土中から弥生土器の細片が出土している。



第50図　柱穴列１・２（1/60）

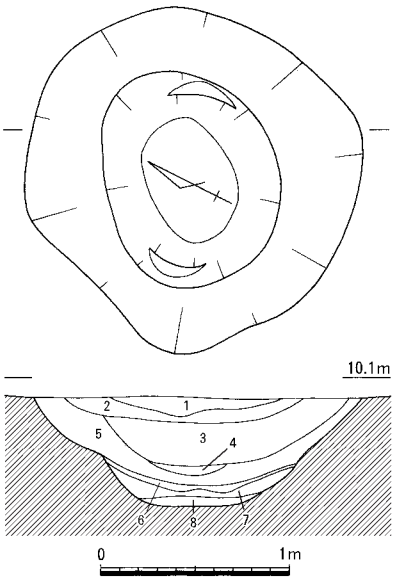
２　土　壙

土壙１（第48・51図）

７区の中央部からやや南寄りの地点において検出された遺構である。平面形はやや歪な不正円形を呈し、直径170cm前後を測る。断面は鉢状を呈し、海抜10.0ｍ程の検出面からの深さは60cmである。埋土は、黄灰色と黒褐色土が互層にレンズ状に堆積し、一番底には灰色粘土が厚さ５cm程認められる。遺物は弥生土器の細片が若干認められるのみで、遺構の時期・性格等は不明である。

土壙２（第48・52図）

７区の中央部からやや南寄り、土壙１の北西１ｍ程において検出された遺構である。平面形は直径60cm程の円形が少し崩れたような形状を呈している。断面は椀状を呈し、検出



第51図　土壙１（1/40）

面からの深さは30cm程を測る。

埋土は、上層に黒褐色砂質土が、下層には褐灰色粘質微砂がレンズ状に堆積しており、１の甕片が出土している。

土壙３（第48・52・54図）

７区の中央部からやや北寄り、溝５などの上面において検出された、不整円形を呈するごく浅い土壙である。検出面からの深さは、最大でも５cmを測るのみである。埋土中から須恵器・土師器の細片のほか鉄滓も出土している。時期は古墳時代後期頃と考えられる。

土壙４（第48・52・54図）

７区の北半中央部西端の調査区境で、溝13の北側において検出された遺構である。大半は調査区外で、規模など詳細は不明である。

土壙５（第48・52図）

７区の中央部からやや北寄り、土壙３から西1.5ｍ程の壁際において検出された遺構で、西側が用地外に及んでいる為、規模などは不明である。また、上面は溝12・７などに削平されている。

出土遺物としては、弥生時代中期の甕片が出土している。

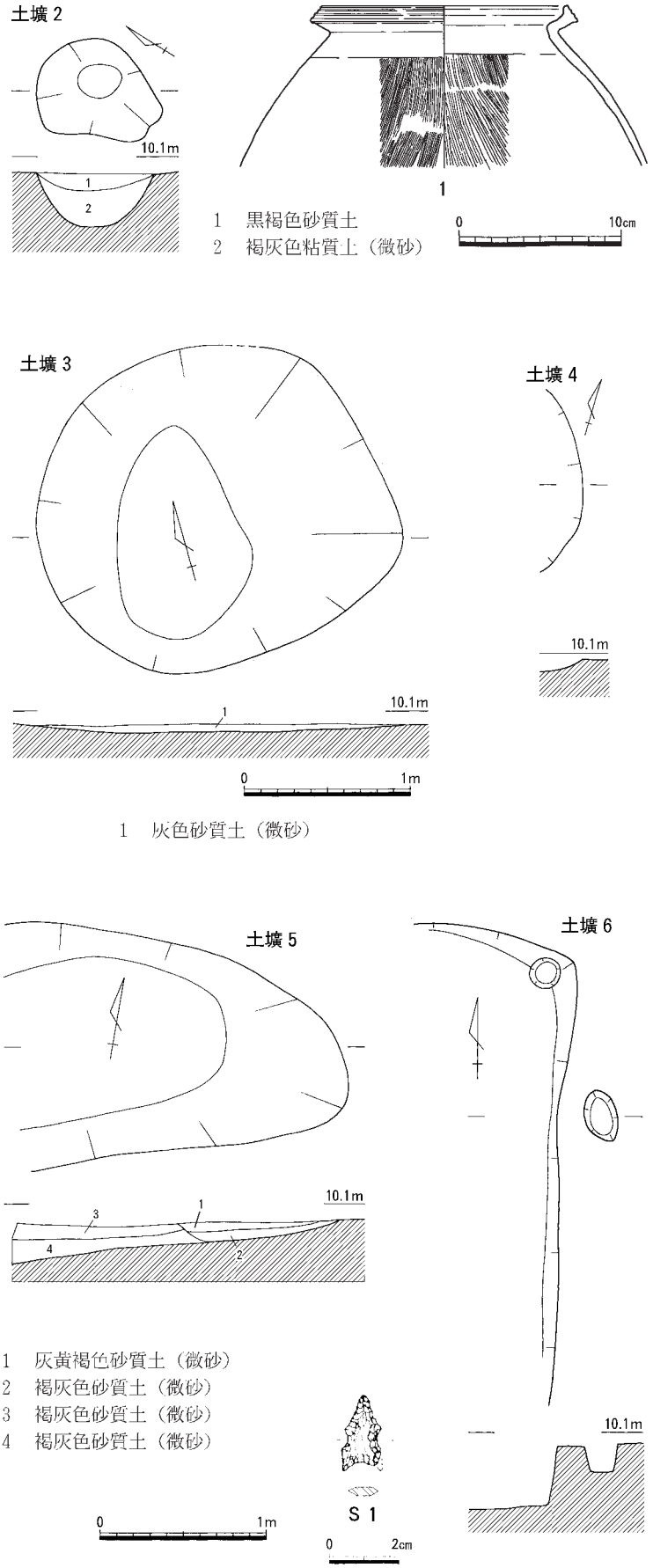
土壙６（第48・52図、図版18）

７区中央部の西側壁際で検出され、大半が用地外である。方形の遺構の一角とも考えられ、検出面から竪穴状に深さ40cm程を測る。

早島式土器が出土している。

土壙７（第48・53図）

14区の中央部からやや南寄り、溝23の上面において検出された遺構である。長方形状を呈し、深さ40cm程



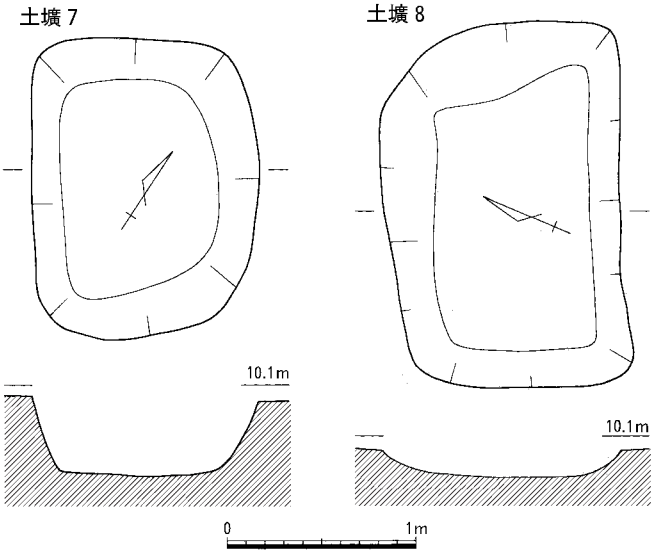
第52図　土壙２～６（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

を測る。埋土中から早島式土器が出土している。

土壙８（第48・53図）

14区の南端近くにおいて検出された遺構である。長辺200㎝・短辺130㎝程の長方形を呈し、検出面からの深さは15㎝程を測る。

埋土中に土師器の細片が認められるが、いわゆる早島式土器も出土しており、土壙７と同様の中世初頭頃の遺構と考えられる。



第53図　土壙７・８（1/40）

３　溝

溝１（第48・55図）

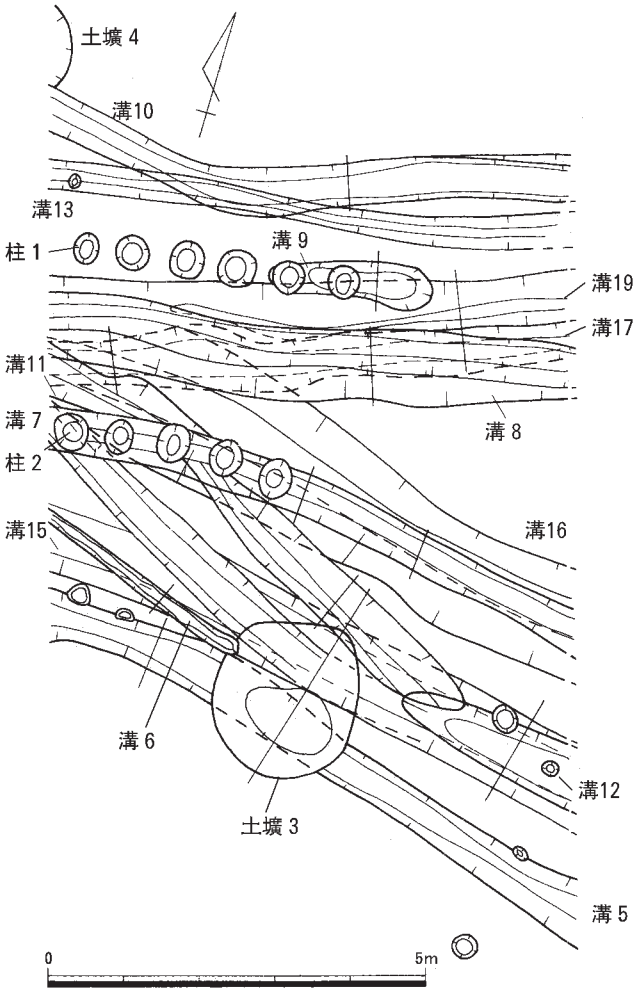
７区の南部西端において検出された遺構で、北側および南側は用地外におよんでいる。北北西－南南東方向に延びる溝で、幅15㎝・深さ６㎝程を測る。埋土中において須恵器の甕片や土師器の細片が認められることから、時期は古墳時代後半と考えられる。

溝２（第48・55図）

７区の中央部からやや南寄りのにおいて断続的に検出された遺構で、北西－南東方向に流路をもつ溝と考えられる。上面が後世の削平を受けており規模などは判然としない。灰色微砂の埋土中から土師器の細片が出土している。時期は古墳時代初頭頃と考えられる。

溝３（第48・55図）

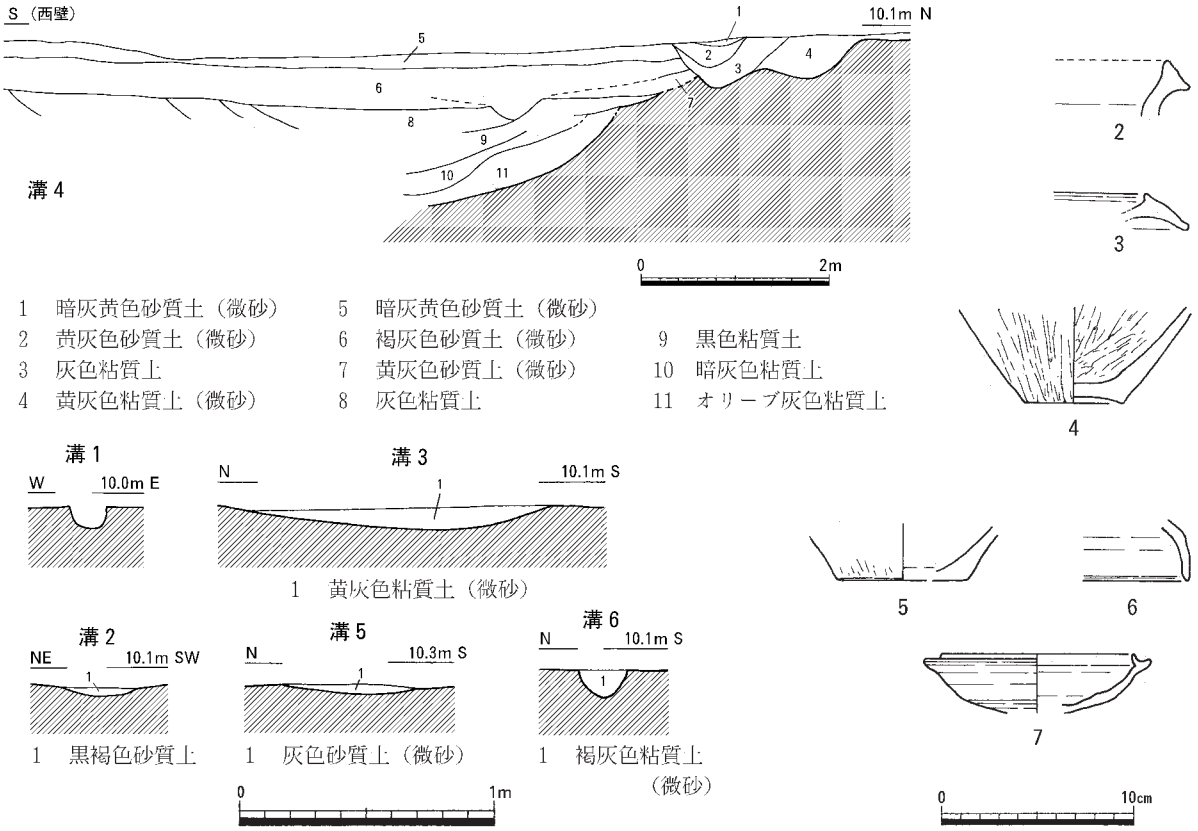
７区北部の大溝(溝４)と溝群との間で検出された遺構で、西南西－東北東方向に流路をもち、検出面での幅は150㎝前後を測るものの、深さは10㎝足らずの浅い溝である。埋土は黄灰色粘質微砂である。５の弥生土器と伴に須恵器や土師器の細片が出土し、溝の埋没は古墳時代後半頃と考えられる。



第54図　溝５～13・15～17・19配置図（1/100）

溝４（第48・55図、図版12）

７区の北端において検出された、東－西方向に流走する溝状の遺構である。北端部は調査区外にまで及ぶため、正確な幅は明らかでないが、15m以上を測る。深さも調査区が狭小であるため、検出面



第55図　溝１～６断面（1/80・1/30）・出土遺物（1/4）

から２ｍ以上を測ることを確認できたのみである。埋土は第１層から第７層までの上層に黄灰色や灰黄色の微砂などが、第８層以下の下層に暗灰色や黒色の粘質土が堆積している。遺物は**２～４**などの弥生土器が出土している。下層にはいずれも細片で時期は不明であるが、弥生時代中期以前の土器片が認められた。上層の埋没は弥生時代後期であるが、中期以前の水路の可能性が考えられる。

溝５（第48・54・55図）

７区の中央部からやや北寄りにおいて何条もの溝が集中して検出された。そのうち最も南側で検出された、ほぼ東－西方向に流走している溝である。海抜10.2m程の検出面で幅70cm・深さ５cm程を測る。灰色微砂の埋土中から須恵器の杯身**７**が出土している。

溝６（第48・54・55図）

７区の中央部からやや北寄り西端部において検出された溝である。北西－南東方向に流走しているとみられるが、上面を溝５・土壙３などに削平され、西半部が検出できたのみである。幅は20cm程と細いものの、深さ10cmを測る。土師器の細片が出土しており、古墳時代初頭頃と考えられる。

溝７（第48・54・56図）

７区の溝群ほぼ中央で東－西方向に流走している溝である。海抜10.0m程の検出面で幅60cm・深さ４～10cmを測る。溝の底面には柱穴列２が並んで検出されている。埋土は暗灰黄色微砂が堆積し、弥生土器の細片が出土している。弥生時代後期頃と考えられる。

溝８（第48・54・56図）

７区の溝群の北半部で、南西－北東方向に流走している溝である。海抜10.0m程の検出面で幅60cm・深さ10cmを測る。埋土は灰色粘質微砂で、弥生土器の細片が出土している。

溝９（第48・54・56図）

７区の溝群の北半部で、南西－北東方向に流走している溝である。上面が削平され、一部を検出したのみで詳細は不明である。溝の底面に柱穴列１が並んで検出されている。埋土中に壺８など弥生土器片があり、弥生時代後期頃の溝と考えられる。

溝10（第48・54・56図）

７区の溝群北端部で、西－北東へ途中屈曲して流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅50～60cm・深さ10cm前後を測り、暗灰黄色砂質土が堆積している。埋土から弥生時代の甕９などが出土している。時期は、弥生時代後期頃である。

溝11（第48・54・56図）

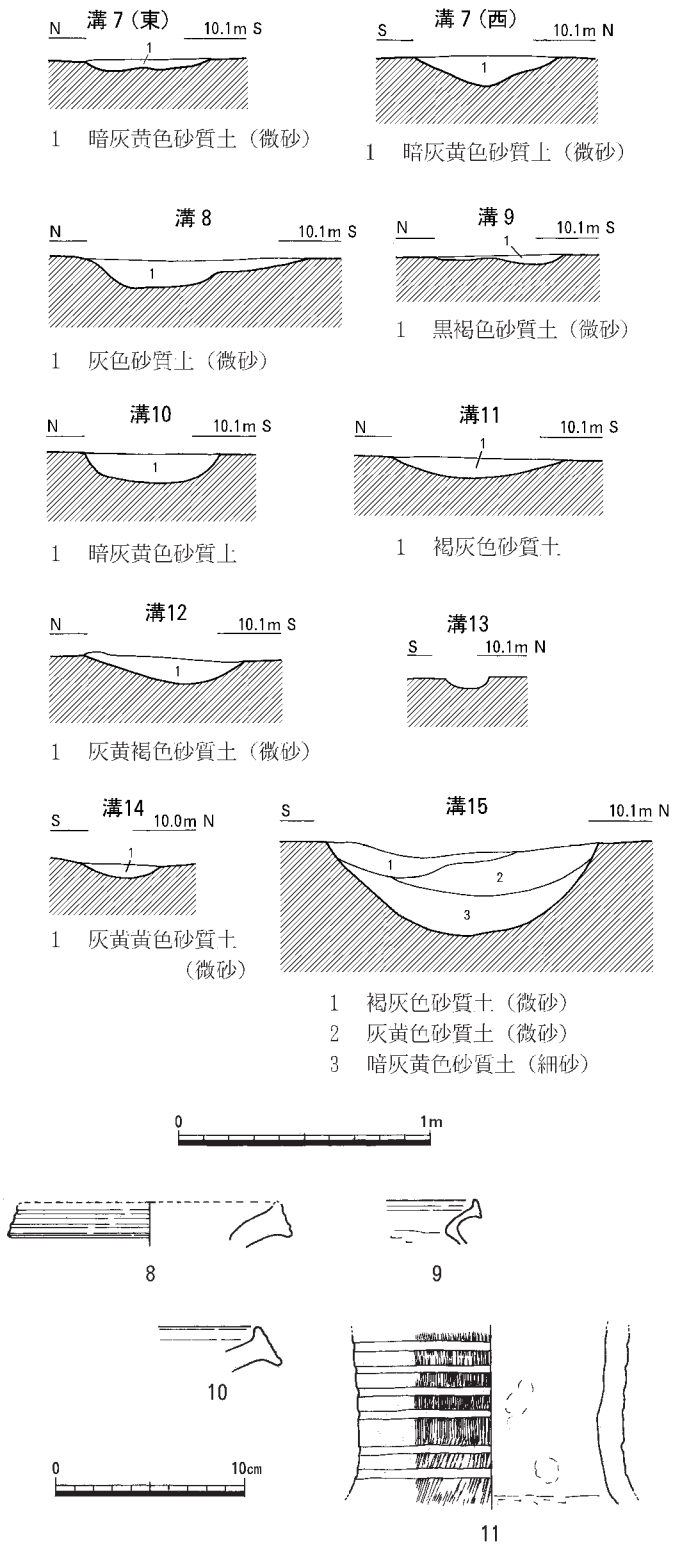
７区の溝群の南半部で、南東－北西方向に流れる溝で、南東部で溝12に削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅70cm・深さ10cm程を測る。埋土は褐灰色砂質土で、弥生土器片のほか動物の歯が出土している。時期は、弥生時代後期頃である。

溝12（第48・54・56図）

７区の溝群の南半部で、南東－北西方向に流れる溝であるが、西側は削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅65cm・深さ10cm前後を測る。埋土は灰黄褐色微砂で、甕10などの弥生土器片が出土している。時期は、弥生時代後期頃である。

溝13（第48・54・56図）

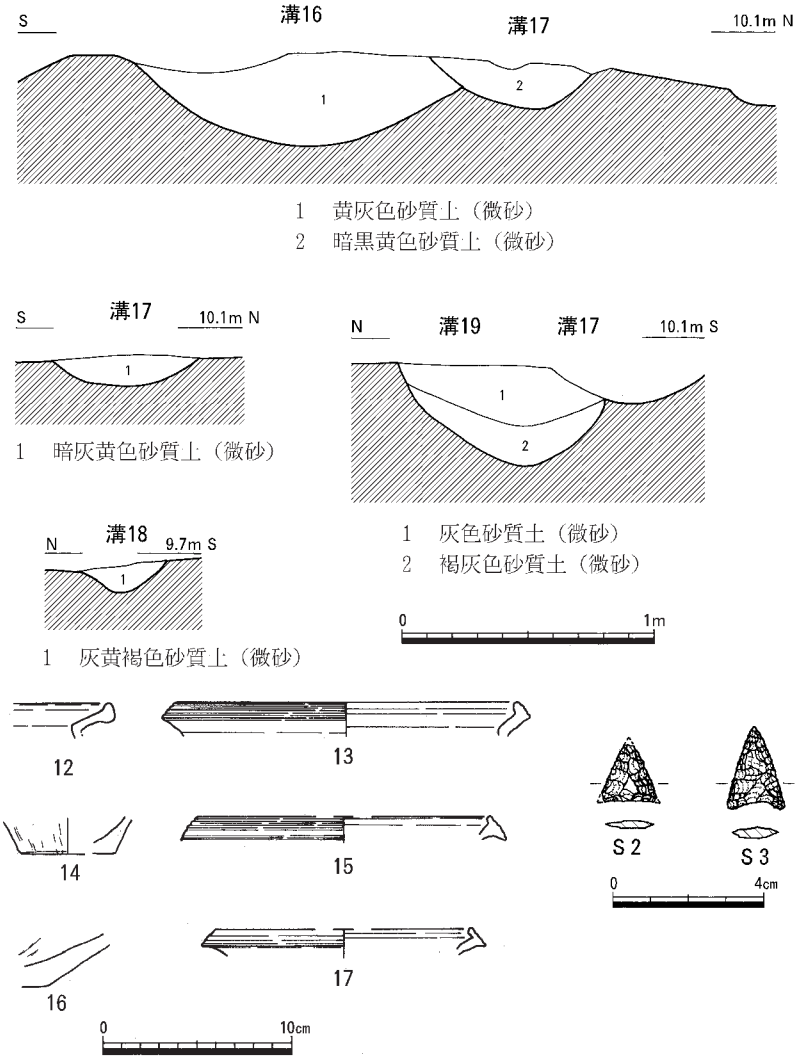
７区の溝群の北半部で、東－西方向に流走している溝で、一部溝10に削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅50cm・深さ５cm程を測る。弥生土器片が出土している。時期は、弥生時代後期頃である。



第56図　溝７～15断面（1/30）・出土遺物（1/4）

溝14（第48・56図）

７区の北端において検出された溝４の南側肩口で、全長2.5m程検出された溝状の遺構である。南西－北東方向に流路をもち、9.9m程の検出面で幅30cm・深さ５cm程を測る。埋土は暗灰黄色微砂が一層である。土器片などの遺物は出土していないが、検出状況から弥生時代後期頃と考えられる。



第57図　溝16～19断面（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

溝15（第48・54・56図）

７区の溝群の南半部で、北西－南東方向に流走している溝で、上面は溝11・12に削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅110cm・深さ40cm程を測る。壺11などの弥生土器が出土している。

弥生時代後期頃である。

溝16（第48・54・57図、図版18）

７区の溝群ほぼ中央部に検出された遺構で、北西－南東方向に流走する溝である。海抜10.0ｍ程の検出面で幅1.5ｍ・深さ40cm前後を測り、黄灰色微砂が埋積している。埋土中から弥生土器12・13のほかサヌカイト製の石鏃Ｓ2・Ｓ3が出土している。

溝17（第48・54・57図）

７区の溝群の北半部で、南西－北東方向に流走している溝である。上面は溝８などに削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅60cm・深さ20cm程を測り、暗灰黄色微砂が埋積している。埋土中から弥生時代の甕14・15が出土している。時期は、弥生時代後期頃である。

溝18（第48・57図）

７区の北端に検出された溝４の南側肩口で検出された溝である。海抜9.7m程の検出面で幅35cm・深さ10cm程を測る。灰黄褐色微砂が埋積している。時期は、弥生時代後期頃である。

溝19（第48・54・57図）

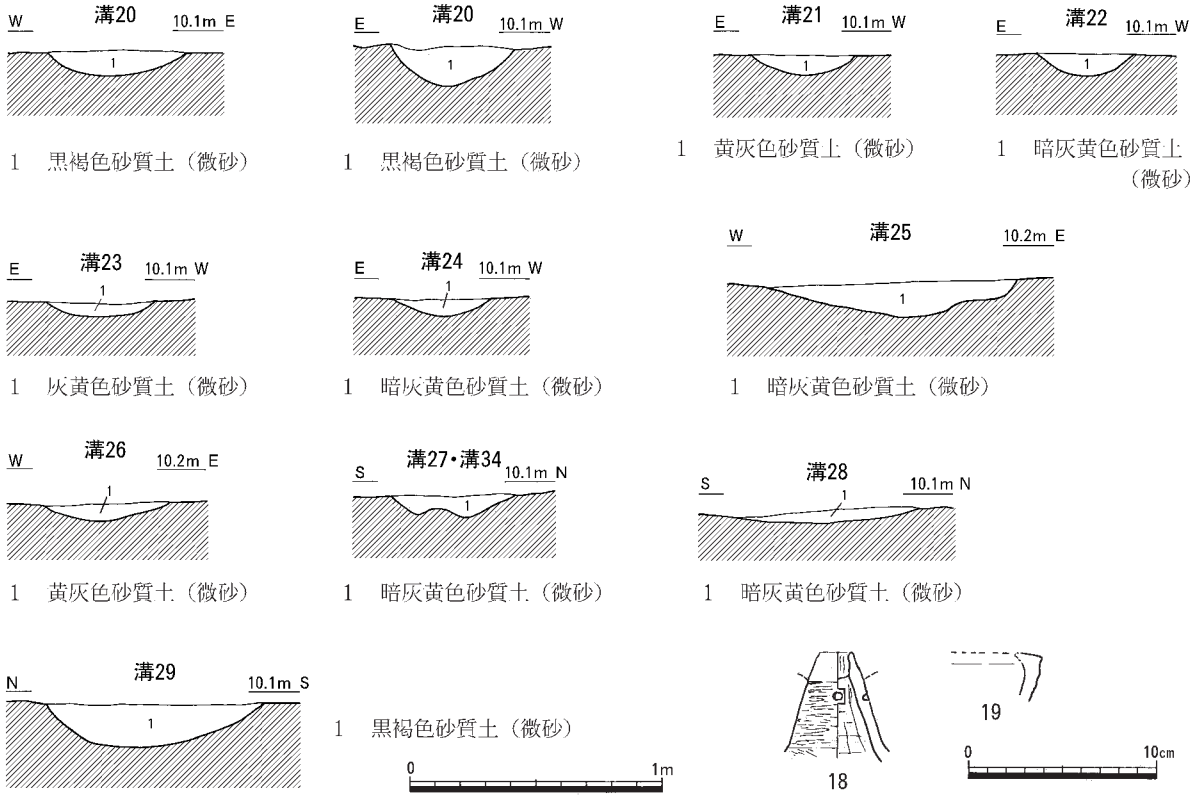
７区の溝17北側を流走している溝で、南側は溝17に削平されている。海抜10.0m程の検出面で幅80cm・深さ40cm程を測る。埋土中から甕16・17時期は、弥生時代中期頃である。

溝20（第48・58図）

14区の南西端で、北北西－南南東方向に流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅50cm・深さ10～15cmを測る。黒褐色微砂の埋土中から土師器の高杯片18が出土している他、いわゆる早島式土器や青磁の細片が出土することから、時期は中世以降と考えられる。

溝21（第48・58図）

14区の南部で、溝20の５ｍ程北側を流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅50cm・深さ10cm



第58図　溝20～29・34断面（1/30）・出土遺物（1/4）

を測る。黄灰色微砂の埋土中に土師器の細片が認められ、古墳時代前半頃の時代が考えられる。

溝22（第48・58図、図版13）

14区の南部で、北北西－南南東方向に流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅40cm・深さ10cmを測る。暗灰黄色微砂の埋土中に弥生土器の細片が出土している。

溝23（第48・58図、図版13）

14区の中央やや南寄りで検出された、北北西－南南東方向に流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅40cm・深さ５cm程を測る。灰黄色微砂の埋土中に須恵器や土師器の細片が認められ、古墳時代後半頃の時期が考えられる。７区の溝５と同一遺構の可能性がある。

溝24（第48・58図）

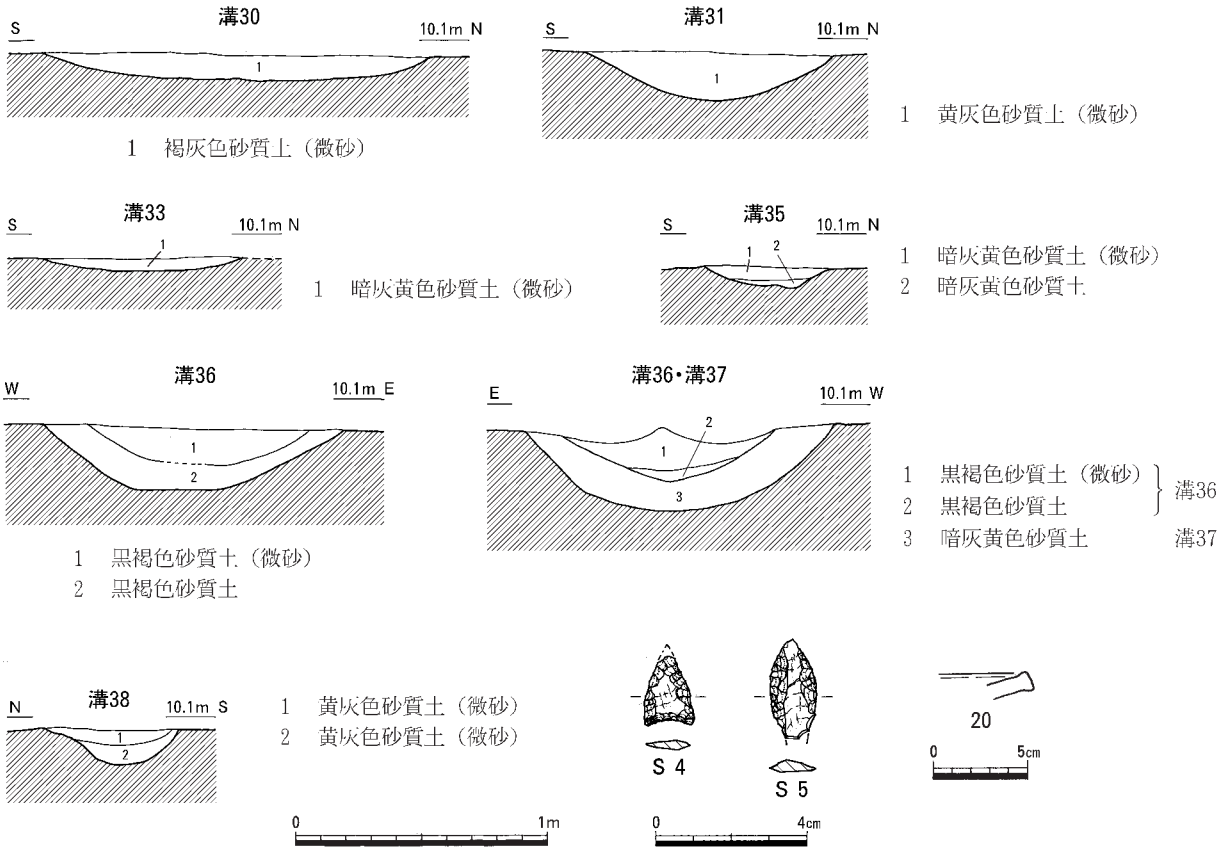
14区の中央やや南寄りで、溝23の２m程北側、溝37の上面を流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅40cm・深さ７cm程を測る。埋土は、暗灰黄色微砂で土師器などの土器片が出土している。**19**は埋土中に混入した弥生時代中期の高杯である。７区の溝６と同一遺構の可能性がある。

溝25（第48・58図）

14区の中央部を、北西－南東方向に流走する溝である。海抜10.05m程の検出面で幅100cm・深さ15cm程を測る。暗灰黄色微砂の埋土中から、土師器などの土器片が出土している。時期は出土遺物などから古墳時代初頭頃と考えられる。

溝26（第48・58図）

14区の中央部を、西北西－東南東方向に流走する溝である。海抜10.1m程の検出面で幅50cm・深さ７cm程を測る。埋土は、黄灰色微砂で土師器片などが認められた。古墳時代初頭頃と考えられる。



第59図　溝30・31・33・35～38断面（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）

溝27（第48・58図）

14区の中央部、溝26の1.5m程北側を流走する溝で、一部溝34と重なって検出された。海抜10.05m程の検出面から深さ７cm程を測る。暗灰黄色微砂の埋土中から土師器や弥生土器の細片が出土している。時期は、古墳時代初頭頃と考えられる。

溝28（第48・58図）

14区の中央部において検出された、東－西方向に少し蛇行して流走する溝である。海抜10.05m程の検出面から幅70～80cm・深さ７cm程を測る。暗灰黄色微砂の埋土中から土師器などの土器片出土している。時期は、古墳時代初頭頃と考えられる。

溝29（第48・58図）

14区の中央やや北寄りで検出された、東－西方向に流走する溝である。海抜10.05m程の検出面で幅80cm・深さ18cm程を測る。黒褐色微砂の埋土中から若干の土器片が出土しているがいずれも細片である。時期は、検出状況などから弥生時代後期から古墳時代初頭頃と考えられる。

溝30（第48・59図）

14区の北部において検出された、東－西方向に流走する浅い溝である。海抜10.05m程の検出面で幅200cm・深さ10cm程を測る。褐灰色微砂の埋土中から中世土器が出土している。

溝31（第48・59図）

14区の北部において検出された、南西－北東方向に流走する溝である。海抜10.05m程の検出面で幅100cm・深さ20cm程を測る。埋土は黄灰色微砂で、遺物は認められていない。

溝32（第48図）

14区の北端において検出された、西南西－東北東方向に流走する溝状の遺構である。北側の肩は調査区外で幅など規模は不明である。埋土中から弥生時代中期・後期の土器が出土している。検出状況から７区で検出された、溝４と同一の遺構である。

溝33（第48・59図）

14区の北部で溝30のすぐ南側に検出された、東－西方向に流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅75cm・深さ５cm程を測る。埋土中から弥生土器が出土している。

溝34（第48・58図）

14区の中央部で検出され、西端部は溝27と重なって流走する溝で、海抜10.05m程の検出面から深さ10cm程を測る。暗灰黄色微砂の埋土中から弥生時代後期の土器片が出土している。

溝35（第48・59図）

14区の中央部で検出され、溝26の北側を流走する溝で、海抜10.05m程の検出面で幅50cm・深さ５cm程を測る。暗灰黄色微砂の埋土中から弥生土器の口縁部**20**が出土している。

溝36（第48・59図、図版13）

14区の中央やや南寄りで検出された、北北西－南南東方向に流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅85cm・深さ15cm程を測る。埋土中から弥生時代後期の土器片が出土している。

溝37（第48・59図、図版18）

14区の中央やや南寄り、溝36の下側を流走する溝である。海抜10.0m程の検出面で幅120cm・深さ25cm程を測る。埋土中から弥生時代の石鏃２点**Ｓ４・Ｓ５**が出土している。

溝38（第48・59図）

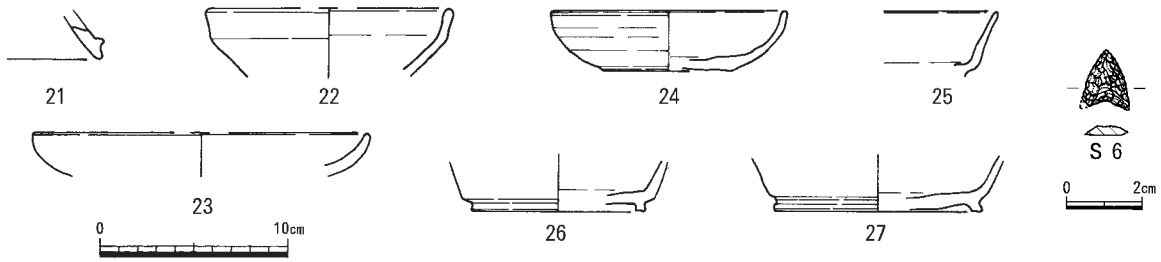
14区の中央部で検出された溝27・34の南側を、少し南に張り出して東―西に流走している溝である。10.05mの検出面で幅50cm・深さ15cm程を測る。出土遺物はなく時期は不明である。

４　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第60図、図版18）

検出された遺構には伴っていないものの、包含層中などから若干の土器などが出土している。**21・22**は、弥生時代後期の高杯片である。**22**は、７区から出土した口縁部、**21**は、14区で出土した脚部である。**24**は、14区から出土した古代の須恵器の杯身、**23**は、７区から出土した古代の土師皿、**25・26・27**はいずれも高台の付いた古代の須恵器の杯身で、**25**は14区から、**26**は７区から、**27**は14区から出土している。

Ｓ６は、６区から出土したサヌカイト製の石鏃である。　（内藤）



第60図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

第３節　金井戸調査区の遺構・遺物

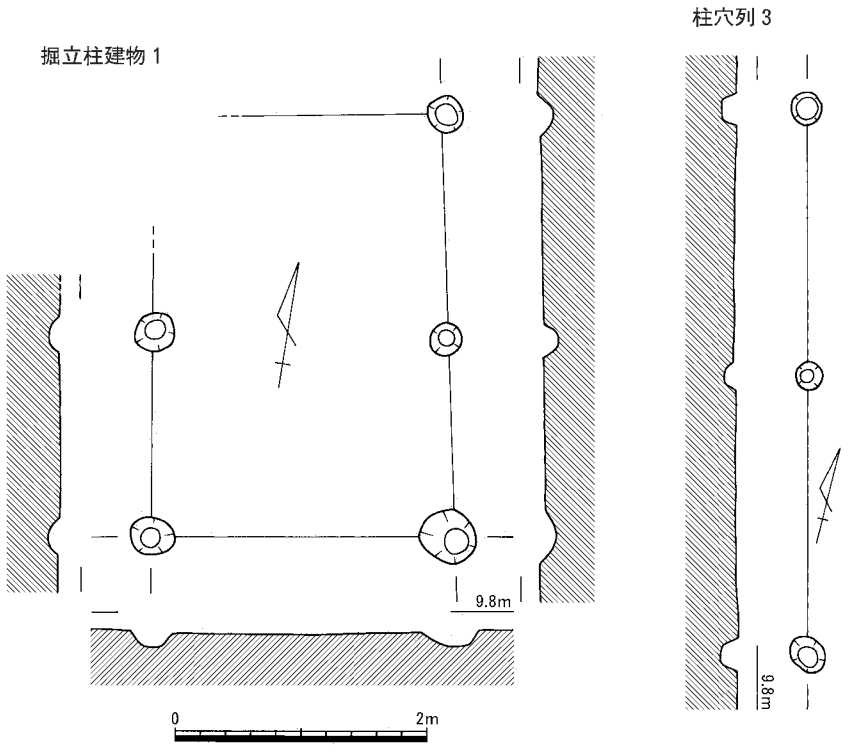
１　掘立柱建物・柱穴列

掘立柱建物１（第48・61図、図版14）

12区の南端に所在し、礫層を基盤とする範囲の南端から２ｍ足らず北に位置して、北西隅の柱穴が土壙９・10の埋土と重複して不明である。２×１間で、東西方向の梁間240cm、南北方向の桁行345cmを測り、柱間は165～180cmである。床面積は8.28㎡程度になる。柱穴は円形で、径25～45cm、深さは10cm前後が残るのみであるが、そろっている。遺物は土師質の鍋小片等が若干出土しており、時期は中世に求められる。

柱穴列３（第48・61図、図版14）

12区の南半に所在し、掘立柱建物１との距離２ｍ足らずで北側に位置する。



第61図　掘立柱建物１・柱穴列３（1/60）

柱間220cmと225cmで３本の柱穴が並んでいる。柱穴は円形で、径20～30cmを測り、深さは10～15cmである。

柱穴列の西側は２ｍ足らずで調査範囲外となるため、こちら側に対の柱穴が所在して掘立柱建物となる可能性は残る。

出土遺物がないため時期を特定できないが、掘立柱建物１とは主軸方向を若干異にしており、柱間もこちらがやや広くなっている。

２　土　壙

土壙９（第48・62図、図版14・18）

12区の南半に所在し、掘立柱建物１および土壙10と重複する。

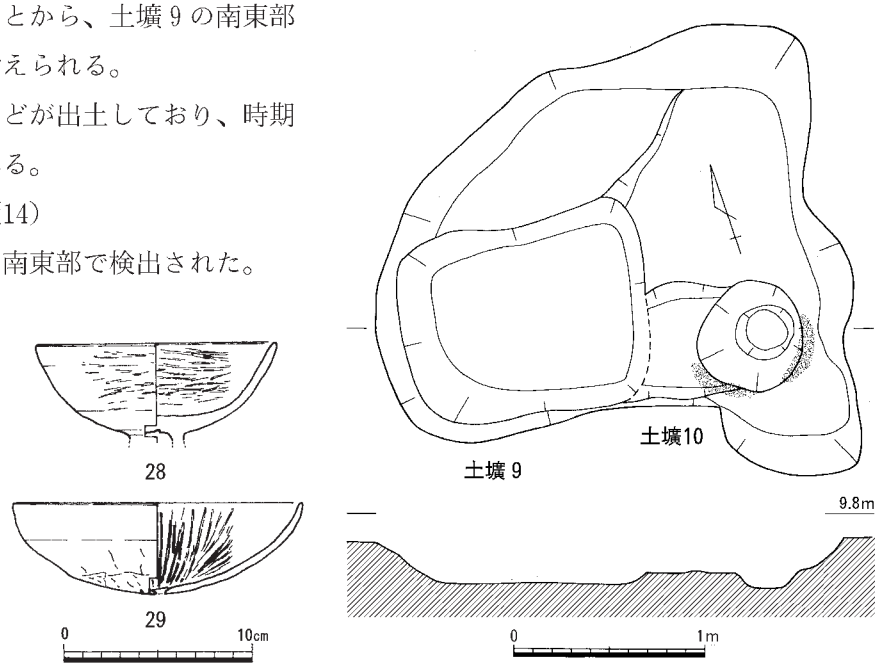
平面形は不整形で、東西長・南北長とも250cm程度を測り、西半で120×105cmの長方形の範囲がさらに一段窪んでおり、深さは20cmを超える。南東部の土壙10縁辺部にみられる被熱痕跡は、土壙

10に伴わないと思われることから、土壙９の南東部で高温作業が行われたと考えられる。

土師器の高杯28、鉢29などが出土しており、時期は古墳時代前半に比定される。

土壙10（第48・62図、図版14）

12区に所在し、土壙９の南東部で検出された。67×55cmの楕円形の中央部が径30cm、深さ10cmに掘られており、検出時には確認できなかったが、土壙９より新しいと考えられ、掘立柱建物１の北東の柱穴になる可能性を残している。



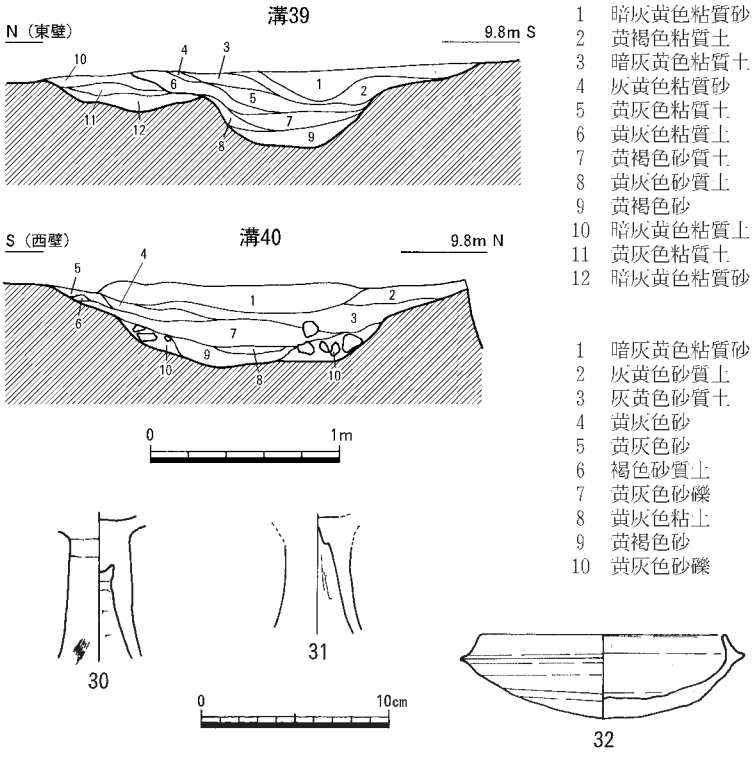
第62図　土壙９・10（1/40）・出土遺物（1/4）

３　溝

溝39・40（第48・63図、図版18）

５ｂ区の南端と12区の南寄りで検出された東西方向に流路を置く溝である。いずれの調査区でもこの位置から南は礫層を基盤とする微高地で、これが北へ向かって下がる谷地形の肩口に位置する。２条の溝は、12区においては別の流路を示すが、５ｂ区では１条しか確認できない。幅は、検出面で230cmを測り、深さは40cm程度が残る。

遺物は、土師器の高杯30・31があるが、須恵器の杯身32により、６世紀後半に位置づけられる。

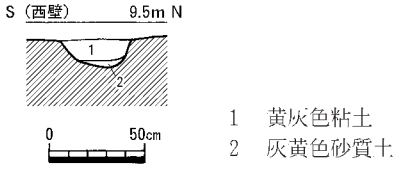


第63図　溝39・40断面（1/40）・出土遺物（1/4）

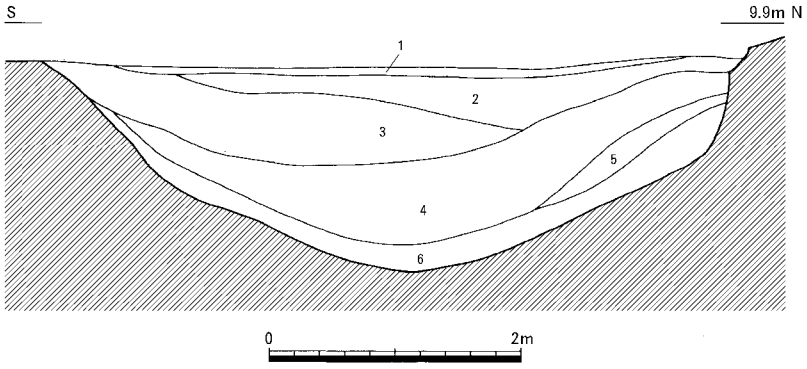
溝41（第48・64図）

５ｂ区の南寄りに位置し、溝38・39の北３ｍで、北向きの斜面において検出されたが、12区では確認できていない。

幅30～40cm、深さ20cm程度の規模で斜面に平行しており、遺物は出土していないが、層序関係からは古墳時代以前の遺構と考えられる。（光永）



第64図　溝41断面（1/40）

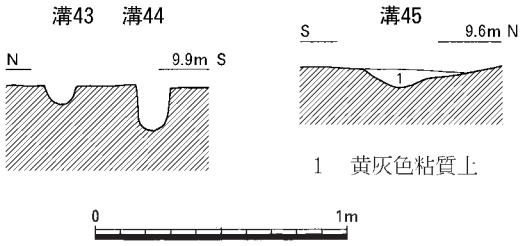


1　灰色粘質土
2　暗黄灰色砂
3　黒褐色砂
4　青灰色砂
5　青灰色砂
6　青灰色砂

第65図　溝42断面（1/60）

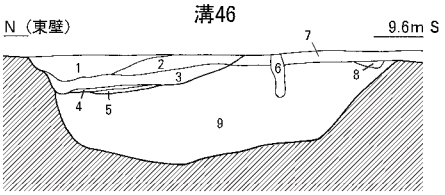
溝42（第49・65図）

４区の北端部において検出された、東－西方向に流走する溝である。西端部では海抜9.6ｍ程の検出面で幅550cm・深さ160cm程を測る。なお、東部では北西－南東方向に流走する溝が分かれている。上層では中世の土器が出土しているものの下層からは須恵器や土師器が出土している。古墳時代頃の溝を削平している、中世溝と考えられる。

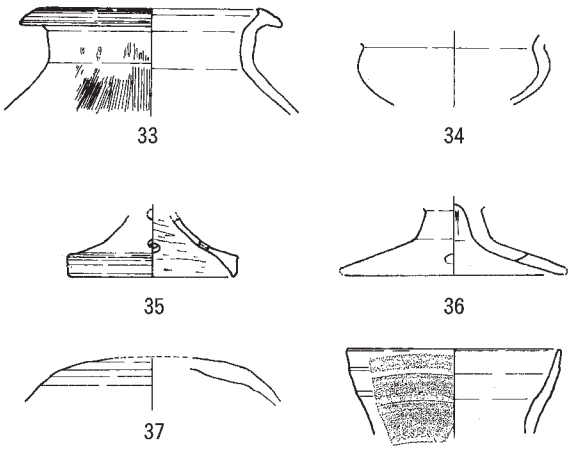


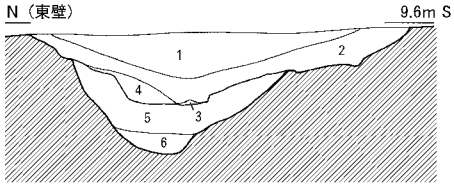
1　黄灰色粘質土

第66図　溝43～45断面（1/30）

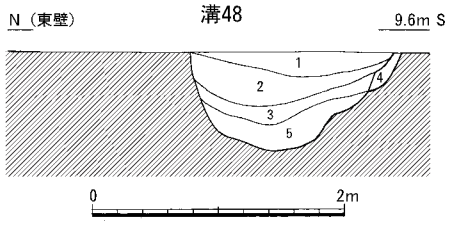


1　暗灰黄色砂質土（微砂）
2　暗灰黄色砂（細砂）
3　黒褐色砂質土（細砂）
4　黄灰色砂（細砂）
5　黒褐色砂質土（細砂）
6　暗灰色黄色砂質土（微砂）
7　暗灰色黄色砂質土（微砂）
8　黒褐色砂質土（微砂）
9　灰黄褐色砂質土（微砂）





1　オリーブ褐色砂質土（微砂）
2　黄灰色粘質土
3　灰色砂（小石を含む）
4　黄灰色砂質土（微砂）
5　黒褐色砂質土（微砂）
6　黄灰色砂質土（微砂）



1　暗灰黄色砂質土（微砂）
2　暗灰黄色砂質土（微砂）
3　灰黄褐色砂質土（微砂）
4　暗褐色砂質土（微砂）
5　黄灰色粘質土

第67図　溝46～48断面（1/60）・出土遺物（1/4）

溝43・44（第48・66図）

６区の北部において断続的に検出された溝状の遺構である。溝42は北西－南東方向に、溝44は東－西方向に流走している。海抜9.8m程の検出面で幅20cm前後を測る。深さは、溝43が15cm・溝44は30cm程である。時期は、検出状況などから中世頃と考えられる。

溝45（第49・66図）

11区の北端部において検出された、東－西方向に流走する溝状の遺構である。海抜9.8m程の検出面で幅80cm・深さ15cm程を測る。埋土は黄灰色粘質土で、中世前半の土器が出土している。

溝46（第49・67図）

11区の北部において検出された、北西－南東方向に流走する溝である。海抜9.4m程の検出面で幅幅310cm・深さ90cm程を測る。埋土中から須恵器と伴にいわゆる早島式土器が出土している。時期は、平安時代末から鎌倉時代初め頃と考えられる。

溝47（第49・67図）

11区の北部、溝45から1.5m程南で検出された、東－西方向に流走する溝である。海抜9.55m程の検出面で幅335cm・深さ105cm程を測る。上層の１・２層からは中世の土器が、下層の３層以下からは弥生時代後期の壺などのほか、須恵器の杯・高杯など古墳時代の土器が出土している。この遺構は中世前半期の溝と古墳時代後半期の溝が２本重なって検出されている可能性がある。

溝48（第49・67図、図版18）

11区の北部、溝46から３m程南で検出された、東－西方向に流走する溝である。海抜9.4m程の検出面で幅190cm・深さ90cm程を測る。

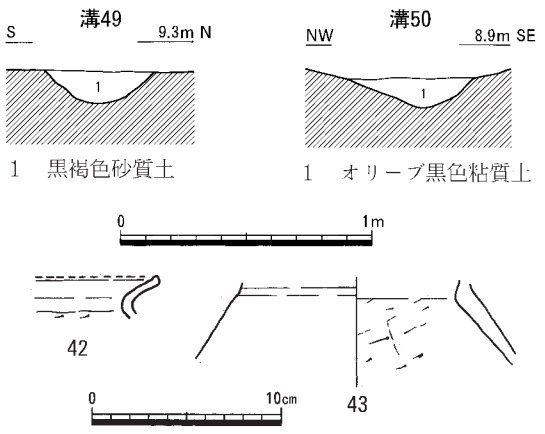
埋土からは、弥生土器とともに土師器の甕形土器や高杯などが出土している。時期は、古墳時代初頭頃と考えられる。

溝49（第49・68図）

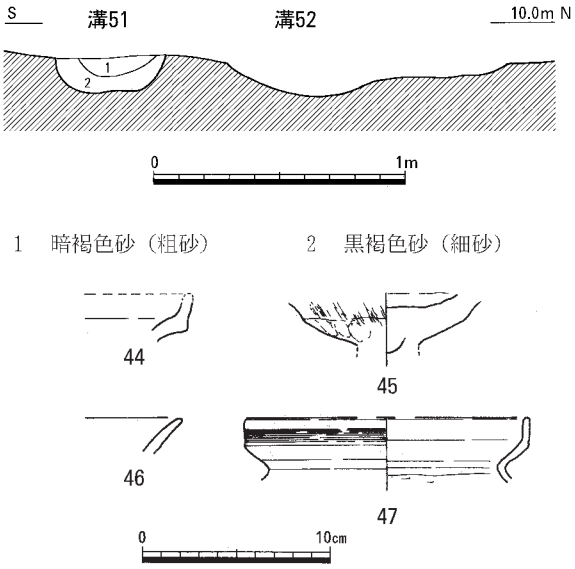
10区の中央部において検出された、東－西方向に流走する溝である。海抜9.2m程の検出面で幅35cm・深さ10cm程を測る。埋土は、黒褐色砂質土で土師器の細片が出土している。時期は、中世頃と考えられる。

溝50（第49・68図）

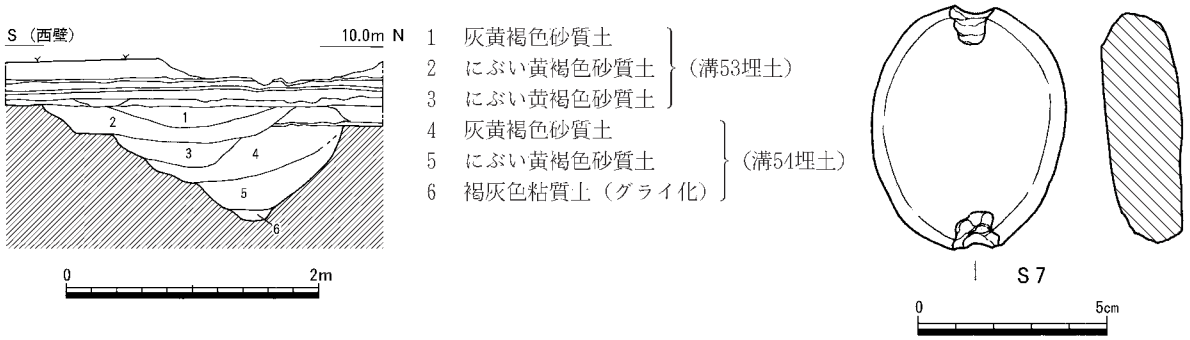
10区の南部において検出された、南西－北東方向に流走する溝である。海抜8.85m程の検出面で幅45cm・深さ10cm程を測る。オリーブ黒色粘質土の埋土中から土師器の甕などが出土している。時期は、古墳時代初頭である。



第68図　溝49・50断面（1/30）・出土遺物（1/4）



第69図　溝51・52断面（1/30）・出土遺物（1/4）



第70図　溝53・54断面（1/60）・出土遺物（1/2）

溝51・52（第49・69図）

10区の中央やや南寄りで検出された、北西－東に屈曲する溝で、溝52が北側を溝51が南側を並走している。海抜9.85m程の検出面で幅は溝51が45cmを、溝52は110cmを測り、深さはいずれも15cm程を測る。

遺物は、溝51から**44・45**が、溝52から**46・47**など弥生時代末の土器が出土している。　（内藤）

溝53・54（第49・70図、図版15）

３区中央付近に検出した溝で上下２層に重複し、南西から北東方向に緩く湾曲して並走する。下層溝54は検出長6.0m、最大幅140cm、深さ80cmを測り、逆三角形の断面をなす。上層溝53は検出長6.5m、最大幅200cm、深さ50cmを測り、中央付近が一段深い断面をなす。

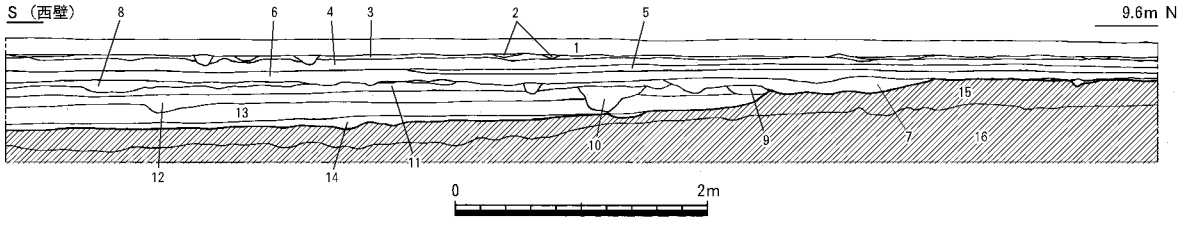
遺物は、西溝より土師器の細片と溝53より石錘**S 7**が出土している。下層溝54は埋土、出土遺物、層序等から古墳時代初頭に遡る可能性がある。

4　水田・条里

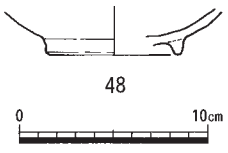
水田１（第49・71図）

総社遺跡の地形は、北端の７・14区付近が微高地部にあたり、この付近より南側の井手天原遺跡との境をなす旧河道に向かって徐々に下降し、南端の３・10区付近は低位部に相当する。低位部である３区の中央付近から南端で中世以前の水田層と島状の高まりを確認した。

３区の水田層は中世以降から近現代までは調査区全体に認められる。溝53・54付近の南側では、中世水田層下に南北11.0m、東西4.0mの不定形な島状高まりが認められ、その東側と南側に畦は未確



1　黄灰色土（現代耕作土）
2　暗灰黄色土
3　明黄褐色砂質土（現代床土）
4　灰黄色土（中世）
5　にぶい黄色土（中世）
6　にぶい黄色土（中世）
7　暗灰黄色土（中世）
8　暗灰黄色土（古代～）
9　にぶい黄橙色砂質土（古代～）
10　灰黄褐色砂質土（古代～）
11　黄褐色土（古代～）
12　灰黄褐色土（古代～）
13　にぶい黄褐色土（古代～）
14　明黄褐色土（古代～）
15　にぶい褐色土（地山）
16　黄褐色土（地山）



第71図　水田１断面（1/60）・出土遺物（1/4）

認ながら中世以前の水田層を検出した。第71図は調査区西壁の土層断面で、第９層以下に４面以上の古代の水田層を確認した。第15層のにぶい褐色をなす基盤層は南に向かって緩やかに下降している。

出土土器は細片が多いが、48は第６層から出土の土師質椀である。第８層までは古墳時代以降の須恵器、中世の土師器が出土しており中世までの水田層と考えられる。第11・12層には土師器の細片が、第13層中から土師器の杯の細片が出土している。古代まで遡る水田層と考えられる。　（山磨）

条　里

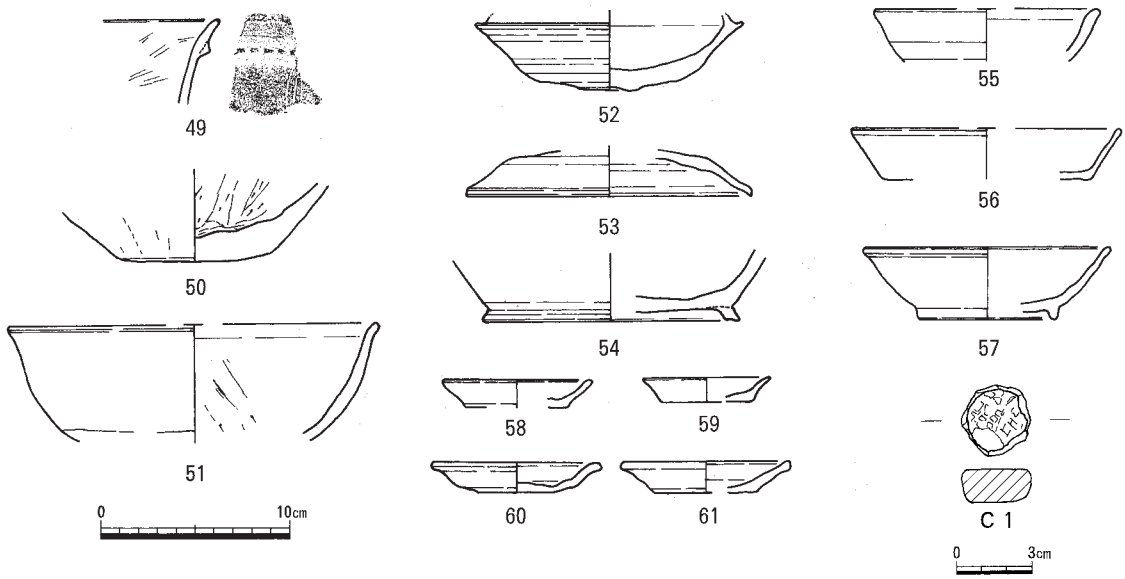
微高地（井手天原遺跡１・８区）の北側に広がる低位部（総社遺跡３・10区）は、板屋堂という字名から国衙にかかわるような施設の存在が想定されていたが（葛原克人「総社市史 通史編」1998)、発掘調査の結果、３区で島状の高まりが確認されたものの想定されたような施設は検出されなかった。しかし、10区において古代の遺物が多く出土している状況からすると、近傍にこの時期の遺構が存在するものと思われる。

島状高まりが埋積した上に広がる水田からは早島式土器が出土しており、低位部に条里地割が施されたのは鎌倉時代以降と考えられる。また、微高地に展開した鎌倉時代の集落は室町時代に入って姿を消す。このことからすると、微高地上まで条里地割が拡げられたのは室町時代以降のことであり、周辺の開発状況からすると江戸時代まで下る可能性が高い。　（亀山）

５　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第72図、図版18）

遺構の検出中や時期の異なる遺構に混入した遺物の一部を掲載する。49は12区の南端下がり出土の縄文時代晩期の深鉢形土器である。口縁端部および突帯にキザミメを施す。古墳時代初頭では、内面ヘラケズリの底部片50が12区から出土している。古墳時代後期から古代では須恵器の杯身52、高台付杯54が５区から、杯蓋53が10区、杯55が11区から出土している。土師器では高杯51が10区、杯56、高台付杯57が12区から出土している。中世では、小皿58が３区、59が５区、60・61が11区から出土している。その他、土製品には須恵器片を円板状に加工したＣ１が出土している。　（山磨）



第72図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）

第4章　まとめ

第１節　発掘調査の成果

一般国道429号の道路改築に伴い、総社市内の一般国道180号との交差点以北に所在する２遺跡の発掘調査を行った。既に調査が終了している交差点以南の７か所の調査遺跡を含め総社平野を南北にトレンチで縦断する発掘調査の状況である。井手天原遺跡は東西300m、南北150mを測る微高地の西半分に相当する遺跡で、今回の調査区は微高地と北斜面部が対象となった。総社遺跡は井手天原遺跡との境をなす旧河道を挟んで北側に位置する。今回の調査区は北端部の微高地の一部から、南に向かい緩やかに下降する斜面部と南端部の低位部が調査の対象地であった。

以下両遺跡の時代別の遺構と遺物の変遷について概略を記述する。

縄文時代晩期　縄文時代晩期の土器が総社遺跡12区の微高地斜面堆積層から１点出土した。この時期の遺構は明瞭でないものの総社遺跡の形成がこの時期から始まった可能性も考えられる。

弥生時代　総社遺跡からこの時期の遺構・遺物が検出されている。前期では木葉文の壺形土器片が５区から１点出土している。中期後半では竪穴住居は検出されなかったものの土壙、溝が確認された。特に北端部の７・14区で検出した溝４・32は幅15m近くを測り中期後半に掘削された主要幹線水路の性格を有す溝で、その東側に隣接する一般国道180号バイパスの調査でも検出されている。この水路より枝分かれした溝が多数検出され、中世まで機能していた可能性が考えられる。後期になるとさらに遺構・遺物も多くなる。

一方、井手天原遺跡は、この時期の遺構は希薄で、今回の調査区では遺構の検出は無かったものの一般国道180号以南の調査区では土壙が確認されている。

古墳時代　引き続き総社遺跡では北端部で溝群の掘削が行われており、全般にわたり遺構・遺物が確認された。井手天原遺跡では中心の時期となり、前期の竪穴住居、土壙、さらに後期のカマドを持つ竪穴住居２軒、土壙等を確認した。

古代　備中国府の推定域に相当し、官衙的な遺構遺物を井手天原遺跡で確認した。特に８区では狭小な調査区にもかかわらず５棟の掘立柱建物を検出した。このうち４棟は、主軸が同一方向を向き、隅丸方形の掘り方の柱穴を持ち企画性のある建物である。出土遺物は、須恵器の高台付杯、丹塗りの土師器等がある。備中国府推定域内では数少ない同時期の官衙的な遺構である。また、総社遺跡金井戸調査区３区では、南端の低位部から古代に遡る可能性のある水田層を検出している。平安時代後半期には遺構・遺物ともほとんど見られなくなる。

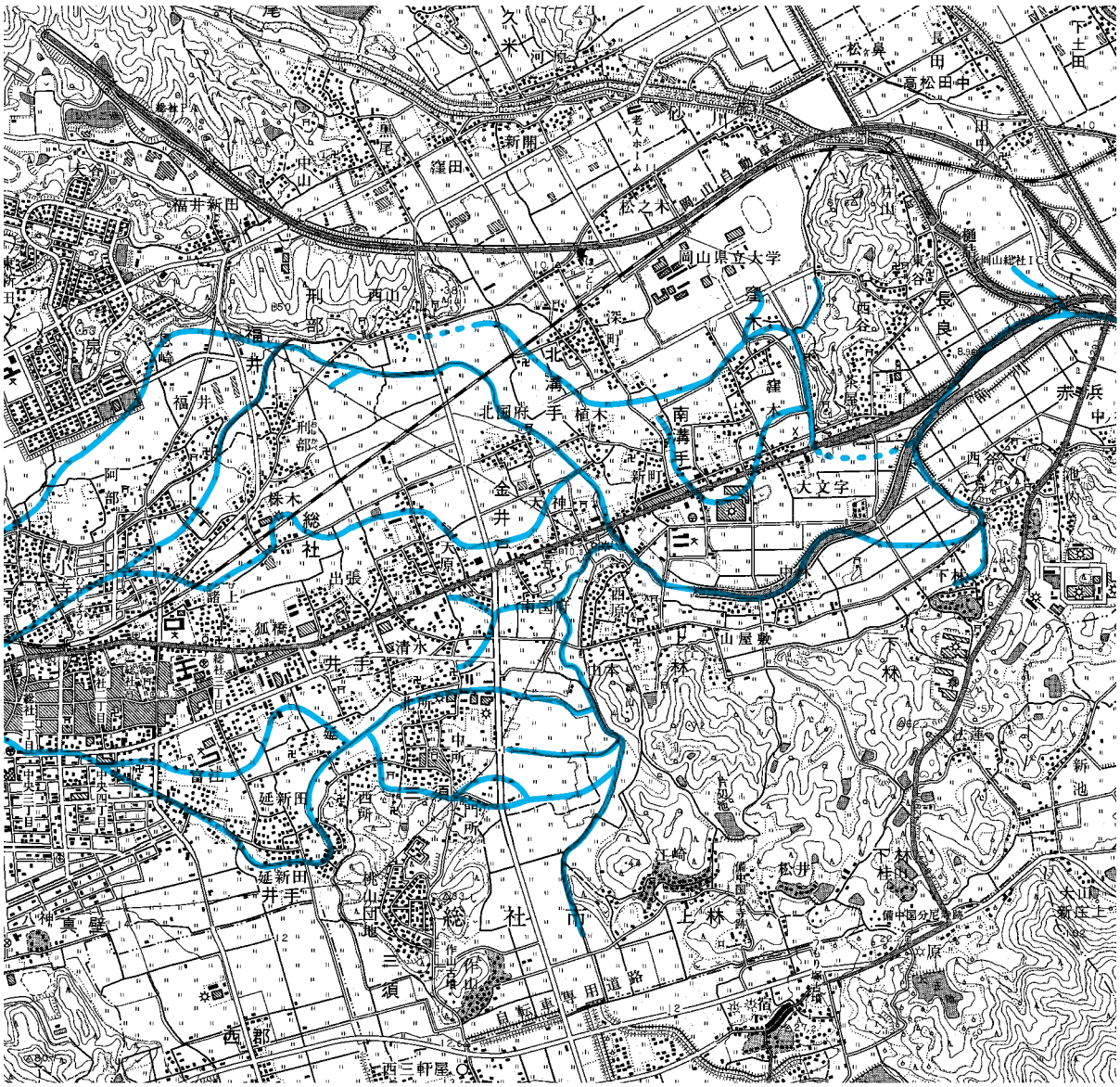
中世　平安時代末から鎌倉時代にかけて両遺跡共に掘立柱建物、溝、土壙等が多数確認された。特に井手天原遺跡では、遺構密度が高く柱穴群の一角から屋敷墓的な土壙墓２基も検出した。総社遺跡北端の７・14区の溝群は、この期まで機能していたようである。中世後半期では遺構・遺物とも希薄となり、これ以降は両遺跡とも水田化されたようである。　（山磨）

第２節　高梁川東分流の流路について

県下三大河川の一つである高梁川下流域に形成された総社平野は、総社市東部から岡山市の西端部に位置し、高梁川の東分流により形成された平野である。東分流は岡山市高塚付近で足守川に合流し、足守川下流域では多くの支流による自然堤防を形成しながら、倉敷市下庄から岡山市庭瀬付近で内海に注ぎ込んでいたと想定されている。

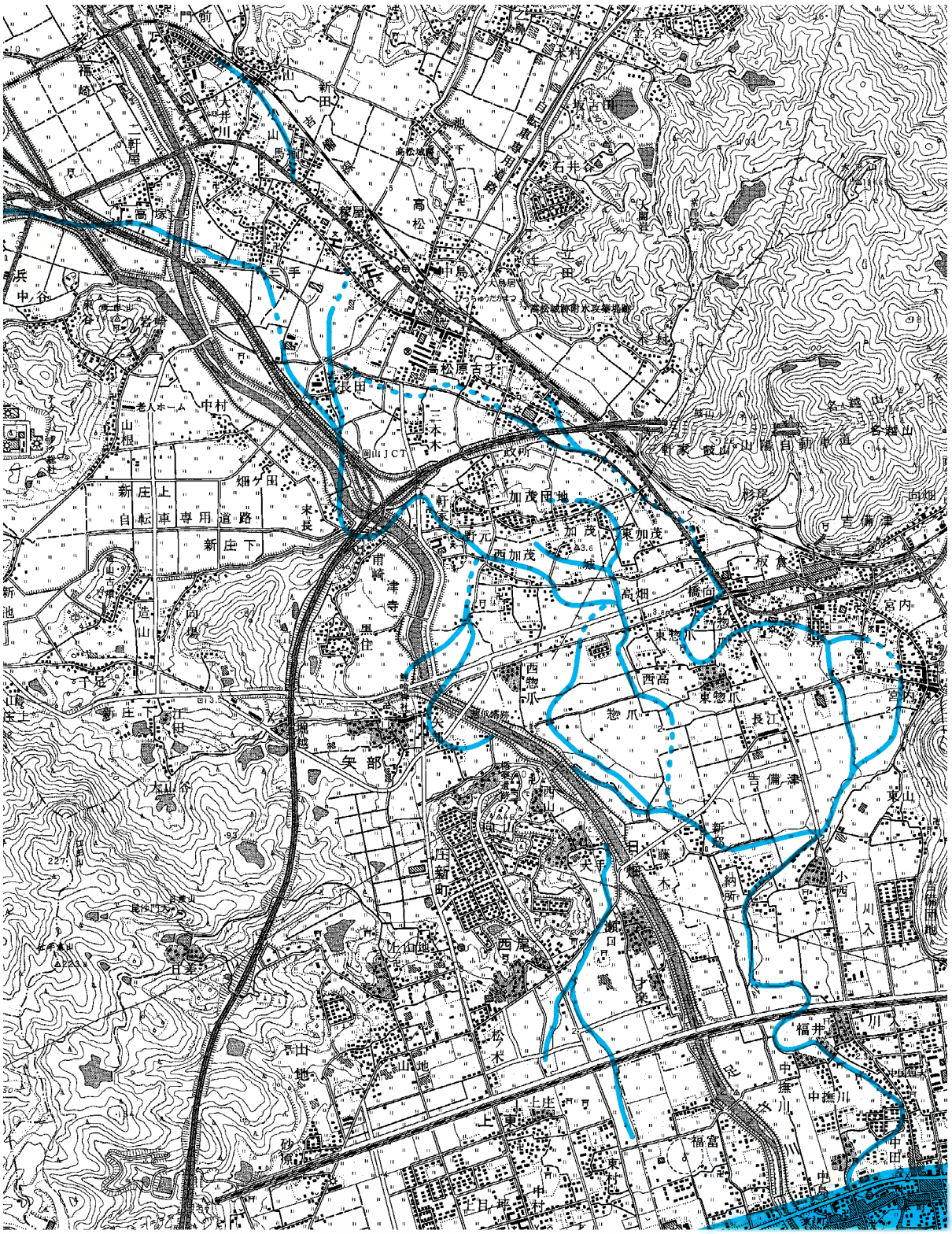
一般国道429号道路改築に伴う遺跡の調査は、当該平野を南北に縦断するトレンチを設定した状況を呈し、旧河道や微高地の所在や形成過程をある程度把握することが可能となってきた。また、高梁川東分流が南流する足守川の下流域においても近年の山陽新幹線、山陽自動車道等に伴う調査から同様な成果をあげつつある。

以下総社平野から足守川下流域の旧河道及び微高地の状況を発掘調査成果や周辺の踏査をもとに４地域に区分し概略検討したい。



第73図　高梁川東分流図①（1/30,000）

総社地区：総社市井尻野付近の高梁川本流から東方向に分流する流路は、地形観察や現水路位置等から大きく３本の旧河道が認識される。その一つは市街地の南側を東流する河道である。三須丘陵西端で北に向きを変えて丘陵を迂回し井手見延、三須畠田、三須河原遺跡等の間を流れ、上林の丘陵西端で旧山手村内から注ぎ込む河道と合流して井手天原、金井戸天神遺跡の所在する微高地の東端部で北からの河道に合流する。



第74図　高梁川東分流図②（1/30,000）

総社平野の北端部を東流する河道は、西山の広陵裾部を流走し、北溝手・南溝手付近から県立大学南を蛇行し東流する。さらに、これら2本の河道の間を東流する河道は、小寺付近で分流して、1本は総社遺跡の北境をなし、もう1本は総社・井手天原遺跡の境をなし、金井戸天神遺跡東端で3河道が合流する。その後、南丘陵裾付近を流走し岡山市高塚付近で足守川と合流する。

足守川合流部から下流域：高梁川の東分流は、岡山市高塚付近で北より南下する足守川と合流する。山陽自動車道に伴う調査や付近の地形観察等から東流する1本は、高松原古才、政所両遺跡間を流走し、吉備津の南付近で南にカーブし吉備の中山の裾を南流する大きな旧河道が認められる。この河道が太平記等の文献に見られる旧板倉川に想定されている。一方、足守川合流付近から南下する旧河道は、現足守川と一部交差し、また平行しながら、山陽自動車道津寺ジャンクション（津寺遺跡）付近に達する。津寺遺跡丸田、野上田両調査区では当該旧河道に7世紀代の大規模な護岸施設が設けられていた。旧河道は雲山の丘陵先端で北に向きをかえ三本木遺跡を横断する。岡山市加茂では中世加茂城の堀を兼ねている。その他、足守川加茂A、B両遺跡や矢部南向遺跡の間を流走する旧河道は古代には埋没したようである。岡山市加茂付近は大小の旧河道痕跡が網の目状に交差する。平野の西側を南流する数本の河道は、新邸付近で合流し、東方に向きを変え小西付近で吉備中山の裾を南下する河道と合流する。

上東・川入付近：この付近は、山陽新幹線や同側道敷きの調査から足守川下流域のデルタ地帯に相当する。県道箕島高松線（上東遺跡五反田調査区付近）以西では明瞭な微高地が無くなり湿地状をなしてくる。また、旧河道は、岡山市との市境付近の上東遺跡亀川調査区の亀川東斜面や才の町と下田所調査区間等の各微高地間に位置するが、いずれも古墳時代後半期には埋没するようである。川入付近では、旧板倉川と小西付近で合流した旧河道が、納所との間を湾曲しながら川入遺跡の微高地を形成し山陽新幹線付近で大きく蛇行して南下する。

汀線：近年岡山市境の倉敷市下庄での道路改築に伴う下庄遺跡の調査では、従来考えていた汀線よりかなり南に弥生時代後期の竪穴住居、溝等を検出した微高地が確認された。弥生時代の汀線は国道250号近くまで南下する可能性がある。またバラ園西側付近の上東遺跡の調査では、弥生時代後期の波止場と想定される堤防状の遺構が検出され、古代の主要港である「吉備の津」の前身を彷彿させる遺構が出土した。旧足守川本流は、中撫川の南の国道250号付近で内海に注ぎ込むようである。

以上、高梁川東分流の流路を4地区に区分し検討した。従来、地形図・航空写真等で観察される旧河道の痕跡は、遡っても中世段階までの河道の痕跡をとどめていると考えられていた。足守川下流域の発掘調査の結果等は、古墳時代まで遡る可能性の痕跡も観察されている。さらには弥生時代以降同一の場所に河道を踏襲し、中世段階においても流走する様子も観察されており、一概には時期を断定出来ない状況をなしている。今後の資料の増加を期待したい。　（山磨）

参考文献

正岡睦夫「吉備津周辺の微高地群」『瀬戸内考研』18　瀬戸内考古学研究所　1980

正岡睦夫「総社平野の微高地群」『瀬戸内考研』19　瀬戸内考古学研究所　1980

「備中国府跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7　総社市教育委員会　1989

日下雅義「矢部貝塚（矢部奥田遺跡）付近の地形環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　岡山県教育委員会　1993

遺　構　一　覧　表
遺　物　観　察　表
遺構名称新旧対照表

遺構一覧・遺物観察表凡例

1　遺構一覧

竪穴住居

・平面形は、床面の形状を表す。

・面積は、壁体溝の下端で計測している。

・主柱のうち、（）内の数字は推定の数である。

掘立柱建物

・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行総長、梁間総長をそれぞれ表す。

・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。

・面積は、建坪の面積を表す。

・棟方向は、身舎の主軸方位を表す。

土壙墓・土壙・溝

・規模は、検出面での長さ・幅・深さを表す。ただし、幅、深さに関しては断面が壁面で観察できるものについては、これを表す。

・規模のうち、（）は推定値を表す。

・標高は、底面最深部の海抜高を表示した。

・平面形は、検出面での形状を表す。

2　遺物観察表

土器・陶磁器

・法量のうち（）は、残存値を表す。口径項目中の（）は、その残存率が1/6以下であることを表す。

・色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

石器・石製品

・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。（）は残存値であることを表す。

土製品

・法量は、長さ・幅・厚さ・孔径の最大値を表す。（）は残存値であることを表す。

・胎土・色調は土器に準ずる。

金属製品

・法量は、長さ・幅・厚さの最大値を表す。（）は残存値であることを表す。

・重量のうち（）は、残存重量であることを表す。

井手天原遺跡観察表

竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	主軸	床面積(㎡)	底面海抜高(cm)	柱穴	柱間距離	焼土面	壁体溝	高床部	土壙	カマド		時期	備考
													有無	位置		
竪穴住居1	方形	(455)	(412)	N-26°-E	-	884	(4)	215	—	○	○	—	—	—	古墳	
竪穴住居2	方形	(378)	367	N-51°-E	13.87	857	—	—	2	○	○	1	—	—	古墳	
竪穴住居3	方形	584	—	-	-	934	—	—	—	○	—	—	—	—	古墳	
竪穴住居4	方形	407	(347)	-	-	887	—	—	無	○	○	—	—	—	古墳	
竪穴住居5	方形	523	325	N-84°-W	16.99	944	0	—	無	○	無	1	有	西辺	古墳	
竪穴住居6	方形	513	500	N-28°-E	25.65	940	0	—	無	○	無	1	有	北西辺	古墳	

掘立柱建物一覧表

遺構名	規模	柱間距離(cm)		南北(cm)	東西(cm)	面積(㎡)	棟方向	掘り方	時期	備考
		南北	東西							
掘立柱建物1	2×2	185～207	175～190	397	365	14.49	N-16°-W	隅丸方形	古代	
掘立柱建物2	3×2以上	140～145	165～175	425	—	—	N-15°-W	隅丸方形	古代	
掘立柱建物3	1×1以上	170	—	170	—	—	N-13°-W	隅丸方形	古代	
掘立柱建物4	1×1以上	180	—	180	—	—	N-17°-W	隅丸方形	古代	
掘立柱建物5	2×2	170～190	130～140	360	270	9.72	N-8°-W	円形	古代	
掘立柱建物6	2×1	198～208	210～218	406	218	8.85	N-17°-W	円形	中世	
掘立柱建物7	1×1	272～275	383～390	390	275	10.72	N-17°-W	円形	中世	

土壙墓一覧表

遺構名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	床面施設	備考
土壙墓1	隅丸長方形	153	80	16	N-87°-W	無	
土壙墓2	長方形	155	98	28	N-81°-E	無	屈葬

土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(cm)	時期	備考
土壙1	方形	皿状	370	353	25	924	古墳	
土壙2	楕円	逆台形	106	79	39	894	古墳	
土壙3	方形	皿状	170	163	4	945	中世	
土壙4	方形	皿状	311	(243)	24	955	中世	
土壙5	不整形	皿状	253	170	5	930	中世	
土壙6	楕円	椀状	72	56	17	934	中世	
土壙7	円	逆台形	61	54	44	904	中世	
土壙8	楕円	椀状	80	51	35	912	中世	
土壙9	楕円	逆台形	74	(44)	32	912	中世	
土壙10	円	逆台形	46	44	31	917	中世	
土壙11	楕円	逆台形	63	43	17	1038	中世	
土壙12	不整形	皿状	77	54	6	1050	中世	

溝一覧表

遺構名	上端幅(cm)	底面幅(cm)	断面形	深さ(cm)	時期	備考
溝1	47	21	逆台形	40	中世	

土器観察表

掲載番号	実測番号	掲載遺構	種別	器種	計測値（cm）			色　調（外面）	状態	形態・手法の特徴など	備　　考
					口径	底径	器高				
1	158	竪穴住居１	土師器	甕	12.6	—	(2.6)	にぶい橙7.5YR7/4			
2	146	竪穴住居１	土師器	甕	(14.0)	—	(2.2)	にぶい橙7.5YR6/4			
3	157	竪穴住居１	土師器	甕	13.8	—	(3.0)	にぶい褐7.5YR5/4			
4	161	竪穴住居１	土師器	甕	(15.0)	—	(3.4)	にぶい黄橙10YR7/3			
5	160	竪穴住居１	土師器	甕	13.6	—	(2.9)	褐7.5YR4/4			
6	153	竪穴住居１	土師器	甕	(12.0)	—	(3.1)	にぶい橙7.5YR7/3			
7	145	竪穴住居１	土師器	甕	(15.6)	—	(2.5)	明褐灰7.5YR7/2			
8	141	竪穴住居１	土師器	鉢	10.2	—	(5.8)	浅黄橙10YR8/3		外：ミガキ	
9	149	竪穴住居１	土師器	鉢	(11.6)	—	(3.7)	にぶい褐7.5YR5/3			
10	139	竪穴住居１	土師器	壺	13.2	—	6.9	にぶい橙7.5YR6/4			
11	147	竪穴住居１	土師器	高杯	—	—	(4.9)	橙2.5YR6/6			
12	140	竪穴住居１	土師器	高杯	—	—	5.1	にぶい褐7.5YR5/4			
13	150	竪穴住居１	土師器	高杯	—	14.0	(5.3)	橙5YR6/6			
14	162	竪穴住居１	土師器	高杯	—	16.6	(3.8)	にぶい橙7.5YR6/4		外：赤色顔料	
15	135	竪穴住居１	土師器	鉢	—	10.8	(3.5)	にぶい橙5YR6/4			
16	142	竪穴住居１	土師器	器台	(20.6)	—	(3.6)	にぶい黄橙10YR7/3			
17	143	竪穴住居１	土師器	鉢	(20.0)	—	(4.4)	にぶい褐7.5YR6/3			
18	177	竪穴住居２	土師器	甕	(11.2)	—	(2.7)	にぶい黄橙10YR6/4			
19	178	竪穴住居２	土師器	甕	13.2	—	(4.4)	灰黄褐10YR4/2			
20	191	竪穴住居２	土師器	甕	(15.4)	—	(3.9)	にぶい黄橙10YR4/3			
21	179	竪穴住居２	土師器	甕	(16.8)	—	(3.3)	にぶい黄褐10YR4/3			
22	199	竪穴住居２	土師器	甕	15.1	—	(3.7)	にぶい黄橙10YR6/3			
23	185	竪穴住居２	土師器	甕	16.6	—	(3.8)	にぶい黄橙10YR6/3			
24	186	竪穴住居２	土師器	甕	13.9	—	(3.1)	にぶい橙7.5YR7/3			
25	187	竪穴住居２	土師器	甕	13.4	—	(3.9)	灰黄橙10YR6/2			内・外：披熱を受けている
26	200	竪穴住居２	土師器	甕	(14.0)	—	(3.4)	にぶい橙7.5YR6.5/4			
27	180	竪穴住居２	土師器	甕	14.6	—	(3.7)	にぶい黄橙10YR6/4			
28	182	竪穴住居２	土師器	甕	(16.6)	—	(3.2)	にぶい黄褐10YR4/3			
29	198	竪穴住居２	土師器	甕	(14.7)	—	(4.1)	にぶい橙7.5YR6/4			
30	197	竪穴住居２	土師器	甕	16.7	—	(4.6)	にぶい褐7.5YR6/3			内・外：披熱を受けている
31	208	竪穴住居２	土師器	甕	(16.8)	—	(3.9)	褐7.5YR4/3			外：煤付着
32	201	竪穴住居２	土師器	甕	15.6	—	(4.2)	にぶい黄褐10YR5/3			
33	202	竪穴住居２	土師器	甕	15.4	—	(7.2)	暗灰黄2.5Y5/2			
34	205	竪穴住居２	土師器	甕	14.3	—	(6.0)	にぶい橙7.5YR6/4			
35	204	竪穴住居２	土師器	甕	12.8	—	(13.5)	黒褐10YR3/2		外：刺突４個	外：煤付着
36	190	竪穴住居２	土師器	高杯	(17.4)	—	(5.2)	橙5YR7/8			
37	181	竪穴住居２	土師器	高杯	13.2	—	(4.9)	にぶい赤褐5YR5/4			
38	196	竪穴住居２	土師器	器台	7.0	—	(1.6)	浅黄橙10YR8/3			
39	206	竪穴住居２	土師器	高杯	20.6	13.3	13.8	にぶい橙7.5YR7/4			
40	195	竪穴住居２	土師器	器台	—	10.6	(3.9)	浅黄橙10YR8/3			
41	207	竪穴住居２	土師器	高杯	—	(15.0)	(2.4)	橙7.5YR7/6			
42	188	竪穴住居２	土師器	高杯	—	18.6	(3.3)	橙5YR7/6			
43	172	竪穴住居３	土師器	壺	21.0	—	(21.9)	にぶい橙7.5YR6/4			
44	211	竪穴住居３	土師器	甕	18.8	—	(7.3)	灰白10YR8/2			内：煤付着
45	174	竪穴住居３	土師器	高杯	18.8	—	(5.8)	橙5YR6.5/6			
46	212	竪穴住居３	土師器	高杯	16.8	—	(12.6)	浅黄橙10YR8/3			
47	175	竪穴住居３	土師器	高杯	—	—	(6.3)	にぶい黄橙10YR7/2			
48	173	竪穴住居３	土師器	高杯	—	12.0	(7.5)	にぶい橙7.5YR7/3			
49	165	竪穴住居４	土師器	壺	17.4	—	(5.7)	にぶい橙7.5YR6/4			外：煤付着
50	166	竪穴住居４	土師器	甕	13.7	—	(18.2)	にぶい黄橙10YR7/4			使用により器面が摩滅している
51	167	竪穴住居４	土師器	甕	12.6	—	(16.6)	浅黄橙10YR8/3			
52	168	竪穴住居４	土師器	甕	14.5	—	(3.5)	にぶい橙7.5YR7/3			
53	169	竪穴住居４	土師器	甕	15.2	—	(3.2)	にぶい黄橙10YR6/4		口縁部内面：細いミガキ	
54	170	竪穴住居４	土師器	甕	13.2	—	(5.0)	にぶい橙7.5YR7/4		外：ミガキ	
55	171	竪穴住居４	土師器	壺	9.8	—	(7.2)	灰白10YR8/2			
56	163	竪穴住居４	土師器	高杯	—	0.8	(6.8)	橙6YR6/6			
57	28	竪穴住居５	須恵器	杯蓋	12.3	—	5.1	灰N4.5/1			
58	29	竪穴住居５	須恵器	杯身	10.7	—	5.1	灰N5/1	ほぼ完形		
59	26	竪穴住居５	土師器	甕	10.7	—	—	にぶい橙7.5YR7/3			
60	27	竪穴住居５	土師器	鉢	11.6	4.8	4.2	赤10R5/6		内：ヘラミガキ？	外：煤付着
61	30	竪穴住居５	須恵器	甕	—	—	—	灰N6/1			

掲載番号	実測番号	掲載遺構	種別	器種	計測値（cm）			色　調（外面）	状態	形態・手法の特徴など	備　考
					口径	底径	器高				
62	5	竪穴住居6	須恵器	杯蓋	(14.8)	—	(3.3)	灰N4.5/1			
63	6	竪穴住居6	須恵器	杯蓋	14.1	—	4.5	灰N5/1			
64	7	竪穴住居6	須恵器	杯蓋	14.8	—	(4.3)	灰10Y5/1			土壙内出土
65	8	竪穴住居6	須恵器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰N5/1			土壙内出土
66	4	竪穴住居6	須恵器	杯身	13.2	—	(4.3)	灰N6/1			
67	2	竪穴住居6	須恵器	高杯	13.2	—	(9.2)	赤灰2.5YR4/1			
68	1	竪穴住居6	須恵器	短頸壺	7	3.5	7.4	灰N7/1	完形		
69	3	竪穴住居6	須恵器	高杯	—	14.0	(3.0)	暗灰N3/1			
70	9	竪穴住居6	土師器	甕	—	—	(2.3)	橙5YR6/6			
71	19	土壙1	土師器	甕	(12.2)	—	(3.2)	にぶい橙7.5YR6/4			
72	24	土壙1	土師器	甕	(12.8)	—	(2.8)	浅黄橙10YR8/3			
73	20	土壙1	土師器	甕	12.8	—	(2.4)	にぶい黄褐10YR5/3			
74	21	土壙1	土師器	甕	(12.8)	—	(2.0)	灰黄褐10YR4/2			
75	25	土壙1	土師器	高杯	16.2	—	(3.8)	にぶい橙7.5YR7/4			
76	23	土壙1	土師器	鉢	4.6	2.2	4.0	黄褐2.5Y5/3		手捏ね土器	
77	11	土壙1	土師器	高杯	16.2	—	(8.0)	橙2.5YR6/6			
78	12	土壙1	土師器	高杯	13.9	—	(8.1)	橙2.5YR6/8		外・内：赤色顔料？	
79	15	土壙1	土師器	高杯	11.0	—	(6.8)	橙7.5YR7/6			
80	22	土壙1	土師器	高杯	—	13.8	(2.0)	にぶい橙7.5YR7/4			
81	14	土壙1	土師器	高杯	—	—	(2.5)	にぶい橙7.5YR6/4			
82	⑥	包含層	土師器	甕	11.7	—	(8.1)	灰白10YR8/2			
83	③	包含層	土師器	甕	(15.6)	—	(5.1)	橙7.5YR7/6			
84	⑤	包含層	土師器	壺	12.8	—	7.2	にぶい橙7.5YR7/3			
85	①	包含層	土師器	鉢	13.8	—	5.1	にぶい黄橙10YR7/2			
86	236	掘立柱建物2	須恵器	杯	—	—	(2.7)	灰N6/1			
87	237	掘立柱建物2	須恵器	杯	—	—	(2.0)	灰N4/1			
88	239	掘立柱建物2	須恵器	蓋	15.9	—	(1.1)	灰N7/1			
89	238	掘立柱建物2	須恵器	杯	—	—	(2.3)	灰N6/1			
90	43	掘立柱建物2	須恵器	高杯	—	—	(4.7)	にぶい黄橙10YR7/2			外：煤付着
91	41	掘立柱建物2	須恵器	蓋	18.0	—	(2.4)	灰N5.5/1			
92	241	掘立柱建物2	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	にぶい黄橙10YR7/2			
93	57	掘立柱建物2	須恵器	杯	—	—	(2.5)	黒N2/1			
94	226	掘立柱建物2	須恵器	杯	—	—	(2.0)	灰5Y6/1			
95	58	掘立柱建物2	須恵器	杯	14.0	—	(2.8)	灰N6.5/1			
96	231	掘立柱建物5	土師器	甕	—	—	(2.3)	橙7.5YR6/6			
97	232	掘立柱建物5	土師器	甕	—	—	(1.1)	灰白10YR8/1		内：赤色顔料	
98	234	掘立柱建物5	土師器	高杯	—	—	(1.4)	にぶい黄橙10YR6/3			
99	118	包含層	須恵器	蓋	—	—	(0.7)	灰N4/1			
100	53	包含層	須恵器	蓋	—	—	(1.3)	灰白N8/1			
101	48	包含層	須恵器	杯	10.0	(15.2)	3.4	灰N6/1			
102	134	包含層	須恵器	杯	—	(11.0)	(2.6)	黄灰2.5Y6/1			
103	122	包含層	須恵器	杯	—	10.0	(2.2)	灰N5/1			
104	117	包含層	須恵器	杯	—	10.1	(1.5)	灰白10YR8/2			
105	164	包含層	須恵器	杯	—	9.0	(2.2)	灰5Y6/1			
106	49	包含層	土師器	皿	—	—	(1.8)	にぶい黄橙7.5YR7/4		全体に赤色顔料	
107	176	包含層	土師器	皿	19.0	—	(2.4)	にぶい黄橙10YR7/4		内・外：赤色顔料	
108	70	包含層	須恵器	鉢	30.8	(21.4)	(7.6)	灰白2.5YR8/1		底：ケズリ	
109	223	掘立柱建物6	土師器	椀	—	—	(1.7)	浅黄橙7.5YR8/3			
110	224	掘立柱建物6	土師器	椀	—	—	(1.2)	灰白10YR8/1.5			
111	222	掘立柱建物6	土師器	椀	—	—	(1.2)	灰白7.5YR8/2			
112	59	掘立柱建物6	亀山	甕	—	—	(5.1)	灰N4.5/1		口縁端部にタタキ痕	
113	228	掘立柱建物6	土師器	椀	—	—	(2.4)	灰白10YR8/2			
114	227	掘立柱建物6	土師器	椀	—	—	(2.6)	灰白10YR8/2			
115	229	掘立柱建物6	土師器	皿	7.6	6.0	1.4	灰白10YR8/2			
116	63	柱　穴	土師器	椀	15.1	6.2	6.3	灰白10YR8/2		内外面：ヘラミガキ	
117	67	柱　穴	土師器	椀	13.9	6.0	4.6	灰白2.5Y8/2		底：ナデ	
118	62	柱　穴	土師器	椀	14.7	—	4.4	灰白10YR8/1			
119	32	柱　穴	土師器	椀	13.6	6.0	6.6	明褐灰7.5YR7/2		底：ナデ	
120	77	柱　穴	土師器	椀	(15.8)	—	(2.8)	にぶい橙7.5Y7/4		内・外：赤色顔料	
121	33	柱　穴	土師器	椀	11.7	5.9	4.2	灰白10YR8/1		底：ナデ	
122	16	柱　穴	土師器	皿	14.0	7.4	3.1	にぶい橙7.5YR7/3		底・外面：ヘラ記号	
123	47	柱　穴	土師器	皿	7.2	(5.2)	1.7	にぶい黄橙10YR7/2			
124	76	柱　穴	土師器	皿	7.1	6.3	1.6	橙5YR6/6	完形	底：ヘラキリ	
125	51	柱　穴	土師器	皿	7.5	6.0	1.4	にぶい橙7.5YR6.5/4		底：ヘラキリ	
126	39	柱　穴	土師器	皿	7.0	3.8	1.5	灰白10YR8/2		底：ナデ	
127	40	柱　穴	土師器	皿	7.6	5.6	1.0	灰白10YR8/2	完形	底：ヘラキリ	
128	42	柱　穴	土師器	皿	8.6	6.0	1.2	浅黄橙7.5YR8/3		底：ヘラキリ	

掲載番号	実測番号	掲載遺構	種別	器種	計測値（cm）			色　調（外面）	状態	形態・手法の特徴など	備　考
					口径	底径	器高				
129	68	柱　穴	土師器	皿	8.6	(6.6)	1.4	にぶい黄橙10YR7/3		底：ヘラキリ	
130	75	柱　穴	土師器	皿	－	4.6	2.2	灰白10YR8/2		底：ヘラキリ	
131	64	柱　穴	東播系須恵器	鉢	29.0	－	5.6	灰N6/			
132	65	柱　穴	亀山	甕	－	(20.2)	8.4	黒10YR2/1			
133	44	柱　穴	土師器	鍋	(25.2)	－	3.0	暗灰黄2.5YR5/2			外：煤付着
134	223③	柱　穴	白磁	碗	－	－	2.4	灰オリーブ7.5Y6/2			
135	224⑤	柱　穴	白磁	碗	－	－	2.5	灰オリーブ5Y6/2			
136	228⑪	柱　穴	白磁	碗	－	－	1.5	灰白5Y7/2			
137	225⑥	柱　穴	青磁	碗	－	－	3.3	灰オリーブ7.5Y6/2			同安窯系
138	232⑳	柱　穴	白磁	皿	－	－	1.7	灰オリーブ5Y6/2			
139	231⑮	柱　穴	白磁	皿	－	－	2.0	灰白5Y6/2			
140	105	土壙4	土師器	椀	10.9	4.2	3.65	灰白10YR8/1		底：ナデ	外：煤付着
141	104	土壙4	土師器	椀	11.7	4.8	3.8	灰白7.5YR8/2		底：ナデ	外：煤付着
142	102	土壙4	土師器	椀	11.4	4.75	3.75	灰白10YR8/2	ほぼ完形	底：ナデ	
143	103	土壙4	土師器	椀	12.0	4.7	3.9	灰白7.5YR7/2		底：未調整	
144	55	土壙4	土師器	椀	11.0	5.0	3.7	灰黄褐10YR4/2		底：ナデ	
145	101	土壙4	土師器	椀	11.2	5.2	4.0	灰白5Y7/1		底：ナデ	
146	107	土壙4	土師器	椀	(12.0)	5.2	3.1	灰白10YR8/2		底：ナデ	
147	106	土壙4	土師器	椀	(11.4)	(5.0)	4.1	灰白7.5YR8/2		底：ナデ	
148	108	土壙4	土師器	皿	7.0	5.0	1.2	橙5YR7/6		底：ヘラキリ	
149	111	土壙4	土師器	鍋	41.2	－	(11.8)	明褐灰7.5YR7/2			
150	110	土壙4	土師器	鍋	42.0	－	(9.5)	にぶい橙7.5YR7/2			外：煤付着
151	116	土壙4	東播系	甕	－	－	(6.3)	赤灰2.5YR4/1			
152	115	土壙4	須恵器	鉢	－	－	(4.2)	灰N5/			
153	114	土壙4	東播系須恵器	鉢	－	－	(3.3)	灰7.5Y5/1			
154	112	土壙4	東播系須恵器	鉢	－	－	(2.5)	灰N6/			
155	113	土壙4	東播系須恵器	鉢	－	－	(3.3)	灰10Y5/1			
156	109	土壙4	土師質	鍋	－	－	(10.0)	にぶい褐7.5Y5/3			外：煤付着
157	124	土壙4	白磁	碗	－	－	(2.4)	灰白N8/1			
158	125	土壙4	白磁	皿	－	3.0	1.8	灰黄2.5Y7/2			
159	234(22)	土壙4	白磁	碗	－	－	(0.7)	灰白2.5Y8/1			
160	233	土壙4	青磁	碗	－	－	－	暗オリーブ5Y4/3			
161	253	土壙5	土師器	椀	－	－	1.8	灰白2.5Y8/1			
162	254	土壙5	土師器	椀	－	－	1.4	灰白2.5Y8/1			
163	251	土壙5	土師器	椀	－	－	1.6	にぶい黄橙10YR7/3			
164	250	土壙5	土師器	皿	(8.6)	(6.4)	1.1	にぶい黄橙10YR7/2.5		底：ヘラキリ	
165	249	土壙5	土師器	皿	(7.0)	(5.6)	1.1	浅黄橙10ＹＲ8/3		底：ヘラキリ	
166	252	土壙5	土師器	鍋	－	－	(2.1)	褐灰10YR4/1			内・外：煤付着
167	245	土壙6	土師器	椀	－	－	(3.3)	灰白10YR8/1			
168	243	土壙6	土師器	椀	－	－	(1.0)	灰白10YR8/2			
169	227⑨	土壙6	白磁	碗	－	－	(1.9)	灰白7.5Y7/1			
170	244	土壙6	土師器	椀	－	－	(2.1)	灰白10YR8/1			
171	242	土壙6	土師器	鍋	－	－	(1.5)	にぶい黄橙10YR7/3			
172	246	土壙7	土師器	椀	－	－	(1.8)	灰白10YR8/2			
173	248	土壙7	土師器	椀	－	(5.8)	(1.3)	黄灰2.5Y5/1			
174	255	土壙7	土師器	皿	－	－	1.4	浅黄橙10YR8/3			
175	247	土壙7	土師器	鍋	－	－	(3.8)	黒褐10YR3/1			
176	100	土壙9	土師器	椀	14.6	－	(5.0)	2.5Y5/1			外：付着物有り
177	96	土壙9	土師器	椀	(14.0)	－	(4.4)	灰白2.5YR8/1			
178	94	土壙9	土師器	椀	－	－	(1.7)	灰白10YR8/1			内：煤付着 全体に披熱
179	93	土壙9	土師器	椀	－	－	(1.6)	灰白2.5YR8/1		底：ヨコナデ、ヘラキリ	
180	95	土壙9	土師器	皿	7.6	6.6	1.1	橙2.5YR7/6		底：ヘラキリ	
181	91	土壙9	土師器	皿	7.5	4.6	1.4	淡赤橙2.5YR7/4		底：ヘラキリ	
182	89	土壙9	土師器	皿	7.4	5.7	1.3	にぶい橙7.5Y7/4		底：ヘラキリ	
183	98	土壙9	土師器	皿	8.9	3.3	1.2	にぶい橙7.5YR7/4		底：ヘラキリ	
184	90	土壙9	土師器	皿	8.1	6.0	1.2	淡赤橙2.5YR7/3		底：ヘラキリ	
185	92	土壙9	土師器	皿	7.8	5.4	1.3	浅黄橙10YR8/2		底：ヘラキリ	
186	97	土壙9	土師器	脚付皿	9.8	6.0	6.8	灰白10YR8/2		底：仕上げナデ	外：付着物有り
187	99	土壙9	土師器	鍋	28.6	－	(4.8)	黒褐10YR3/2			
188	130	土壙9	白磁	碗	－	－	(2.7)	灰白7.5Y7/1			
189	129	土壙9	白磁	碗	－	－	(3.6)	灰白2.5Y7/1			

掲載番号	実測番号	掲載遺構	種別	器種	計測値（cm）			色　調（外面）	状態	形態・手法の特徴など	備　　考
					口径	底径	器高				
190	56	土壙10	土師器	椀	14.0	4.9	(6.0)	にぶい黄橙10YR7/2	ほぼ完形	底：ヨコ方向ヘナデ	
191	54	土壙10	土師器	鍋	26.4	—	13.0	黒褐10YR3/2	ほぼ完形		外：煤付着
192	80	土壙墓1	土師器	椀	13.0	5.5	5.1	灰白10YR8/2	ほぼ完形	底：ヘラキリ	
193	81	土壙墓1	土師器	皿	7.6	6.2	1.4	灰白10YR8/2	ほぼ完形	底：ヘラキリ	
194	84	土壙墓1	土師器	皿	7.5	5.3	1.4	にぶい黄橙10YR7/3	完形	底：ヘラキリ	
195	85	土壙墓1	土師器	皿	7.5	5.2	1.3	にぶい黄橙10YR7/4	完形	底：ヘラキリ	
196	79	土壙墓2	土師器	椀	14.2	6.1	5.1	灰白10YR8/1	ほぼ完形	底：ヘラキリ	
197	82	土壙墓2	土師器	皿	7.9	6.6	1.6	浅黄橙10YR8/1	完形	底：ヘラキリ	
198	83	土壙墓2	土師器	皿	7.6	5.6	1.0	にぶい黄橙10YR7/3	完形	底：ヘラキリ	
199	86	土壙墓2	土師器	皿	8.0	5.8	1.3	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形	底：ヘラキリ	
200	87	土壙墓2	土師器	皿	7.6	5.8	1.2	にぶい黄橙10YR7/3	完形	底：ヘラキリ	
201	88	土壙墓2	土師器	皿	7.8	6.4	1.5	浅黄橙10YR8/3		底：ヘラキリ	
202	128	水田1	白磁	碗	—	5.7	(2.5)	灰白7.5Y7/1		内：砂目、釉ハギ	
203	215	水田1	陶器	碗	12.5	—	(2.6)	にぶい黄橙10YR7/3			唐　津
204	136	水田1	陶器	碗	—	4.4	(2.3)	褐灰7.5YR4/1		外：削り出し高台	〃
205	138	水田1	陶器	皿	—	3.8	(1.2)	にぶい橙7.5Y7/3		内：重ね焼痕	〃
206	218	水田1	染付	碗	—	6.0	(1.5)	灰白2.5Y8/1			肥前系
207	137	水田1	染付	碗	(10.4)	—	(3.0)	灰白N81			〃
208	221	水田1	染付	碗	—	—	(1.4)	灰白N8/			〃
209	216	水田1	染付	碗	—	(6.1)	(1.6)	灰白N8/			〃
210	217	水田1	染付	碗	—	3.6	(2.0)	灰白N8/			〃
211	127	水田1	備前焼	擂鉢	—	—	(5.5)	灰赤10R5/2			
212	36	包含層	土師器	椀	11.7	5.1	4.0	灰ｲ10YR8/2			
213	72	包含層	土師器	皿	7.2	5.4	1.0	にぶい黄橙10YR7/3		底：ヘラキリ	
214	60	包含層	土師器	皿	8.8	6.0	1.3	灰白10YR8/2		底：ヘラキリ後ナデ	
215	74	包含層	東播系須恵器	鉢	(30.8)	—	(3.8)	灰10YR6/			
216	61	包含層	亀山	甕	—	—	(5.7)	灰N5.5/1			
217	73	包含層	亀山	鉢	—	—	(4.3)	灰ｲ5Y8/1			
218	119	包含層	土師器	鍋	40.2	—	(4.9)	にぶい橙7.5YR6/4		外：使用痕で摩滅	外：煤付着
219	120①	包含層	土師器	カマド	—	—	—	にぶい橙5YR6/4		外：２か所接合痕	内：煤付着
220	123	包含層	白磁	碗	14.0	—	(3.4)	灰白5Y7/1			
221	121	包含層	白磁	碗	—	6.6	(3.4)	灰白10Y7.5Y/1			
222	229⑫	包含層	青磁	皿	—	—	(2.0)	灰オリーブ5Y5/3			同安窯系
223	222①	包含層	青磁	皿	—	—	(1.7)	オリーブ灰10Y6/2			

金属器観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構	器種	計測値（mm）			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M1	25	竪穴住居1	刀子	(45)	28.5	6.5	(11.11)	鉄	古墳	
M2	24	竪穴住居1	刀子	(69.4)	15	(2)	(7.69)	鉄	古墳	木質付着
M3	27	竪穴住居2	鉇	(188.5)	11	3.5	(29.34)	鉄	古墳	
M4	30	竪穴住居2	鉇	(10.85)	12.8	5	(19.84)	鉄	古墳	
M5	26	竪穴住居2	鏃	(84)	35.7	3	(38.61)	鉄	古墳	
M6	29	竪穴住居2	鏃	(50)	26	11.5	(19.69)	鉄	古墳	
M7	31	竪穴住居2	鎹？	(4.7)	15	3	(12.81)	鉄	古墳	
M8	9	柱穴	釘	(18.5)	4.5	5	(0.95)	鉄	中世	
M9	1	柱穴	釘	(39)	6	4	(3.84)	鉄	中世	
M10	2	柱穴	鎌	(96)	29	4	(34.46)	鉄	中世	
M11	12	柱穴	釘	(57)	10.5	7.5	(11.33)	鉄	中世	
M12	11	柱穴	刀子	(70)	17.5	3.5	(20.96)	鉄	中世	
M13	20	土壙4	釘	(36)	6	7	(2.98)	鉄	中世	
M14	18	土壙4	釘	(25.5)	6	5	(2.03)	鉄	中世	
M15	19	土壙4	釘	(19)	5.2	4.5	(1.03)	鉄	中世	
M16	28	土壙9	紡錘車	(133.5)	40	8	(25.05)	鉄	中世	
M17	13	土壙墓2	短刀	273	24	4.5	61.98	鉄	中世	鞘の木質残存
M18	14	土壙墓2	刀子	(148)	24	6	(49.23)	鉄	中世	
M19	15	土壙墓2	剃刀	(150)	23	45	(31.28)	鉄	中世	束の木質残存
M20	16	土壙墓2	釘	(119)	10	7	(23.72)	鉄	中世	木質付着
M21	17	土壙墓2	釘	(33)	9	5	(6.54)	鉄	中世	木質付着
M22	22	土壙墓2	釘	(20)	7	5.5	(1.29)	鉄	中世	木質付着
M23	23	包含層	釘	48.5	9	6.5	9.48	鉄	中世	
M24	6	包含層	釘	(67)	7	6	(9.5)	鉄	中世	
M25	4	包含層	釘	(52)	10	4.5	(8.54)	鉄	中世	
M26	21	包含層	釘	(25)	6	8	(1.99)	鉄	中世	
M27	5	包含層	釘	(23)	6	5	(1.95)	鉄	中世	
M28	10	包含層	釘	(23)	5	4	(1.5)	鉄	中世	

石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構	器種	計測値(mm)			重量(g)	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	31	竪穴住居2	管玉	12.4	5.5	5.5	0.53	古墳	緑色凝灰岩
S2	4	竪穴住居5	叩石	120	29	29	194.16	古墳	
S3	6	土壙1	叩石	141	66	51	646.63	古墳	
S4	5	包含層	鏃	18.5	17	2.5	0.71	古墳	サヌカイト
S5	7	柱穴	砥石	170	78	59	1328.62	中世	
S6	2	柱穴	砥石	68	37	36	109.4	中世	
S7	7	土壙4	砥石	58	50.5	26	96.54	中世	

土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構	器種	計測値(mm)			重量(g)	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
C1	132	竪穴住居1	紡錘車	44	43	13	29.09	古墳	
C2	34	包含層	丸瓦	76	(109)	26	—	古代	
C3	50	包含層	平瓦	(163)	(116)	25	—	古代	
C4	71	土壙5	土錘	(43)	11	4	(4.14)	中世	
C5	131	水田1	土錘	44	10	4	3.99	中世	

総社遺跡観察表

掘立柱建物一覧表

遺構名	規　模	柱間距離(cm)		南北(cm)	東西(cm)	面積(㎡)	棟方向	掘り方	時期	備　考
		南北	東西							
掘立柱建物1	2×1	167～175	240	345	240	8.28	N-10°-W	円形	中世	

土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海抜高（cm)	時期	備　考
土壙1	楕円形	椀状	184	178	57	942	—	
土壙2	不整形	逆台形	77	65	30	968	古墳・後	
土壙3	円形	皿状	220	196	5	997	古墳・後	
土壙4	—	椀状	98	—	7	999	—	
土壙5	—	皿状	200	132	20	983	—	
土壙6	方形	逆台形	(290)	(95)	40	964	—	
土壙7	隅丸方形	逆台形	161	120	40	962	中世	
土壙8	隅丸方形	皿状	200	130	15	988	中世	
土壙9	不整形	皿状	250	250	20	970	古墳・前	
土壙10	楕円形	椀状	67	55	28	970	中世？	

溝一覧表

遺構名	上端幅(cm)	底面幅(cm)	深さ(cm)	断面形	時期	備　考
溝1	15	10	10	椀状	古墳・後	
溝2	19	10	4	皿状	古墳・前	
溝3	150	64	10	皿状	古墳・後	
溝4	1500以上	—	200以上	椀状	弥生	
溝5	70	42	5	皿状	古墳・後	
溝6	20	16	10	椀状	古墳・前	
溝7	60	24	4～10	V字状	弥生・後	
溝8	60	16	10	逆台形	弥生・後	
溝9	60	34	5	皿状	弥生・後	
溝10	50～60	42	10	椀状	弥生・後	
溝11	70	16	10	皿状	弥生・後	
溝12	65	44	10	皿状	弥生・後	
溝13	50	12	5	皿状	弥生・後	
溝14	30	16	5	椀状	弥生・後	
溝15	110	68	40	椀状	弥生・後	
溝16	150	60	40	椀状	弥生・中	
溝17	60	48	20	椀状	弥生・中	
溝18	35	24	10	V字状	弥生・後	
溝19	80	8	40	椀状	弥生・中	
溝20	50	38	10～15	椀状	古墳・前	
溝21	50	22	10	椀状	古墳・前	
溝22	40	21	10	椀状	弥生	
溝23	40	24	5	皿状	古墳・後	
溝24	40	6	7	皿状	古墳・前	
溝25	100	52	15	椀状	古墳・前	
溝26	50	26	7	椀状	古墳・前	
溝27	54	24	7	椀状	古墳・前	
溝28	70～80	32	7	皿状	古墳・前	
溝29	80	42	18	椀状	古墳・前	
溝30	200	102	10	皿状	中世	
溝31	100	46	20	椀状	—	
溝32	—	—	—	椀状	弥生	
溝33	75	50	5	皿状	弥生	
溝34	—	—	10	椀状	弥生・後	
溝35	50	33	5	椀状	弥生	
溝36	85	32	15	椀状	弥生・後	
溝37	120	52	25	椀状	弥生	
溝38	50	46	15	椀状	—	
溝39	285	39	42	椀状	古墳・後	

遺構名	上端幅(cm)	底面幅(cm)	深さ(cm)	断面形	時 期	備　　考
溝40	225	90	44	逆台形	古墳・後	
溝41	65	25	15	椀 状	古墳以前	
溝42	550	—	160	椀 状	中 世	
溝43	20	3	15	椀 状	中 世	
溝44	20	6	30	椀 状	中 世	
溝45	80	14	15	椀 状	中 世	
溝46	310	208	90	逆台形	中 世	
溝47	335	52	105	逆台形	古墳・後	中世と重複
溝48	190	54	90	椀 状	古墳・前	
溝49	35	12	10	椀 状	中 世	
溝50	45	10	10	椀 状	古墳・前	
溝51	45	28	15	皿 状	弥 生	
溝52	110	16	15	皿 状	弥 生	
溝53	200	48	50	逆台形	古墳・前	
溝54	140	15	80	V字状	古墳・前	

土器観察表

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	計測値（cm）			色　調	状態	形態・手法の特徴など	備　　考
					口径	底径	器高				
1	92	土壙2	弥 生	甕	15.0	—	(10.0)	灰白10YR8/2		内・外：タテ方向ヘハケメ	
2	80	溝4	弥 生	甕	—	—	(2.8)	橙5YR7/6		外：ヨコナデ	
3	78	溝4	弥 生	高杯	—	—	(1.8)	にぶい橙7.5YR7/3		外：ヨコナデ	外：被熱
4	79	溝4	弥 生	甕	—	(7.0)	(3.4)	にぶい黄橙10YR7/2		底：指ナデ、上げ底	
5	77	溝3	弥 生	甕	—	(6.8)	(2.8)	灰白10YR8/1.5		内・外：ヘラミガキ	
6	113	溝3	須恵器	高杯	—	(3.2)	(3.1)	灰N5/1			
7	114	溝5	須恵器	杯	11.6	—	(3.1)	灰N6/1			
8	83	溝9	弥 生	甕	(13.6)	—	(2.3)	にぶい褐7.5YR5/4			
9	81	溝10	弥 生	甕	—	—	(2.2)	にぶい橙5YR7/4			
10	82	溝12	弥 生	壺	—	—	(2.4)	にぶい橙5YR6/4			
11	84	溝15	弥 生	壺	—	—	(9.1)	褐灰10YR6/1		内：ケズリ	
12	91	溝16	弥 生	甕	—	—	(1.8)	にぶい橙7.5YR6/4		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
13	85	溝16	弥 生	甕	18.0	—	(1.8)	にぶい黄橙10YR7/3		内・外：ヨコ方向ヘナデ	赤色顔料付着
14	87	溝17	弥 生	甕	—	(4.8)	(1.9)	褐灰10YR5/1		外：タテ方向ミガキ	
15	86	溝17	弥 生	甕	(15.4)	—	(1.3)	灰白10YR8/2		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
16	90	溝19	弥 生	甕	-	—	(3.0)	灰黄褐10YR5/2		外：ナデ	
17	88	溝19	弥 生	甕	(13.4)	—	(1.4)	にぶい橙7.5YR6/4		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
18	126	溝20	土師器	高杯	—	—	(5.6)	にぶい橙5YR6/4		外：ヨコ方向ヘラミガキ	
19	124	溝24	弥 生	高杯	—	—	(2.4)	にぶい橙7.5YR6/4		内・外：不明	
20	145	溝35	弥 生	甕	—	—	(1.4)	浅黄2.5Y7/3			
21	125	包含層	弥 生	高杯	—	—	(2.7)	灰黄褐10YR6/2		外：透孔有り	
22	128	包含層	土師器	高杯	(12.6)	—	(3.6)	浅黄橙10YR8/3		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
23	89	包含層	土師器	皿	(17.6)	—	(2.3)	浅黄橙10YR8/3		内・外：ヨコ方向ヘナデ	内：赤色顔料の痕跡
24	129	包含層	須恵器	杯身	12.2	6.8	3.2	灰白N7/		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
25	115	包含層	須恵器	杯身	—	—	(3.4)	灰N6/1		内・外：ヨコナデ	
26	127	包含層	須恵器	杯身	—	(2.6)	(2.6)	灰白N8/		底：ヨコ方向ヘナデ	
27	116	包含層	須恵器	杯身	—	(2.8)	(3.0)	灰白N7/1～灰N6/1		底：回転ヘラケズリ	
28	70	土壙9	土師器	高杯	(12.6)	—	(5.1)	にぶい橙7.5YR6/4		内：スサ混入	内・外：赤色顔料
29	71	土壙9	土師器	鉢	15.2	—	4.9	にぶい黄橙10YR6/3		内底部：焼成後穿孔	
30	43	溝39	土師器	高杯	—	—	(7.4)	明赤褐2.5YR5/6		内：ヘラミガキ	
31	13	溝39	土師器	高坏	—	—	(4.9)	灰白色2.5Y7/1			
32	9	溝40	須恵器	杯身	12.8	—	4.5	灰黄2.5Y6/2	ほぼ完形		
33	135	溝47	弥 生	壺	(11.2)	—	(5.6)	橙5YR6/6			
34	132	溝47	土師器	壺	—	—	(3.6)	灰黄2.5Y6/2		内・外：ナデ	
35	131	溝47	須恵器	高杯	—	7.8	(2.7)	にぶい橙7.5YR6/4		外：ミガキ痕跡有り	
36	133	溝47	土師器	高杯	—	11.2	(4.3)	浅黄橙10YR8/3		内・外：ミガキ痕跡	
37	138	溝47	須恵器	杯蓋	—	—	(2.5)	灰白N7/			
38	134	溝47	須恵器	壺	—	11.2	(6.5)	灰N4/		外：波状文	
39	141	溝48	弥 生	壺	—	3.4	(3.2)	橙5YR6/6		外：工具ナデ	
40	142	溝48	弥 生	高杯	—	8.4	(3.3)	橙5YR6/6			
41	143	溝48	土師器	甕	13.5	—	(8.5)	にぶい黄橙10YR7/2			
42	97	溝49	弥 生	甕	—	—	(2.1)	にぶい黄橙10YR7/3			
43	98	溝49	弥 生	甕	—	—	(4.5)	橙7.5YR6/6			

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	計測値（cm）			色　調	状態	形態・手法の特徴など	備　考
					口径	底径	器高				
44	99	溝51	弥 生	壺	－	－	(2.1)	にぶい橙7.5YR7/4			
45	100	溝51	土師器	高杯	－	－	(3.1)	橙2.5YR6/6			
46	101	溝52	土師器	甕	－	－	(1.9)	にぶい橙7.5YR6.5/4		内・外：ヨコナデ	
47	102	溝52	土師器	甕	(14.8)	－	(3.4)	にぶい橙7.5YR7/3			
48	7	水田１	土師器	椀	－	(7.5)	(2.5)	灰白10YR8/2		内・外：ナデ	
49	66	包含層	縄文土器	深鉢	－	－	(4.8)	にぶい黄橙10YR6/3		外：刻み目突帯文	
50	44	包含層	弥 生	壺	－	8.8	(4.1)	にぶい橙5YR7/4		底：ヘラオコシ	
51	111	包含層	土師器	高杯	(19.4)	－	(6.2)	にぶい黄橙10YR6/3		内：工具ナデ、ケズリ	外：被熱
52	24	包含層	須恵器	杯身	－	－	(3.9)	灰N6/			
53	109	包含層	須恵器	杯蓋	(15.0)	－	(2.4)	灰N6.5/1			
54	23	包含層	須恵器	杯身	－	13.4	(3.4)	灰白N7/		底：ナデ	
55	153	包含層	須恵器	杯身	(11.7)	－	(2.8)	灰白N7/1		内・外：ヨコナデ	
56	38	包含層	土師器	杯身	(14.2)	(10.6)	(2.8)	にぶい黄橙10YR6/3		底：ナデ	
57	49	包含層	土師器	椀	12.8	7.0	3.9	にぶい黄橙10YR6/4		底：ナデ	
58	5	包含層	土師器	皿	7.6	(5.4)	1.5	にぶい橙5YR7/4		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
59	22	包含層	土師器	皿	6.8	(4.8)	1.3	にぶい赤褐5YR5/4		内・外：ヨコ方向ヘナデ	
60	154	包含層	須恵器	皿	8.7	6.1	1.6	橙2.5YR6/6		底：ヨコナデ、板日痕	
61	155	包含層	土師器	皿	8.7	5.4	1.7	にぶい橙7.5YR7/4		底：ヘラオコシ	

石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構	器　種	計測値(mm)			重量(g)	時　期	備　考
				最大長	最大幅	最大厚			
Ｓ１	なし	土壙６	石　鏃	21.5	11	3	0.63	弥　生	サヌカイト
Ｓ２	なし	溝16	石　鏃	15	14.5	2.5	0.51	弥生・中	サヌカイト
Ｓ３	なし	溝16	石　鏃	22	15	3	0.76	弥生・中	サヌカイト
Ｓ４	なし	溝37	石　鏃	18	13	2.5	0.58	弥　生	サヌカイト
Ｓ５	なし	溝37	石　鏃	26.5	12	3	0.97	弥　生	サヌカイト
Ｓ６	なし	包含層	石　鏃	15	12.5	2.8	0.47	弥　生	サヌカイト
Ｓ７	なし	溝53	石　錘	65	51	20.5	95.42	古墳・前	

土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土遺構	器　種	計測値(mm)			重量(g)	時　期	備　考
				最大長	最大幅	最大厚			
Ｃ１	なし	13区 溝	土製円盤	28	27.2	13.2	12.4	不　明	

遺構名称新旧対照表

井手天原遺跡

新遺構名	地　区	旧遺構名	時　期
竪穴住居 1	8 区	竪穴住居 1	古墳・前
竪穴住居 2	8 区	竪穴住居 2	古墳・前
竪穴住居 3	8 区	竪穴住居 3	古墳・前
竪穴住居 4	8 区	竪穴住居 4	古墳・前
竪穴住居 5	1 区	竪穴住居 2	古墳・中
竪穴住居 6	1 区	竪穴住居 1	古墳・後
土壙 1	1 区	たわみ状遺構	古墳・前
土壙 2	8 区	土壙 1	古　墳
掘立柱建物 1	8 区	建物 4	古　代
掘立柱建物 2	8 区	なし	古　代
掘立柱建物 3	8 区	建物 6	古　代
掘立柱建物 4	8 区	建物 5	古　代
掘立柱建物 5	8 区	建物	古　代
掘立柱建物 6	8 区	建物 1	中　世
掘立柱建物 7	8 区	建物 3	中　世
柱　穴	1 ・ 8 区	柱　穴	中　世
土壙 3	8 区	たわみ状遺構 2	中　世
土壙 4	8 区	方形土壙	中　世
土壙 5	8 区	たわみ	中　世
土壙 6	8 区	土壙 1	中　世
土壙 7	8 区	土壙 4	中　世
土壙 8	8 区	土壙 2	中　世
土壙 9	8 区	Pit 316	中　世
土壙10	8 区	土壙 3	中　世
土壙11	1 区	土壙 3	中　世
土壙12	1 区	土壙 2	中　世
土壙墓 1	8 区	墓 1	中　世
土壙墓 2	8 区	土壙墓 2	中　世
溝 1	8 区	溝	中　世
水田 1	8 区	水　田	中　世
溝 9	7 区	溝 9	弥生・後
溝10	7 区	溝10	弥生・後
溝11	7 区	溝11	弥生・後
溝12	7 区	溝12	弥生・後
溝13	7 区	溝13	弥生・後
溝14	7 区	溝14	弥生・後
溝15	7 区	溝15	弥生・後
溝16	7 区	溝16	弥生・中
溝17	7 区	溝17	弥生・中
溝18	7 区	溝18	弥生・後
溝19	7 区	溝19	弥生・中
溝20	14区	溝 1	古墳・前
溝21	14区	溝 2	古墳・前
溝22	14区	溝 3	弥　生
溝23	14区	溝 4	古墳・後
溝24	14区	溝 5	古墳・前
溝25	14区	溝 6	古墳・前
溝26	14区	溝 7	古墳・前
溝27	14区	溝 8	古墳・前
溝28	14区	溝 9	古墳・前
溝29	14区	溝10	古墳・前
溝30	14区	溝11	中　世
溝31	14区	溝12	－
溝32	14区	溝13	弥　生
溝33	14区	溝14	弥　生
溝34	14区	溝15	弥生・後
溝35	14区	溝16	弥　生
溝36	14区	溝17	弥生・後
溝37	14区	溝18	弥　生
溝38	14区	溝19	－

総社遺跡（総社調査区）

新遺構名	地　区	旧遺構名	時　期
柱穴列 1	7 区	なし	弥生・後
柱穴列 2	7 区	なし	弥　生
土壙 1	7 区	土壙 1	－
土壙 2	7 区	土壙 2	－
土壙 3	7 区	土壙 3	古墳・後
土壙 4	7 区	土壙 4	－
土壙 5	7 区	土壙 5	弥生・中
土壙 6	7 区	土壙 6	中　世
土壙 7	14区	土壙 1	中　世
土壙 8	14区	土壙 2	中　世
溝 1	7 区	溝 1	古墳・後
溝 2	7 区	溝 2	古墳・前
溝 3	7 区	溝 3	古墳・後
溝 4	7 区	溝 4	弥　生
溝 5	7 区	溝 5	古墳・後
溝 6	7 区	溝 6	古墳・前
溝 7	7 区	溝 7	弥生・後
溝 8	7 区	溝 8	弥　生

総社遺跡（金井戸調査区）

新遺構名	地　区	旧遺構名	時　期
掘立柱建物 1	12区	No.7	中　世
柱穴列 3	12区	No.8	－
土壙 9	12区	No.9	古墳・前
土壙10	12区	No.10	中　世
溝39	12区	No.1	古墳・後
溝40	6 区	No.1	古墳・後
溝41	6 区	No.5 溝	古墳以前
溝42	4 区	溝 1	中　世
溝43	6 区	溝 2	中　世
溝44	6 区	溝 3	中　世
溝45	11区	溝 1	中　世
溝46	11区	溝 2	中　世
溝47	11区	溝 3	古墳・後
溝48	11区	溝 4	古墳・前
溝49	10区	溝 2	中　世
溝50	10区	溝 1	古墳・前
溝51	10区	溝 3	弥　生
溝52	10区	溝 4	弥　生
溝53	3 区	溝 1	古墳・前
溝54	3 区	溝 1	古墳・前
水田 1	3 区	水　田	古　代

1　遠景
（北方久米池古墳墳頂から）

2　遠景（東方長良山から）

3　8区　全景（南から）

図版２

１　竪穴住居１（北西から）

２　竪穴住居２（北西から）

３　竪穴住居３（北東から）

１　竪穴住居１柱穴断面（南東から）

２　竪穴住居２内土壙（南東から）

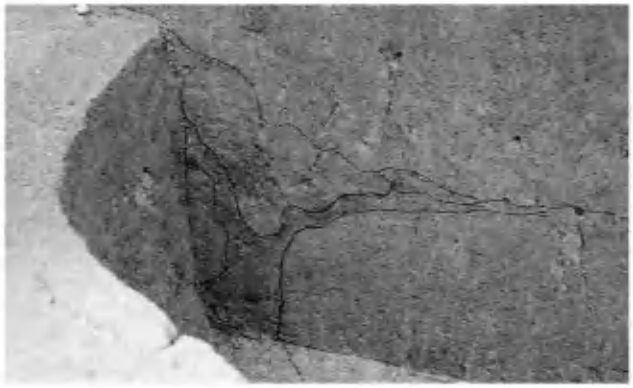
３　竪穴住居２内出土遺物（南東から）

４　竪穴住居２調査中（北から）

５　竪穴住居３検出状況（北東から）

６　竪穴住居３遺物出土状況（北から）

７　竪穴住居３壁面出土遺物（北西から）



８　竪穴住居３土層断面（東から）

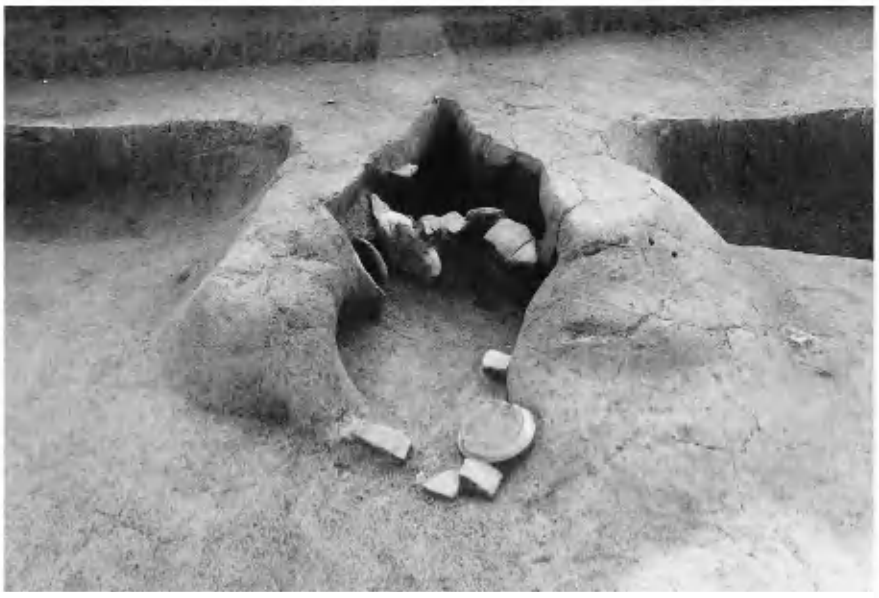
図版４

１　竪穴住居４（北東から）

２　８区　北端下がり状況（南から）

１　１区　全景（北から）

２　竪穴住居５（北東から）



３　竪穴住居５内カマド
（東から）

図版６

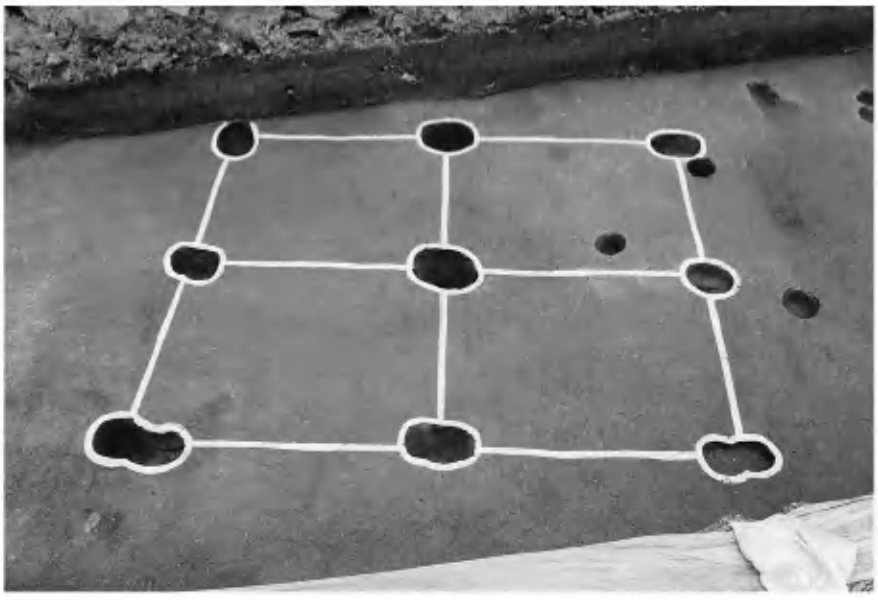
１　竪穴住居６埋土状況
（東から）

２　竪穴住居６（南西から）

３　竪穴住居６内カマド
（南西から）

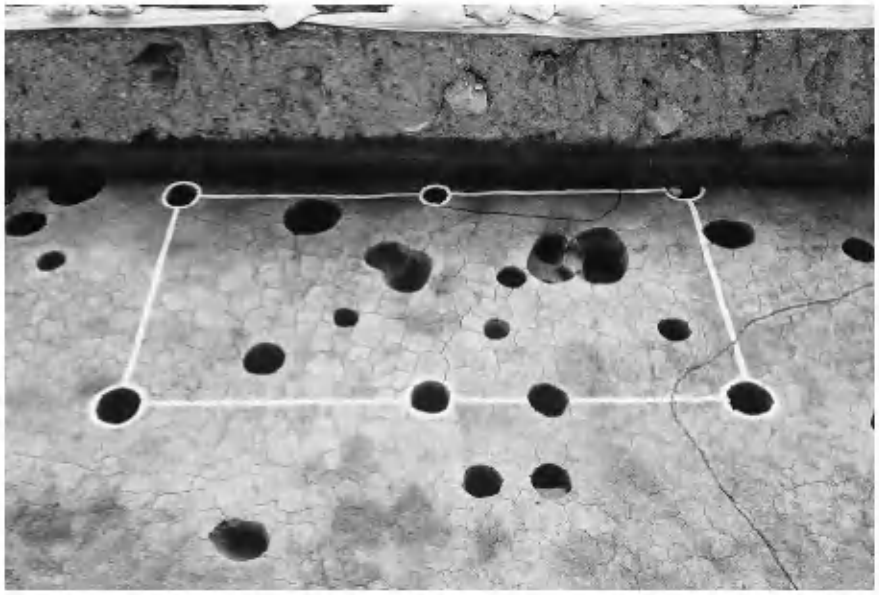
１　８区　古代・中世全景
（北から）

２　掘立柱建物１（北から）



３　掘立柱建物５（東から）

図版８



１　掘立柱建物６
（東から）

２　掘立柱建物３・４
（北から）

３　土壙４（東から）

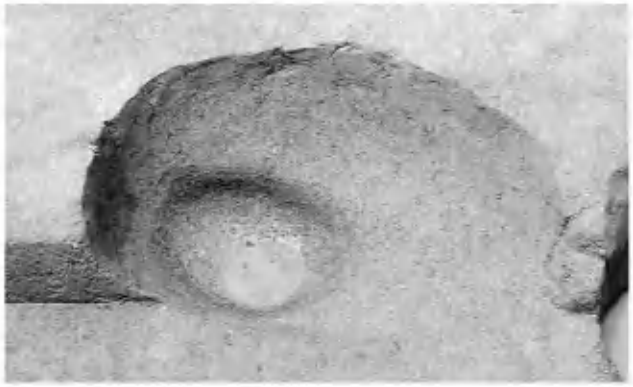
１　土壙10土層断面（東から）

２　土壙10（北から）

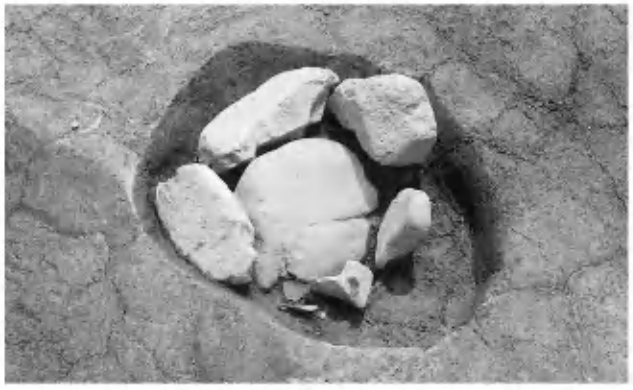
３　土壙９遺物出土状況（北東から）

４　土壙９（北東から）

５　土壙11（北東から）



６　土壙８（東から）



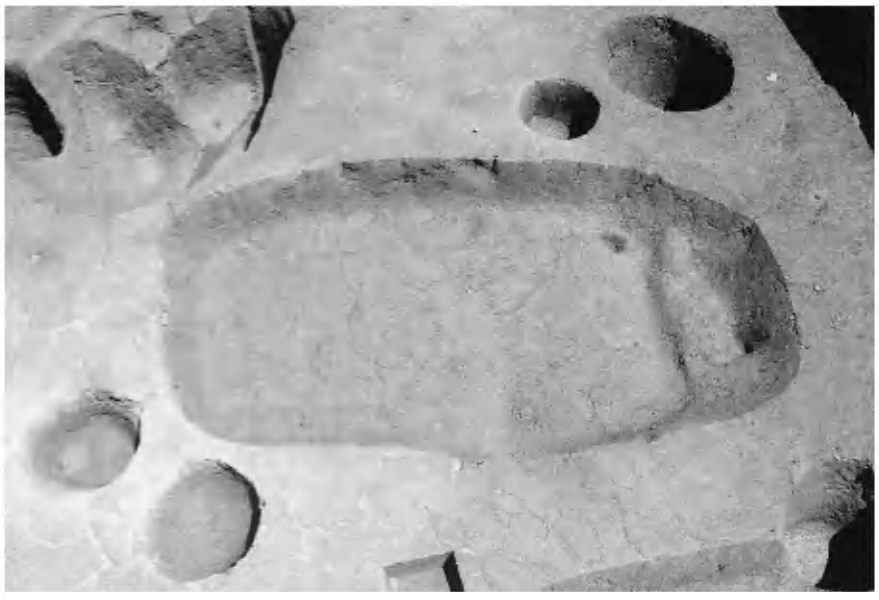
７　土壙７（北東から）

８　土壙２（南から）

図版10

1　土壙墓１（南から）

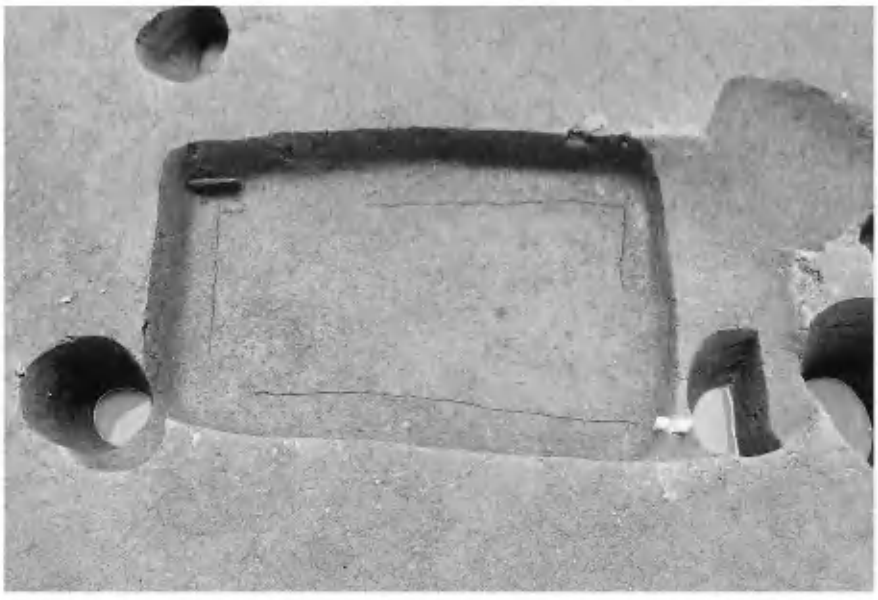
2　土壙墓１遺物出土状況
（東から）



3　土壙墓１完掘（南から）

1　土壙墓２（南西から）

2　土壙墓２遺物出土状況
（南から）



3　土壙墓２完掘（北から）

図版12

1　７区北半　上層全景
（南から）

2　７区　溝４
（南東から）

3　７区北半　完掘状況
（南から）

1　14区北半　溝群（南から）

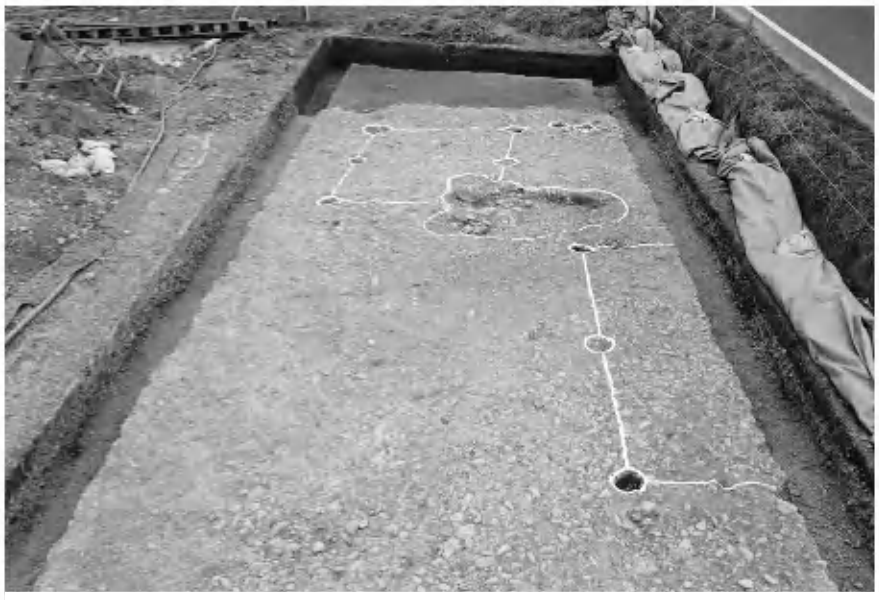
2　14区　溝22・23・36付近
（南から）

3　14区南半　溝群（北から）

図版14

1　10区南半（南から）

2　11区北端　溝群
（南から）



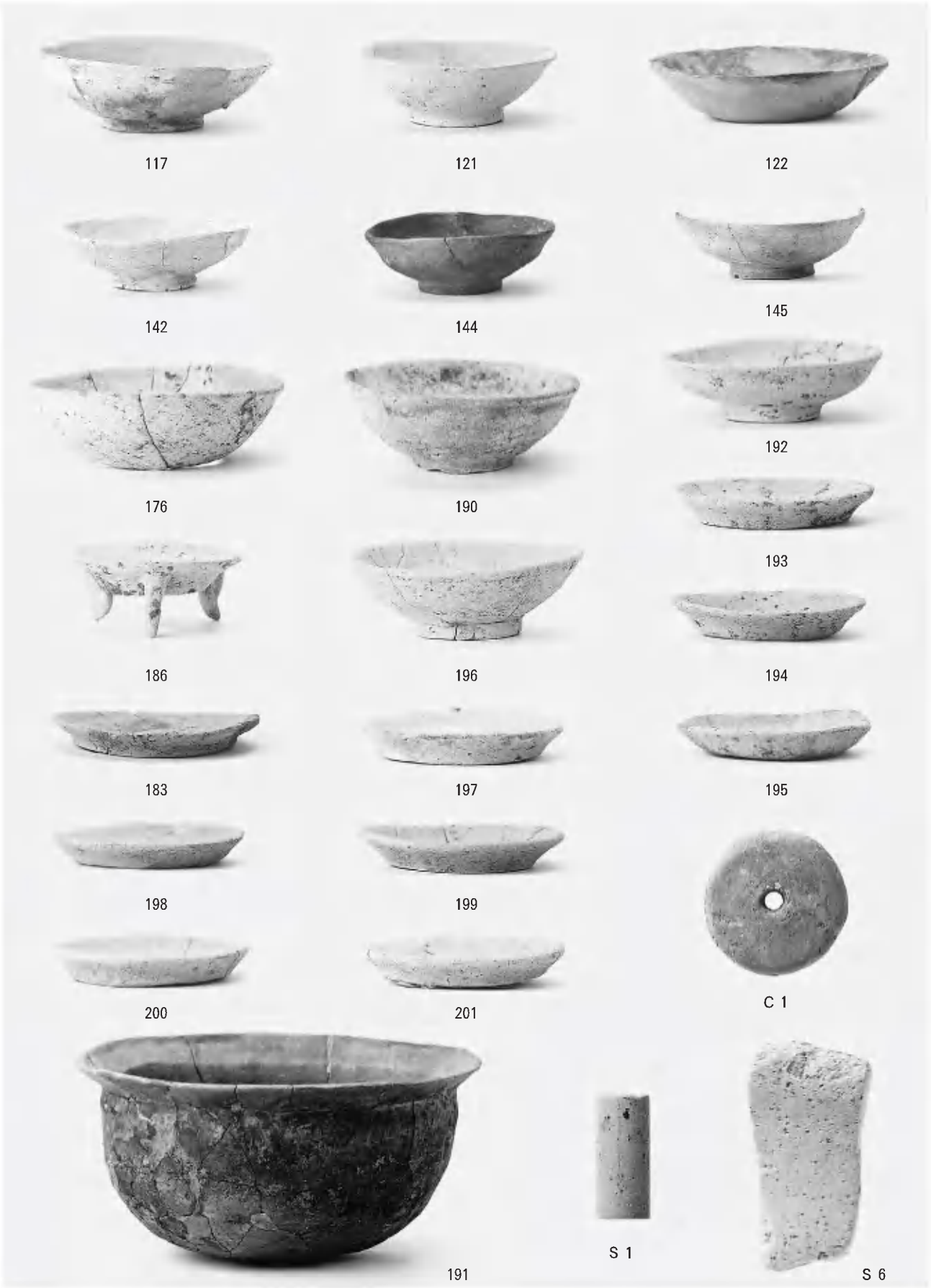
3　12区　掘立柱建物１
・柱穴列３
・土壙９・10
（北から）

1　３区　全景（北から）

2　３区　溝53・54
（北東から）

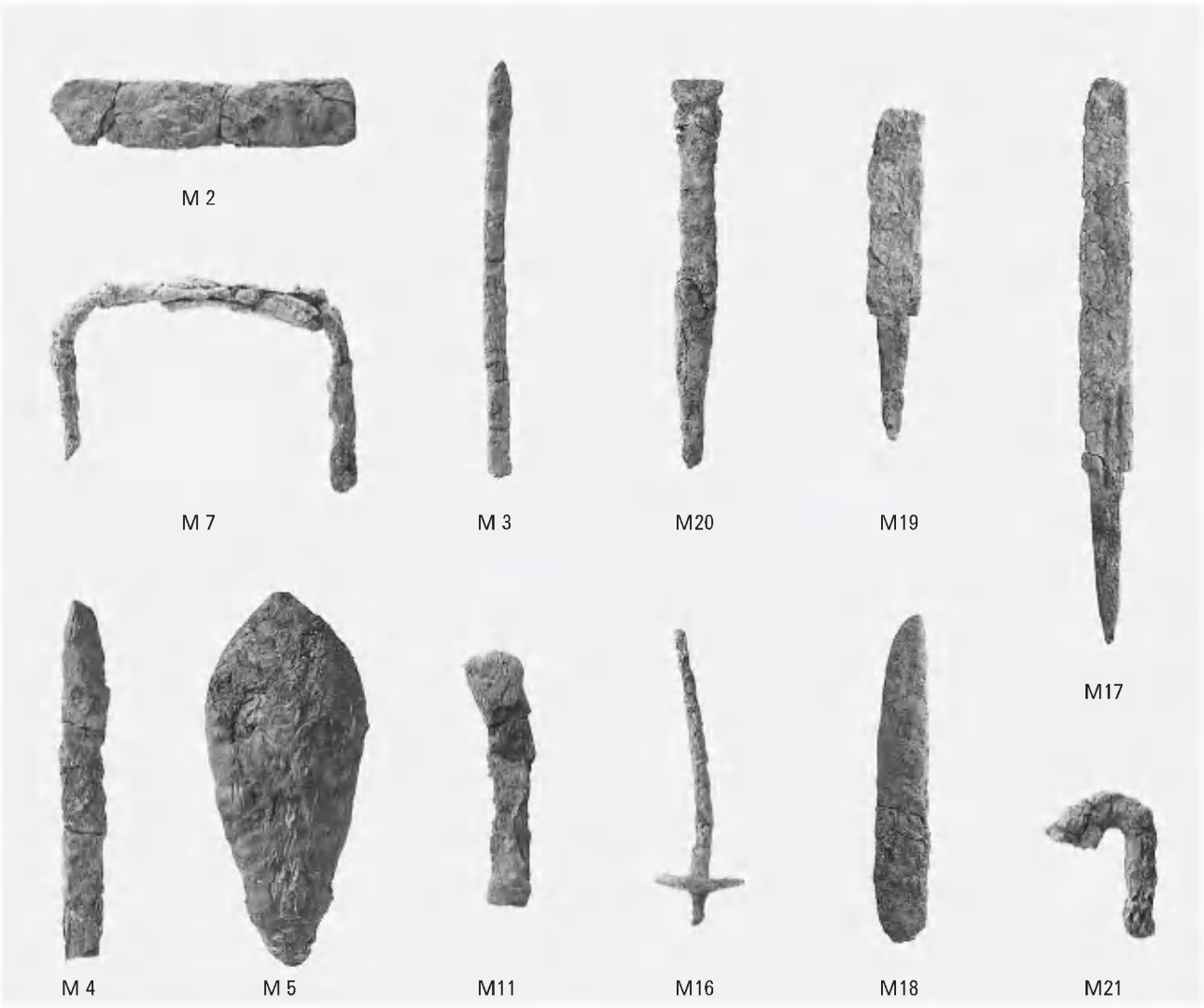
図版16

井手天原遺跡出土遺物①

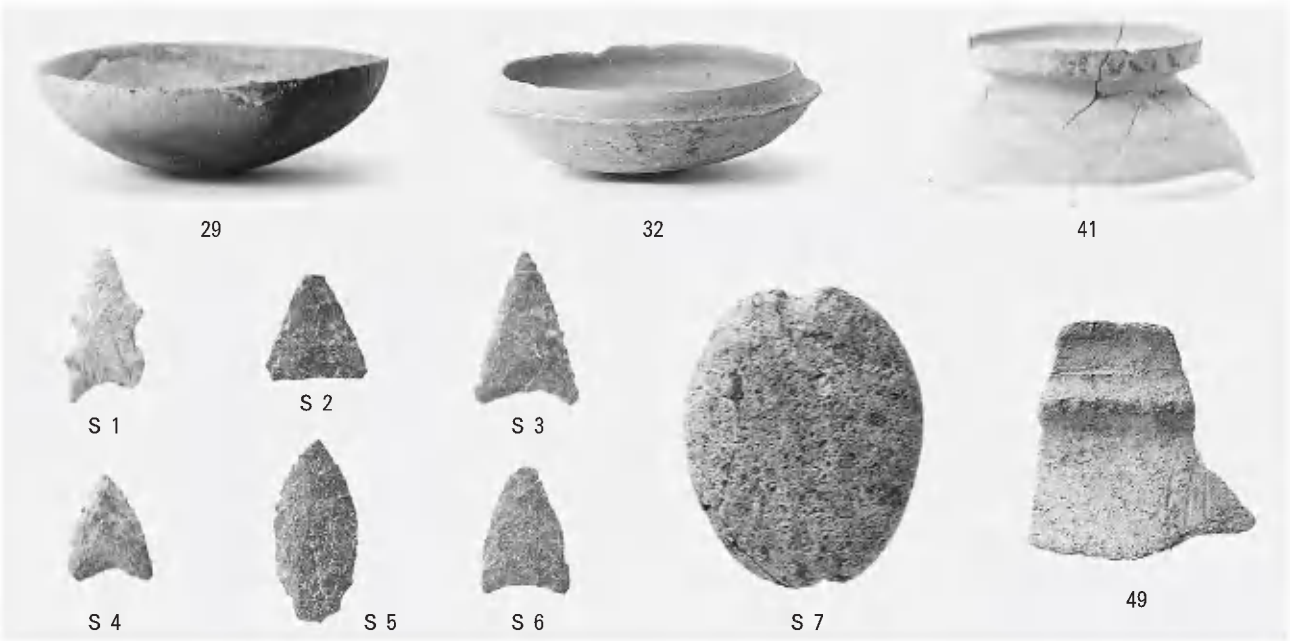


井手天原遺跡出土遺物②

図版18



1　井手天原遺跡出土遺物③



2　総社遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いでてんばらいせき　そうじゃいせき
書名	井手天原遺跡　総社遺跡
副書名	一般国道429号道路改築に伴う発掘調査
巻次	Ⅲ
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	198
編著者名	山磨康平・内藤善史・二宮治夫・光永真一・亀山行雄・重根弘和
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2006年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
いでてんばらいせき 井手天原遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 いで 井手	33208	852	34度 40分 33秒	133度 46分 10秒	20040401～ 20040930	1,580	道路改築
そうじゃいせき 総社遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 かないど 金井戸 そうじゃ 総社	33208	853	34度 40分 49秒	133度 46分 24秒	20020101～ 20021231 20040401～ 20040930	6,860	道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井手天原遺跡	集落 墓	古墳時代 古代 中世 近世	竪穴住居 建物 土壙 土壙墓 溝	土師器 須恵器 陶磁器 土製品 石器 瓦 鉄滓	・古墳時代全般の集落
総社遺跡	集落 水田	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	建物 溝 水田	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	・弥生時代以降の多数の溝群

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 198

井手天原遺跡
総 社 遺 跡

一般国道429号道路改築に伴う発掘調査Ⅲ

平成18年 2 月28日　印刷
平成18年 2 月28日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325-3
発行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2-4-6
印刷　株式会社 三門印刷所
　　岡山市高屋116-7

R100
本文用紙は上質配合率100%再生紙を使用しています。